

圓歸國旅費六百五十拾圓

- 一 一名ハ明治二十六年六月十日ヨリ同二十九年七月十日マテノ期限俸給月額參百七拾圓歸國旅費六百五十拾圓
- 一 一名ハ明治二十六年二月四日ヨリ同二十九年七月十日マテノ期限俸給月額參百七拾圓歸國旅費六百五十拾圓
- 一 一名ハ明治二十六年四月一日ヨリ同二十九年七月十日マテノ期限俸給月額參百圓歸國旅費六百五十拾圓
- 一 一名ハ明治二十六年四月一日ヨリ同二十九年七月十日マテノ期限俸給月額百貳拾五圓
- 一 一名ハ明治二十六年十月四日ヨリ同二十九年七月十日マテノ期限俸給月額參百七拾圓歸國旅費六百五十拾圓
- 一 一名ハ明治二十六年十月二十二日ヨリ同二十九年七月十日マテノ期限俸給月額參百五十拾圓歸國旅費六百五十拾圓

第三十六

高等商業學校ニ於テ備外國人教師二名滿期ニ付更ニ備繼左ノ契約ヲ結フコトヲ得

- 一 一名ハ明治二十八年十一月十二日ヨリ同三十一年七月十一日マテノ期限ヲ以テ俸給月額參百圓ヲ支給シ滿期解備ノ際歸國旅費六百圓ヲ支給シ且俸給及旅費支給ノ當時銀貨壹圓ニ付英貨參志以下ニ騰貴セントキハ其俸給ノ半額及旅費ノ全額ニ對シ其差額ヲ加給ス
- 一 一名ハ明治二十八年七月一日ヨリ同三十一年六月三十日マテノ期限ヲ以テ俸給月額百七拾五圓ヲ支給ス

第三十七

第一高等學校ニ於テ備外國人教師五名滿期ニ付更ニ備繼明治二十八年四月一日ヨリ同三十一年九月十日マテノ期限ヲ以テ俸給月額貳百圓ヲ支給スルノ契約ヲ結フコトヲ得

第三十八

第二高等學校ニ於テ備外國人教師二名滿期ニ付更ニ代員ヲ備入左ノ契約ヲ結フコトヲ得

- 一 一名ハ明治二十八年四月一日ヨリ同三十年三月三十一日マテノ期限ヲ以テ俸給月額貳百圓借家料月額貳拾圓滿期解備ノ際歸國旅費百圓ヲ支給ス
- 一 一名ハ明治二十八年四月一日ヨリ同三十年三月三十一日マテノ期限ヲ以テ俸給月額百五十拾圓借家料月額拾五圓滿期解備ノ際歸國旅費百圓ヲ支給ス

第三十九

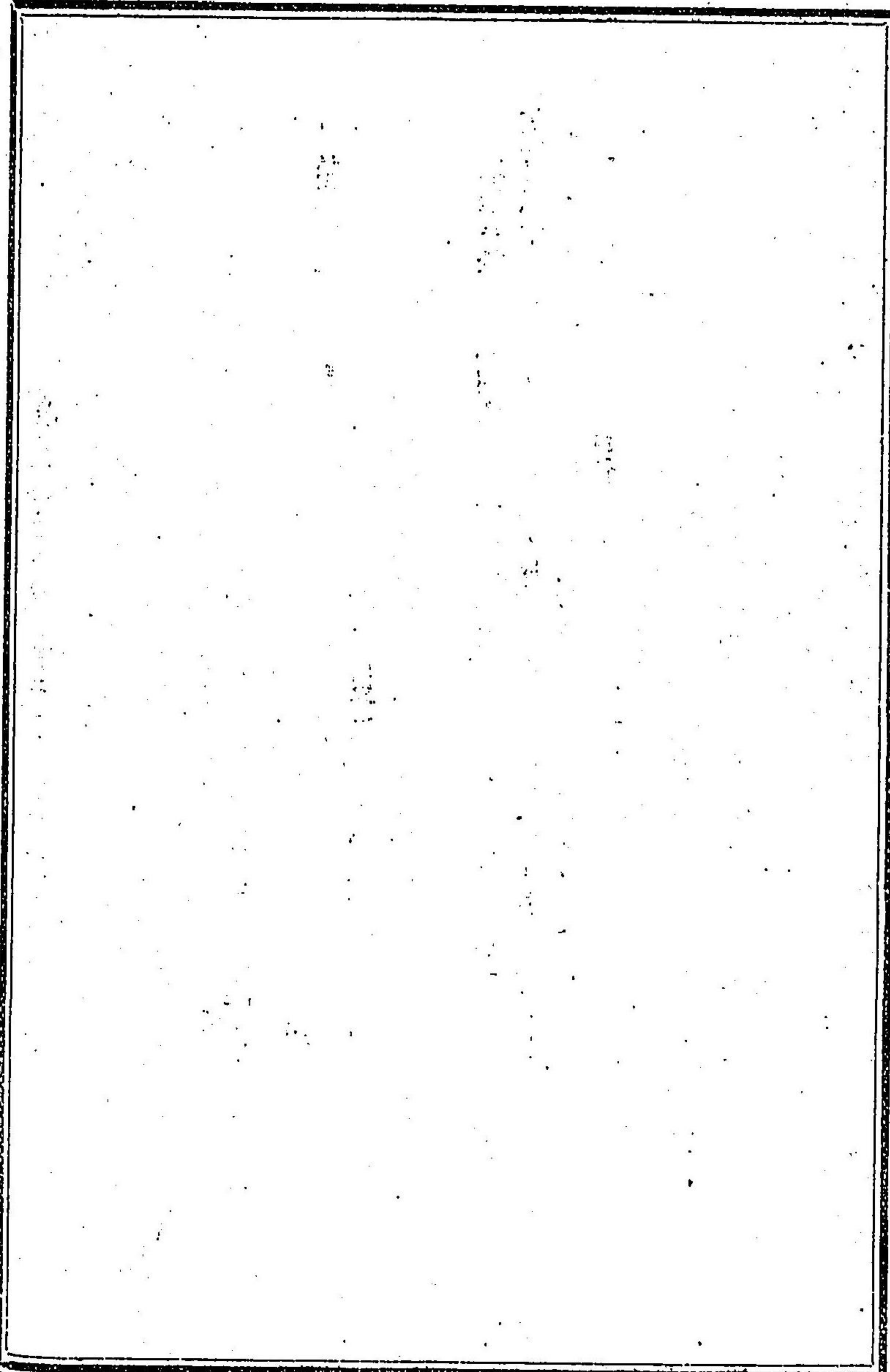
第五高等學校ニ於テ備外國人教師一名滿期ニ付更ニ備繼明治二十八年四月一日ヨリ同二十九年七月三十一日マテノ期限ヲ以テ俸給月額貳百圓ヲ支給スルノ契約ヲ結フコトヲ得

第四十

山口高等學校ニ於テ備外國人教師一名滿期ニ付更ニ代員ヲ備入明治二十八年七月二十二日ヨリ同三十年七月二十一日マテノ期限ヲ以テ俸給月額貳百圓ヲ支給シ且家具ヲ備ヘサル家屋一字ヲ貸與シ滿期解備ノ際歸國旅費貳百五十拾圓ヲ支給スルノ契約ヲ結フコトヲ得

第四十一

鹿兒島高等中學造士館ニ於テ備外國人教師一名滿期ニ付更ニ代員ヲ備入明治二十八年四月一日ヨリ同二十九年六月三十日マテノ期限ヲ以テ俸給月額百五十拾圓ヲ支給シ且家具ヲ備ヘサル家屋一字ヲ貸與シ滿期解備ノ際歸國旅費百圓ヲ支給スルノ契約ヲ結フコトヲ得



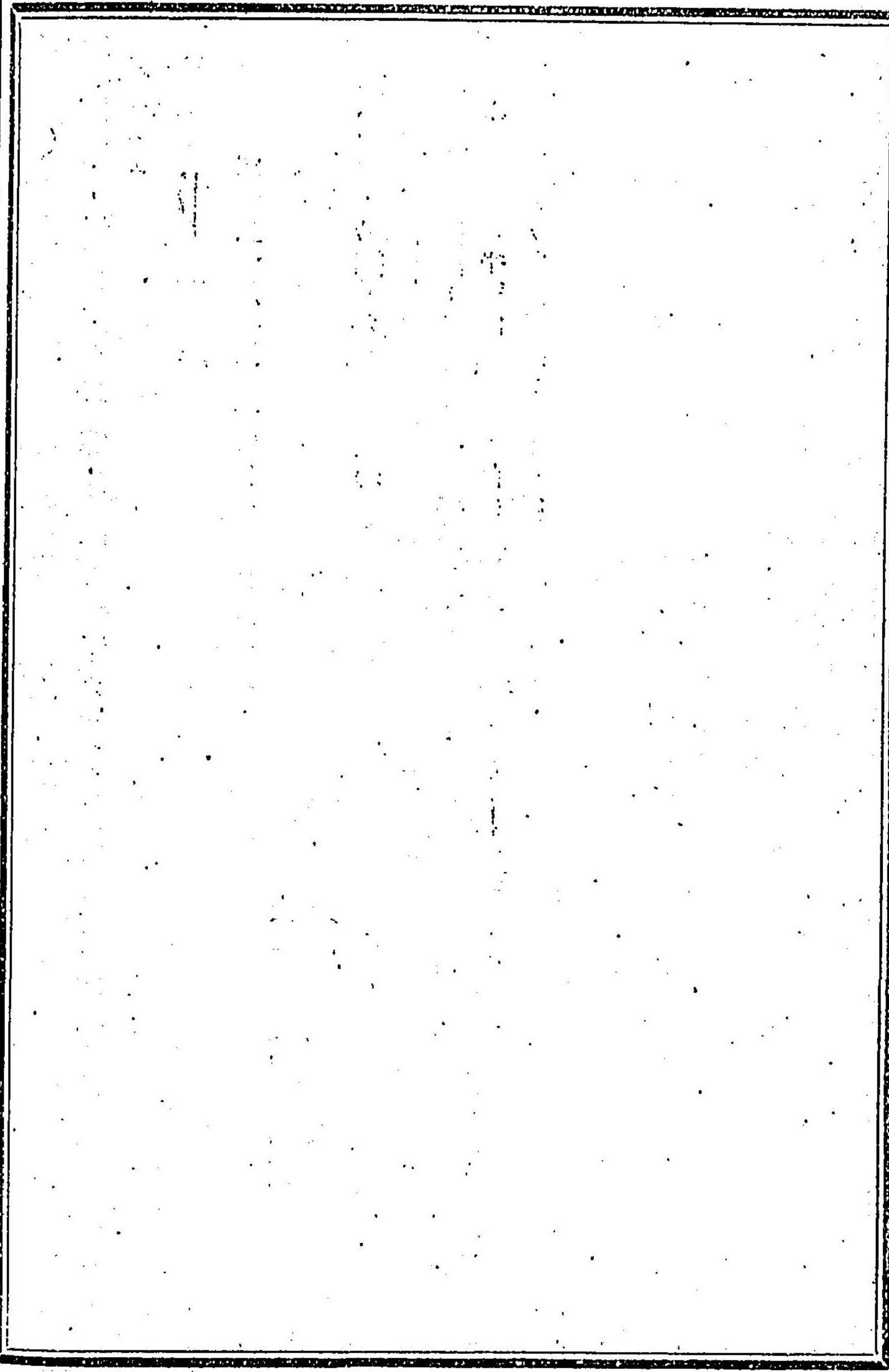
朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル豫算外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲナスヲ要スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年三月十四日(官報三月十六日)

内閣總理大臣 伊藤博文
大藏大臣 渡邊 國武
文部大臣 侯爵西園寺公望

豫算外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲナスヲ要スル件
萬國測地學協會ニ於テ萬國天文臺四箇所設置ニ付明治二十八年年度以後ニ於テ該會加盟費從來ノ支出額ト増加支出額トヲ合シテ一箇年金貨千參百八拾五圓六拾貳錢以內ヲ負擔シ且前記天文臺四箇所ノ内一箇所ハ帝國内ニ設置ニ付敷地買上代及建築費ヲ負擔シ天文臺助手俸給一箇年千五百圓以內ヲ支出スルノ契約ヲ結フコトヲ得



法令全書

勅令

朕海軍高等武官任用條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年一月四日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文
海軍大臣伯爵西郷從道

勅令第一號(官報一月七日)

明治二十六年勅令第二百五十號海軍高等武官任用條例中左ノ通改正ス

第二條ニ左ノ但書ヲ加フ

但戰時若クハ事變ニ際シテハ試験ヲ用井ス海軍高等武官候補生規則第十二條ノ報告ニ依リ審査ノ上本官ニ任用スヘキ者ニ就キ候補名簿ヲ作ルコトヲ得

第三條ニ左ノ一項ヲ加フ

第二條但書ニ依リ調製スル候補名簿ノ列序ハ候補生ノ席次ニ依ル

第十一條ノ次ニ左ノ二條ヲ加ヘ第十二條第十三條ヲ順次繰下ク

第十二條 左ノ場合ニ在テハ定規ニ依ラス候補生ヲ本官ニ任用スルコトヲ得

一 敵前ニ在テ殊勳ヲ奏シ首將之ヲ全軍ニ布告セシ者

二 戰地ニ在テ人員缺乏シ補除定規ヲ履ム能ハサルトキ

第十三條 與軍ノ日ニ方リ戰地ニ臨ムノ首將ニハ候補生ヲ本官ニ任用スルノ權ヲ假スコトアルヘシ

〔參照〕

勅令第二百五十號海軍高等武官任用條例明治二十六年十二月十八日官報抄録
第二條 候補生ハ一箇年以上實務練習ノ後學術及實務試験ヲ行ヒ合格シタル者ニ就キ候補名簿ヲ作り本官ニ缺員アル毎ニ候補名簿ノ列序ニ從ヒ本官ニ任用ス
第三條 候補名簿ノ列序ハ學術及實務試験ノ成績順序ニ依リ之ヲ定ム

朕敍兵事務條例中旅管徵兵醫官大隊區徵兵醫官警備隊區徵兵醫官ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年一月八日

海軍大臣兼
陸軍大臣 伯爵西郷從道
內務大臣子爵野村 靖

勅令第二號(官報一月十一日)
戰時又ハ事變ニ際シテハ徵兵事務條例第十五條ノ規程ニ依ラス旅管徵兵醫官ハ陸軍一等軍醫ヲ以テ之ニ充テ大隊區徵兵醫官又ハ警備隊區徵兵醫官ノ職務ハ雇員ヲシテ之ニ從事セシムルコトヲ得但雇員ハ學術開業免狀ヲ所持スル者ニ限ル
雇員ヲシテ大隊區徵兵醫官又ハ警備隊區徵兵醫官ノ職務ニ從事セシムルトキハ徵兵體格ノ等位ノ適否ハ旅管徵兵醫官之ヲ判定ス

朕陸軍士官下士特別補充條例中改正追加ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年一月八日

陸軍大臣伯爵西郷從道

勅令第三號(官報一月十一日)

陸軍士官下士特別補充條例中左ノ通改正追加ス

第二條ニ左ノ項ヲ加フ

五 特務曹長ニシテ曹長ニ任セラレタル日ヨリ一年以上六箇月ヲ過タル者

第五條中「戰時」以下「必要ニ應シ」迄ヲ「勳員ヲ行ヒタル師團ハ必要ニ應シ左ニ掲グル者ヲ」ノ二字ニ改ム

第十二條中「豫備見習士官」下ニ「特務曹長」四字及「下士」下ニ「或豫備後備特務曹長」九字ヲ加フ

第十四條ノ次ニ左ノ一條ヲ加フ

第十五條 特務曹長ハ曹長ニシテ一等軍曹ニ任セラレタル日ヨリ一年以上六箇月ヲ過タル者ノ中ヨリ補充スルコトヲ得

豫備後備ノ曹長ヨリ特務曹長ニ任セラレタル者ノ服役及其ノ期限ハ曹長タリシ時ノ儘トシ之ヲ變更セズ

〔參照〕

勅令第百三十號陸軍士官下士特別補充條例(明治二十七年七月三十日官報抄録)
第二條 士官ハ左ニ掲グル者ノ中ヨリ補充スルコトヲ得但補充ヲ爲スヘキ時期及區分ハ陸軍大臣ノ指定ニ依ル

一 各兵科現役見習士官

二 見習醫官及見習藥劑官

三 見習獸醫官

四 豫備見習士官

第五條 戰時若クハ事變ニ際シ召集ニ應シタル者ニシテ左ニ掲グル者ハ必要ニ應シ豫備見習士官ト爲シ士官ノ勤務ニ服セシムルコトヲ得

一 一年志願兵終末試験及第證書ヲ所持スル者

二 士官適任證書ヲ所持スル豫備後備准士官下士

習職醫官タリシ者ニ在テハ徵兵令第六條及第十一條ノ規程ニ、士官適任證書ヲ所持スル准士官下士ニ在テハ豫備後備將校補充條例第十五條及第十六條ノ規程ニ從フモノトス

朕海軍監獄看守長及海軍監獄看守服制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年一月八日

勅令第四號(官報一月十一日)

海軍監獄看守長及海軍監獄看守服制別表ノ通定ム

附則

本令ハ明治二十八年四月一日ヨリ施行ス

(別表)

海軍大臣伯耆西郷從道

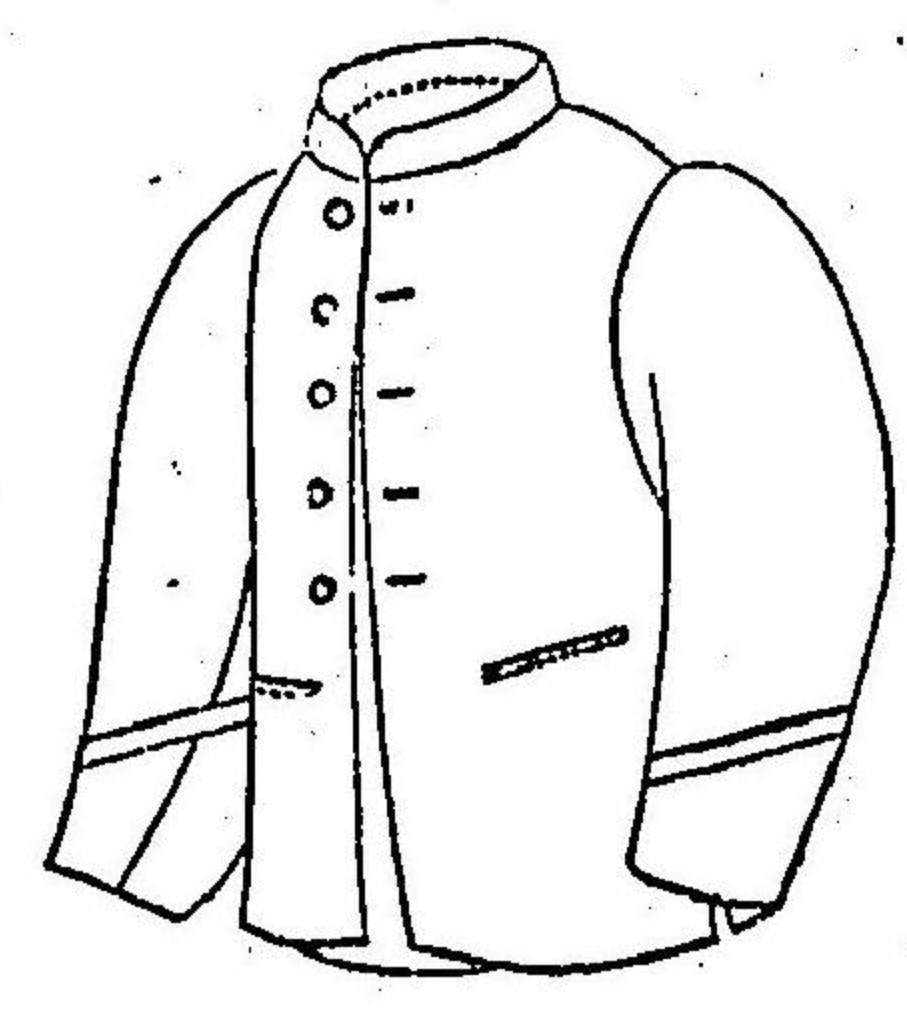
海軍監獄看守長及海軍監獄看守服制表		海軍監獄看守	
地質	紺絨或ハ紺「セルジ」	地質	紺「セルジ」或ハ紺絨木綿
製式	長「ジャケット」製堅韌胸一重左右下部ニ各一箇ノ襟シヲ附ス圖ノ如シ	製式	同上
鈕釦	金色櫻花徑七分五箇一行圖ノ如シ	鈕釦	黒角徑五分五箇一行圖ノ如シ
袖章	幅五分ノ銀線一條ヲ附ス	袖章	幅三分ノ黃絨線一條ヲ附ス
袴	紺絨或ハ紺「セルジ」	袴	同上

海軍監獄看守長及海軍監獄看守服制表		海軍監獄看守	
地質	紺絨	地質	同上
製式	圓形ニシテ黒革ノ肩庇ヲ附ス圖ノ如シ	製式	同上
刀	徑一寸銀色ノ監獄章中央ニ緋ヲ附シ幅二分五厘ノ銀線一條ヲ纏フ圖ノ如シ	刀	徑一寸銀色ノ監獄章中央ニ緋ヲ附ス圖ノ如シ
刀	柄黒革眞鍮線卷キ長サ五寸柄黒革長サ二尺三寸鐳頭眞鍮線卷キ長サ五寸柄黒革長サ二尺五分鐳頭眞鍮線卷キ長サ五寸柄黒革長サ二尺五分	刀	柄黒革眞鍮線卷キ長サ五寸柄黒革長サ二尺三寸鐳頭眞鍮線卷キ長サ五寸柄黒革長サ二尺五分
刀	分銀色ノ櫻花ヲ附ス圖ノ如シ	刀	分銀色ノ櫻花ヲ附ス圖ノ如シ
衣	白「リンネル」或ハ晒絨木綿	衣	晒絨木綿
夏	長「ジャケット」製堅韌胸一重左右下部ニ各一箇ノ襟シヲ附ス	夏	同上
夏	鈕釦 金色櫻花徑七分五箇一行	夏	白角徑五分五箇一行
夏	袖章 幅五分ノ白線一條ヲ附ス	夏	幅三分ノ白線一條ヲ附ス
夏	地質 白「リンネル」或ハ晒絨木綿	夏	晒絨木綿
夏	製式 普通ノ製式	夏	同上
夏	袴 普通ノ製式	夏	同上
外	地質 紺絨	外	同上
外	製式 折襟胸二重後襟ヲ附シ左右下部ニ各一箇ノ襟シヲ附ス圖ノ如シ	外	同上
外	鈕釦 金色櫻花徑八分五箇宛二行	外	黒角徑八分五箇宛二行
外	袖章 幅七分白絨一條ヲ附ス	外	幅五分黃絨一條ヲ附ス
外	帽 幅一分緋絨長サ各一寸白絨製監獄章中央ニ緋ヲ附ス圖ノ如シ	外	同上

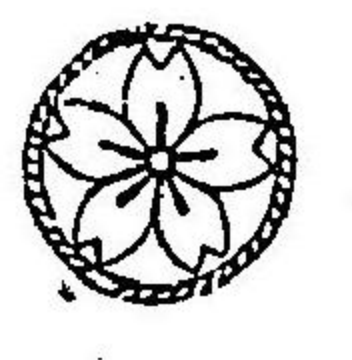
明治二十八年一月 勅令 第四號

海軍監獄看守長

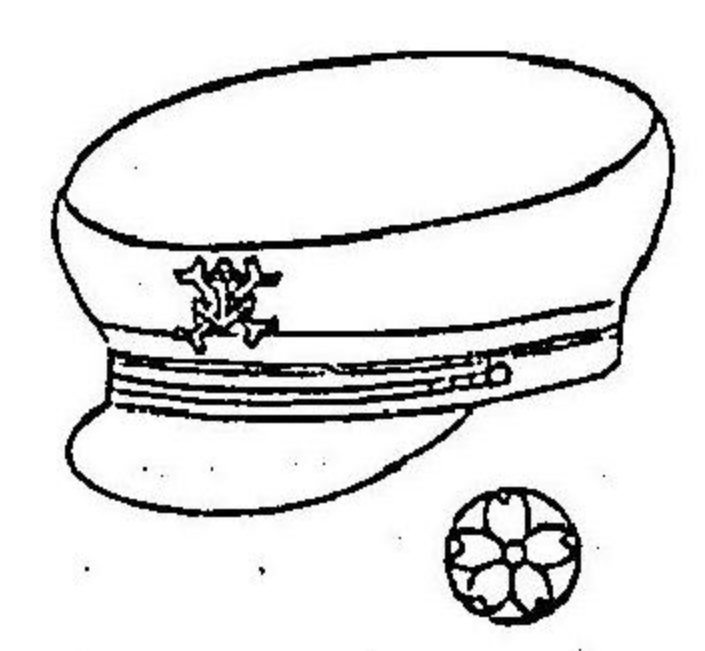
衣



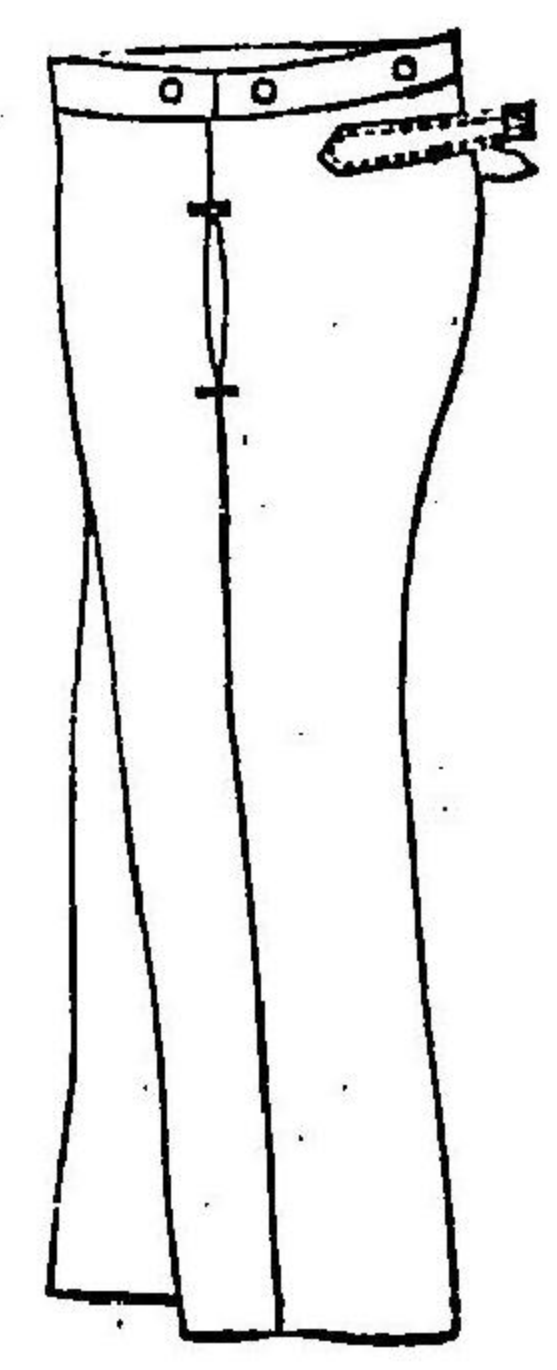
鈕釦



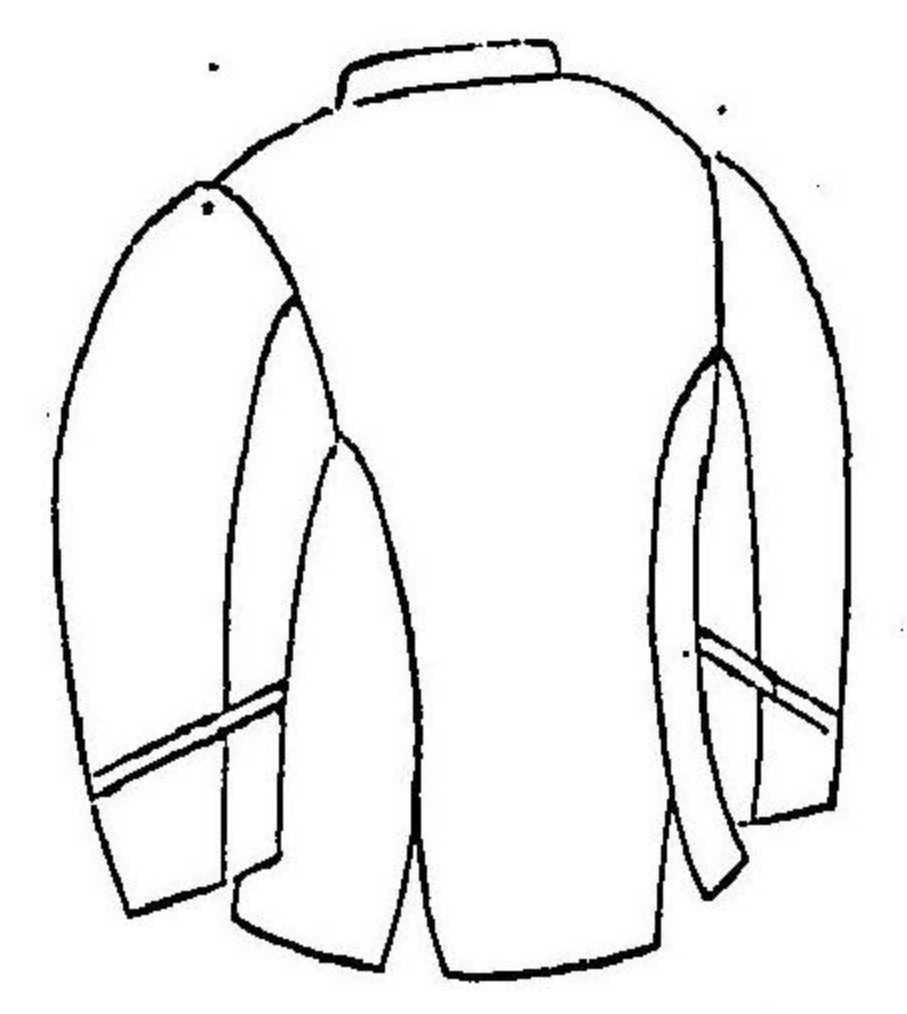
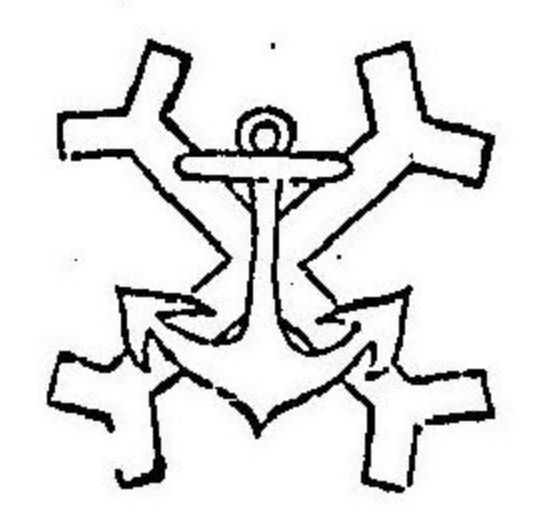
帽



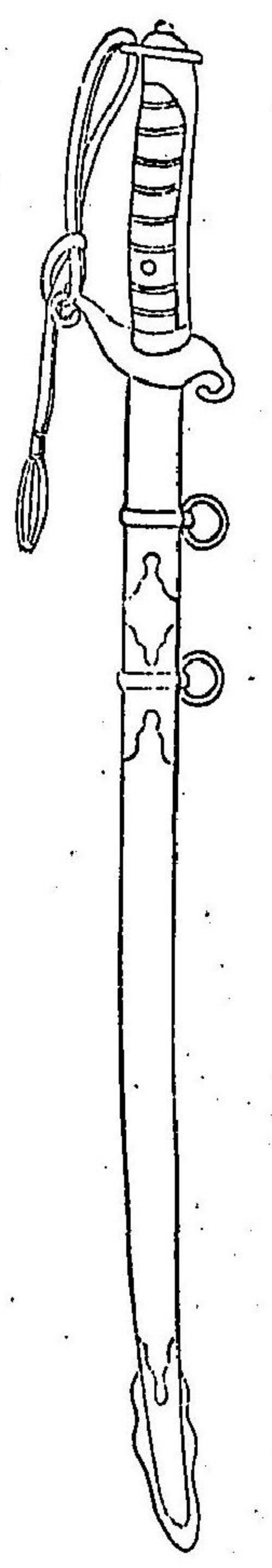
袴



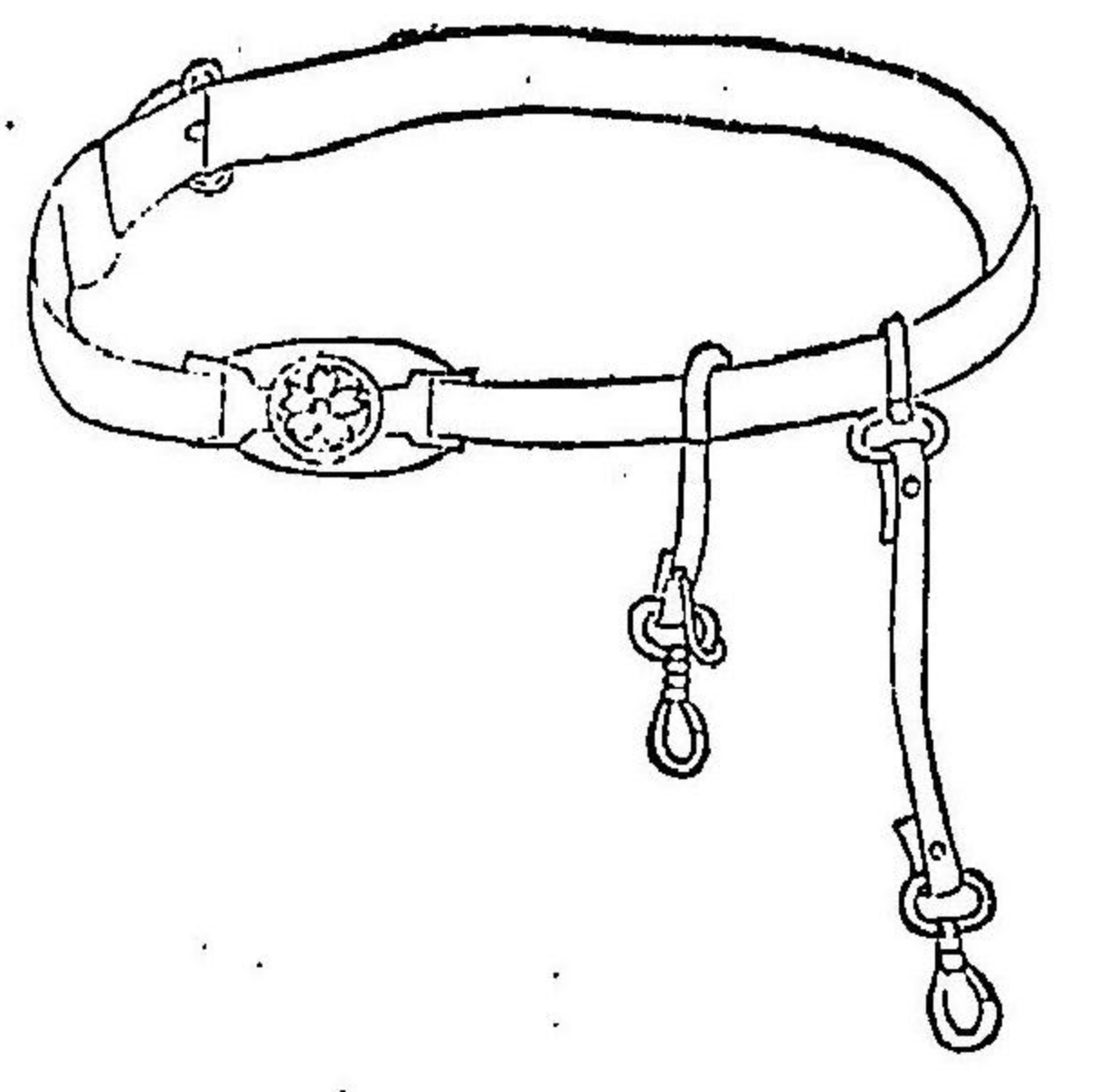
章徽



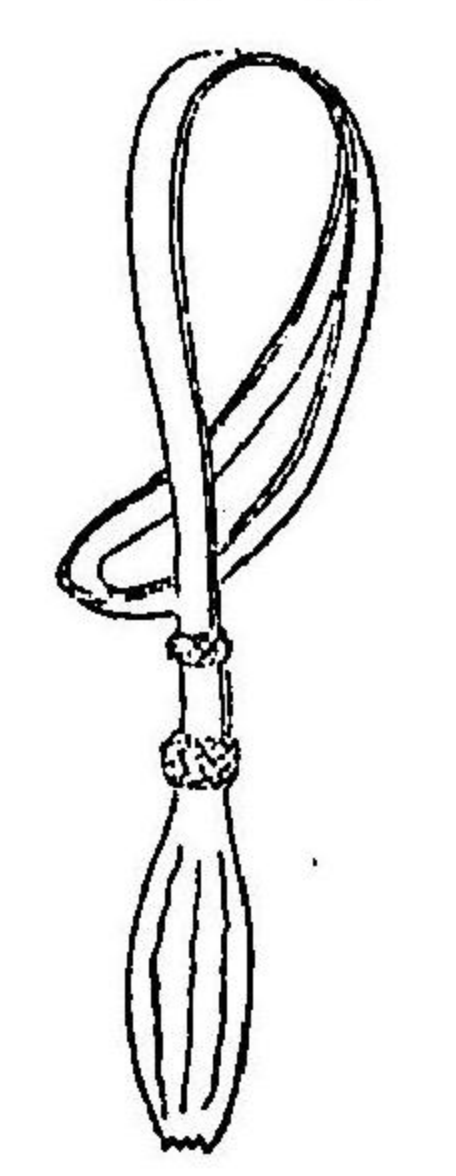
刀



帶刀



緒刀

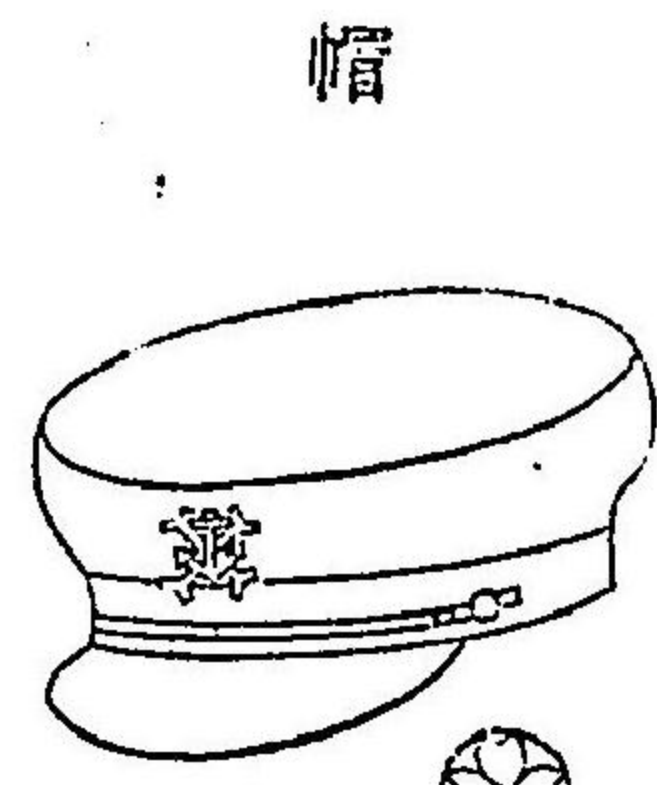


明治二十八年一月 勅令 第四號

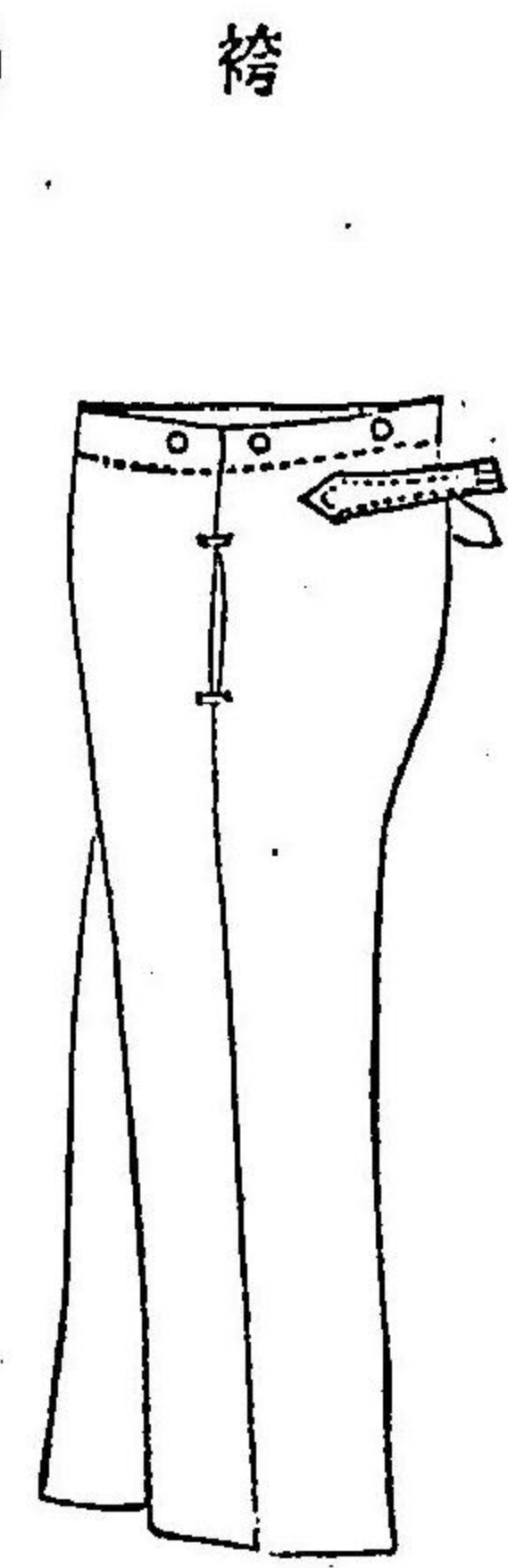
七

六

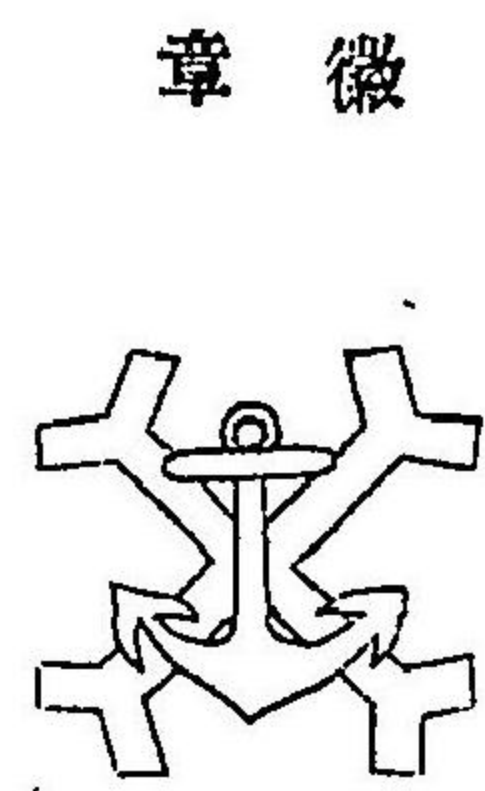
明治二十八年二月 勅令 第四號



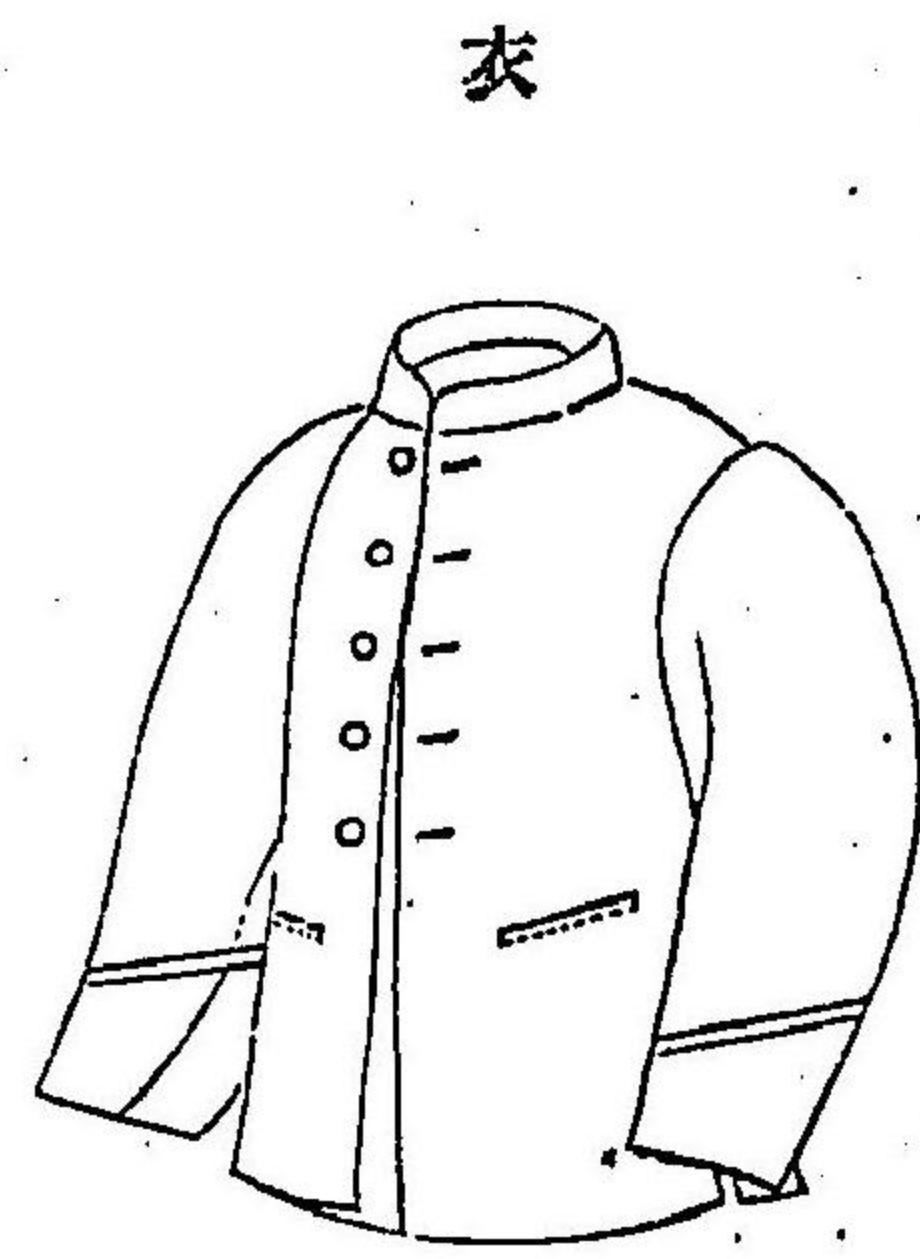
帽



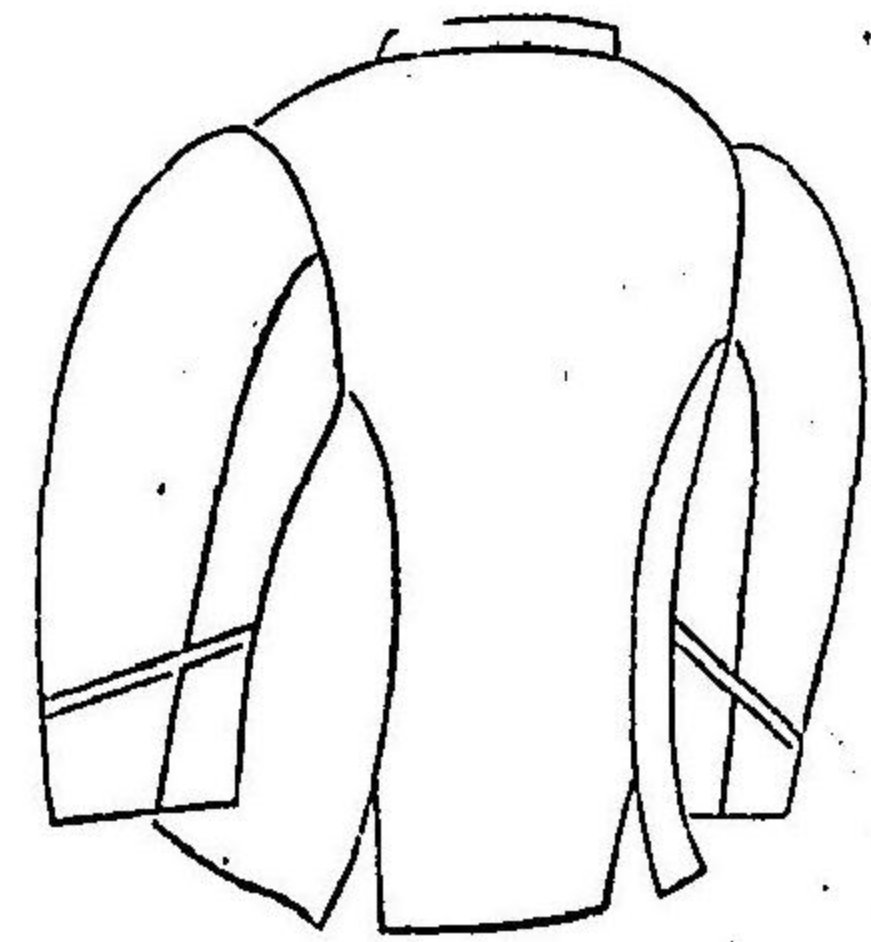
袴



章徽

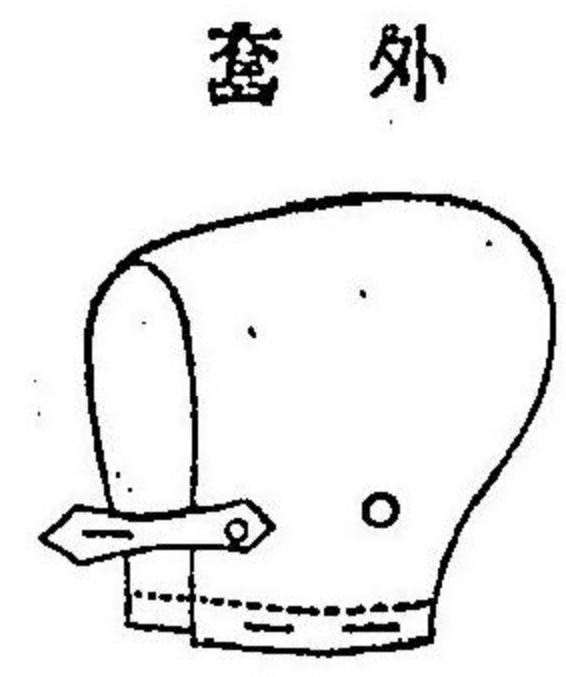


衣

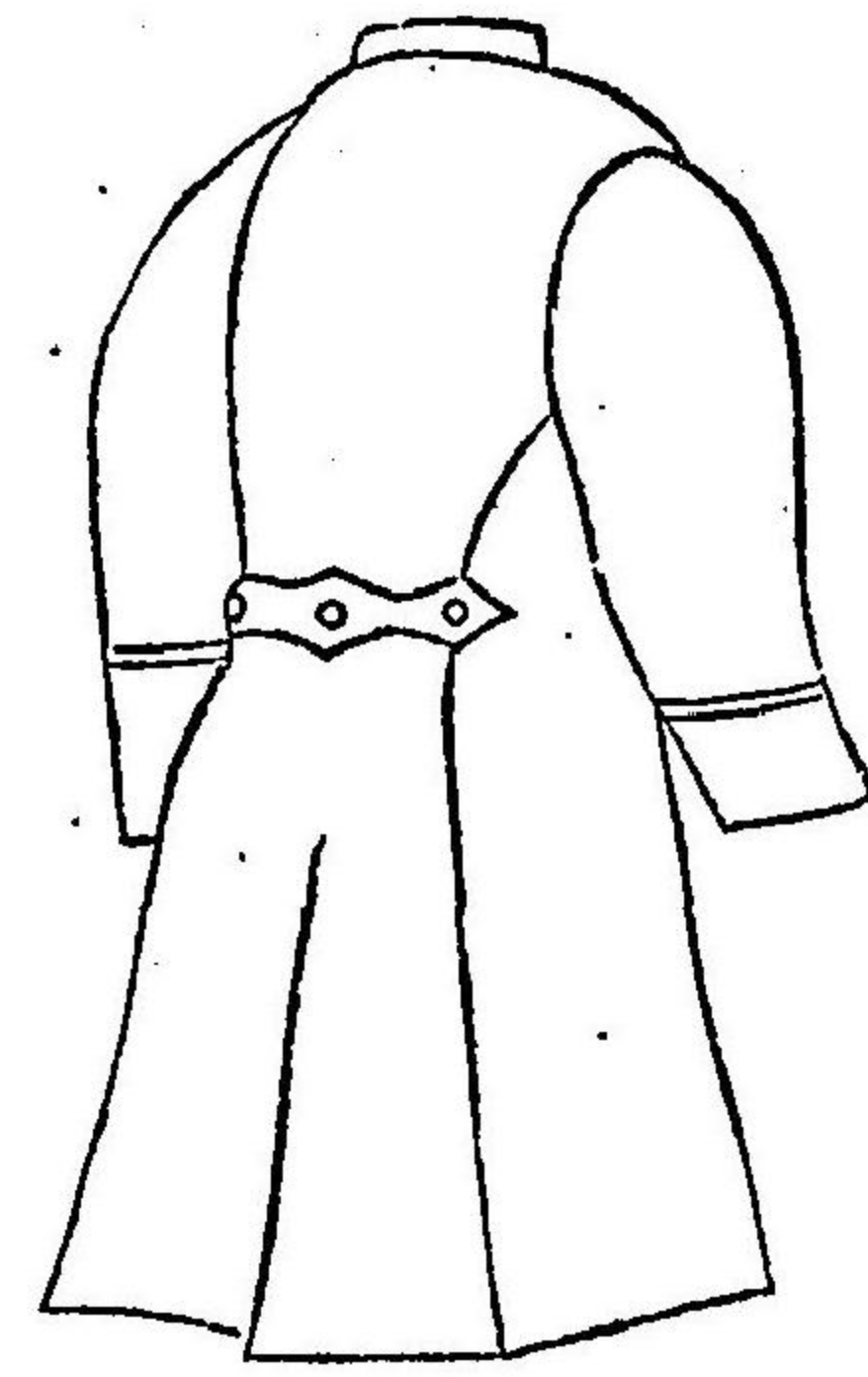


海軍監獄看守

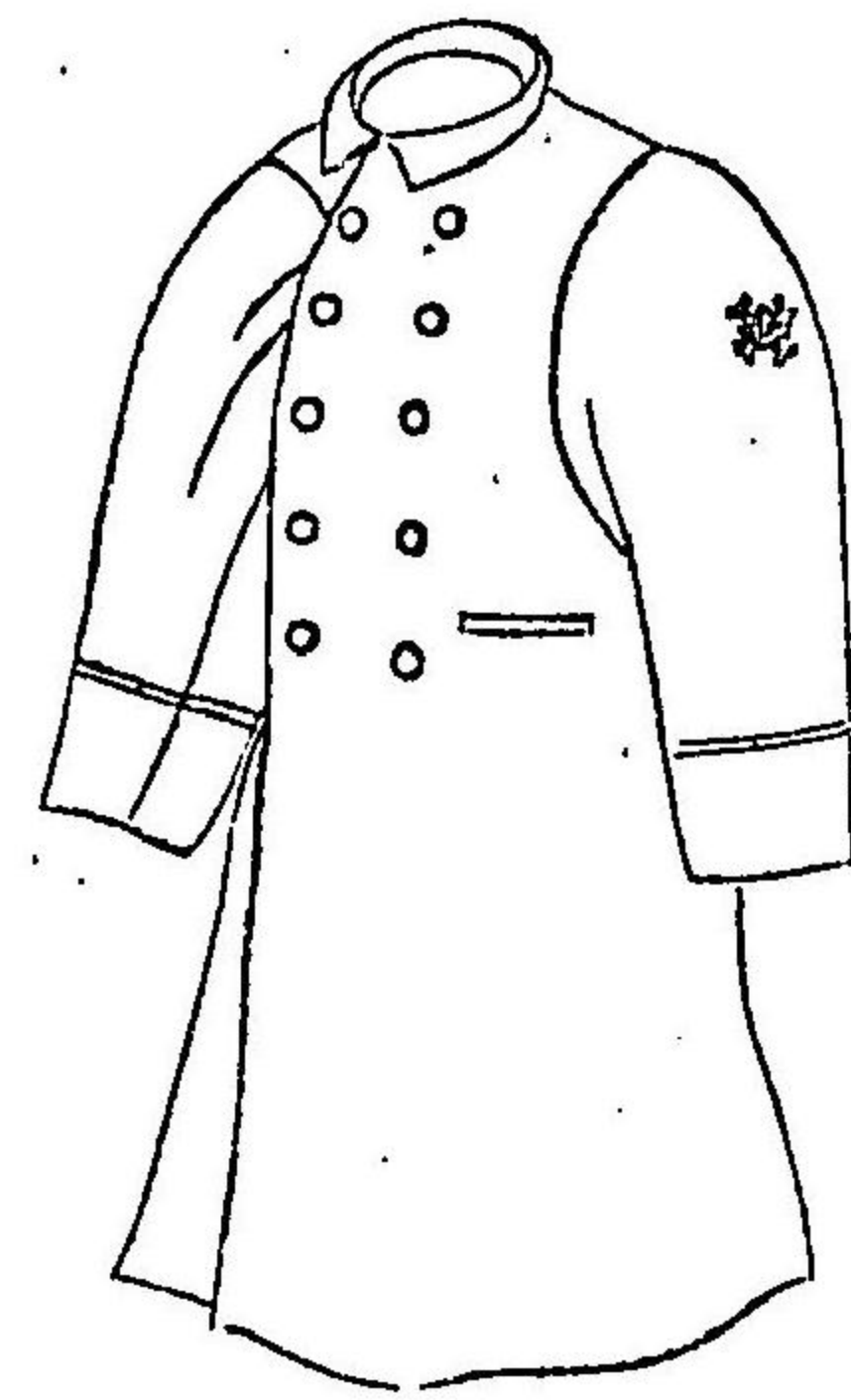
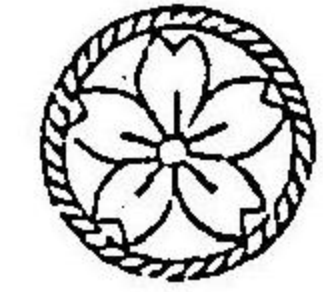
明治二十八年一月 勅令 第四號



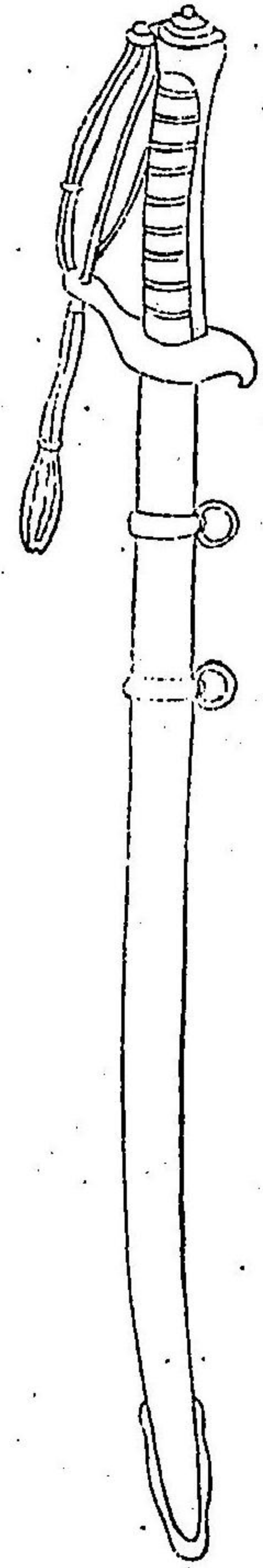
套外



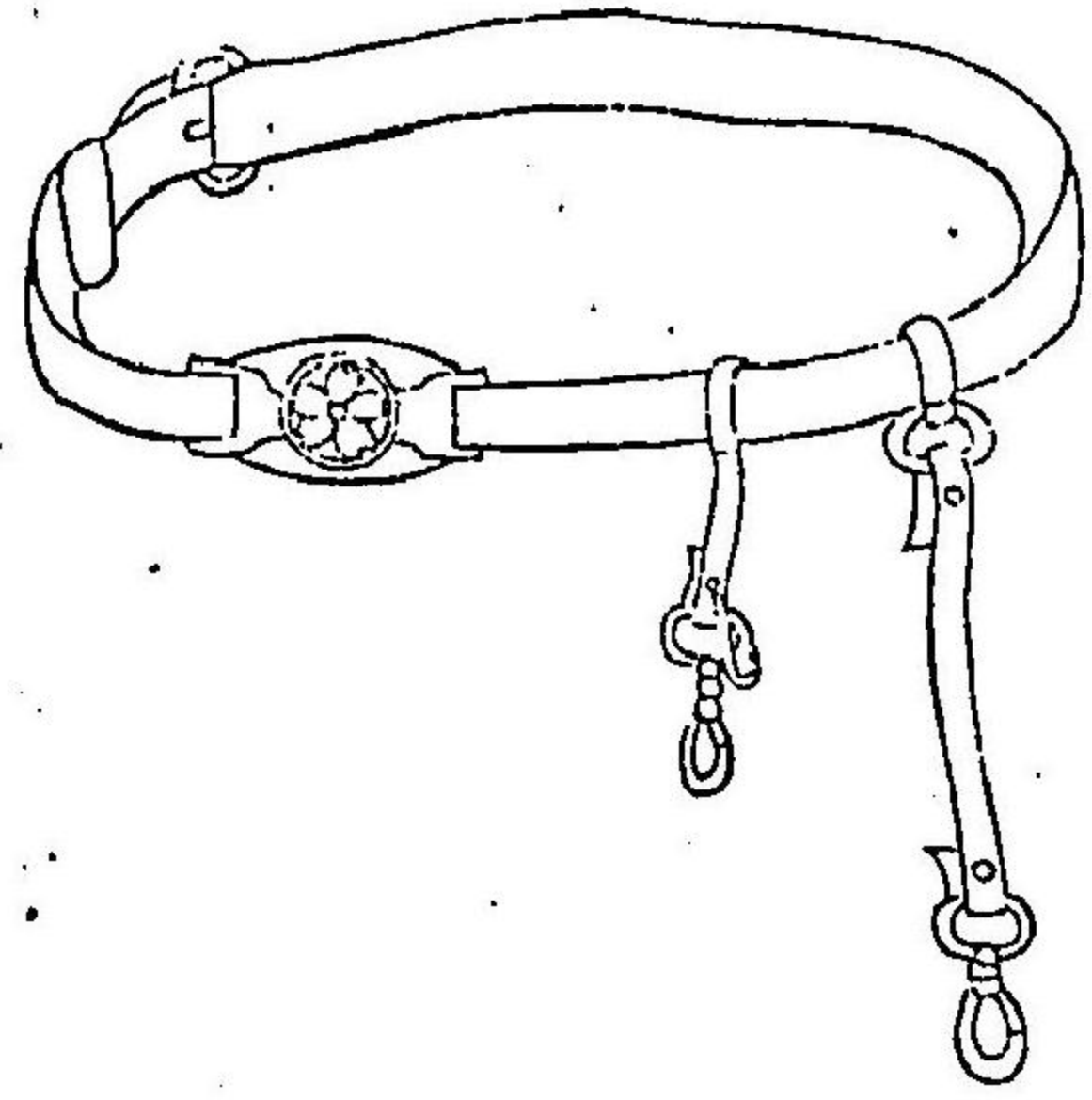
鈕鈕



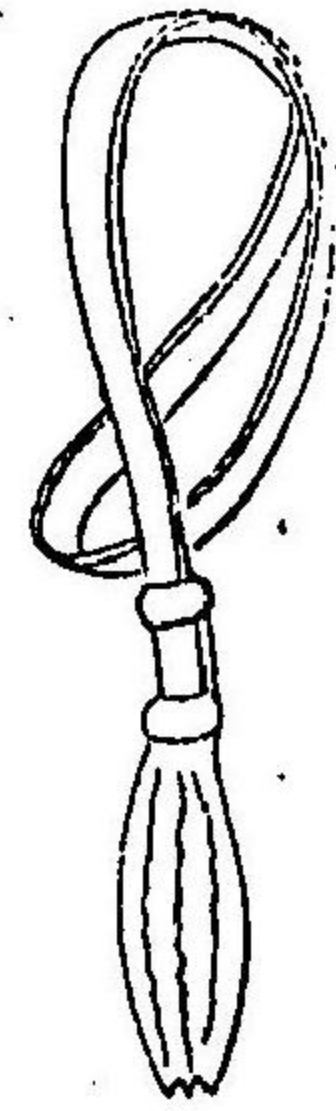
刀



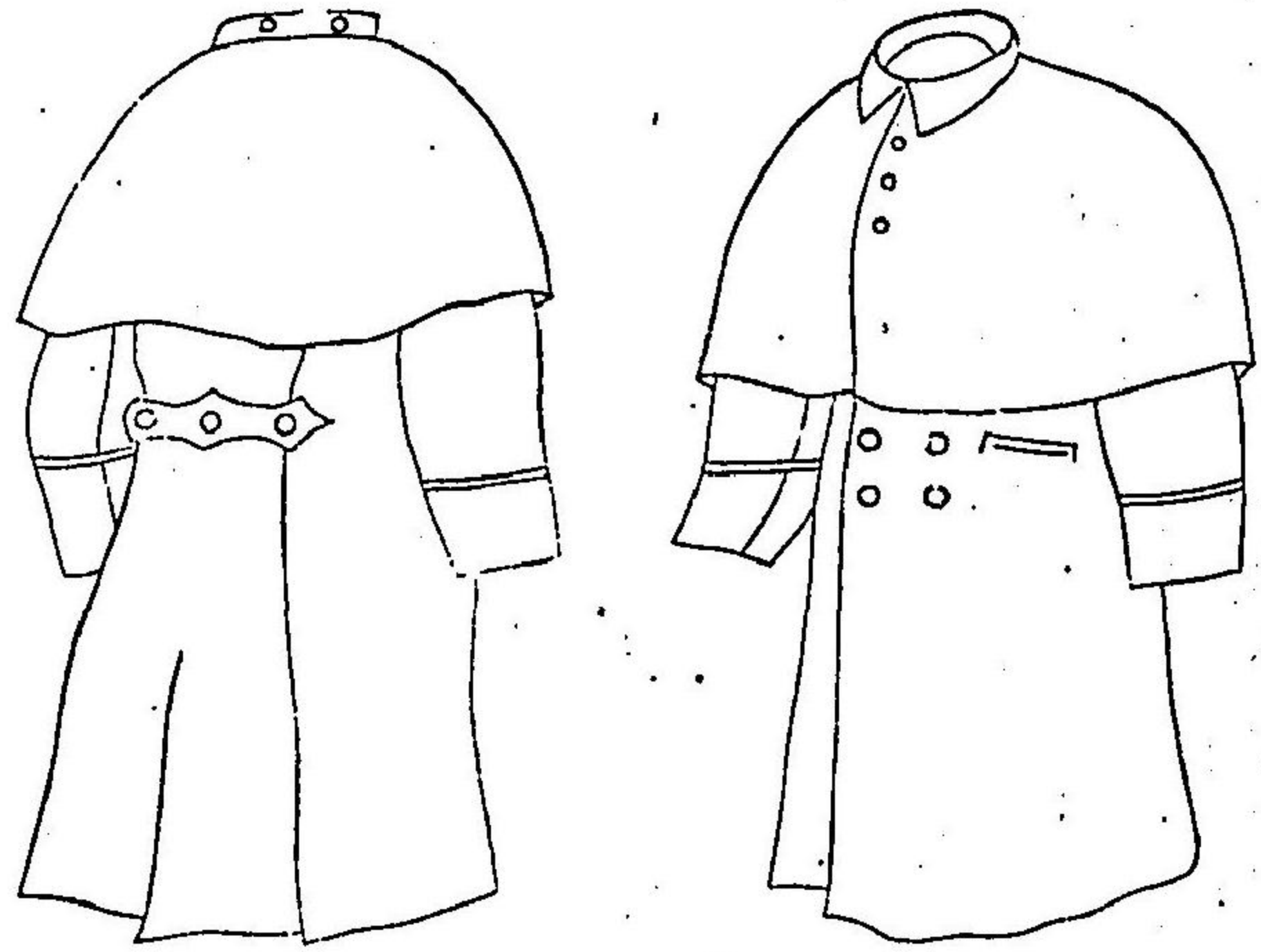
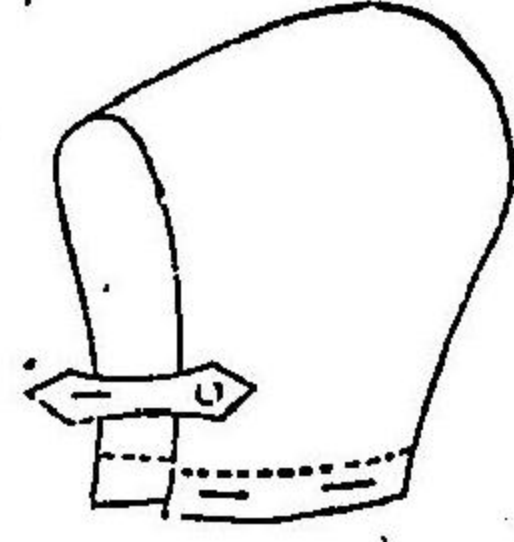
帶刀



緒刀



外 套



御名 御璽

明治二十八年一月八日

朕海軍監獄看守被服料給與令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

勅令第五號(官報一月十一日)

- 第一條 海軍監獄看守被服料給與令
- 第二條 海軍監獄看守ニハ採用ノ際被服料金十八圓六十九錢ヲ給ス
- 第三條 海軍監獄看守ニハ被服保續料年額金五圓六十一錢ヲ給ス
- 第四條 海軍監獄看守職務上避クヘカラサル事故ニ因リ被服ヲ破損若クハ亡失シタルトキハ特ニ金十五圓以內ノ被服料ヲ給スルコトヲ得
- 第五條 本令施行ニ關スル細則ハ海軍大臣之ヲ定ム

附則

- 第五條 本令ハ明治二十八年四月一日ヨリ施行ス
- 第六條 本令施行以前ヨリ海軍監獄看守ノ職ニ在ル者ニハ本令施行ノ際第一條ノ被服料ヲ給ス

除度量衡器ノ制限、其ノ製作、修覆及販賣ノ免許並其ノ檢定ニ關スル規則中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年一月九日

内閣總理大臣 伯爵 伊藤博文
農商務大臣 子爵 榎本武揚

勅令第六號(官報一月十二日)

明治二十四年勅令第七十七號度量衡器ノ制限其ノ製作、修覆及販賣ノ免許並其ノ檢定ニ關スル規則中左ノ通改正ス

第一條 度量器表中細帶狀ノ下「金屬」ヲ「金屬、革、麻布」ニ「三尺六尺十尺十二尺十八尺三十尺六十六尺六十七尺九十尺」ヲ「百尺以下」ニ「一メートル以下」ニ「二メートル以下」ニ「三メートル以下」ニ「五メートル以下」ニ「七メートル以下」ニ「十メートル以下」ニ「二十メートル以下」ニ「三十メートル以下」ニ「五十メートル以下」ニ「七十メートル以下」ニ「一百メートル以下」ニ改ム

第三條 度量器ノ公差ノ表ノ末尾ニ左表ヲ加フ

全長	革及麻布	全長	革及麻布
三尺以下	一〇	十二尺以下	三〇
六尺以下	二〇	十八尺以下	四〇
十尺以下	二五	三十尺以下	六〇
六十尺以下	一一五	七十メートル以下	七〇
六十尺以下	一一〇	五十メートル以下	一〇〇
九十尺以下	一六〇	十メートル以下	二〇〇
百尺以下	一八〇	二メートル以下	三五〇
一メートル以下	三〇	三メートル以下	五五〇

第九條檢定料ノ表中度量器ノ部ヲ左ノ如ク改ム

度量器	檢定料
一尺以下(一分目)	〇.五
一尺以下(五厘目)	一.〇
三尺以下(二分以上ノ目)	一.〇
十八尺以下	四.〇

金		布 麻 革 牙 象 骨 木																																	
三十尺以下	八、〇	六十尺以下	一五、〇	百尺以下	二五、〇	半「メートル」以下	二五、〇	一「メートル」以下	四、〇	五「メートル」以下	五、〇	十「メートル」以下	一〇、〇	二十「メートル」以下	二〇、〇	三十「メートル」以下	三〇、〇	鯨尺 一尺	〇、五	鯨尺 二尺	一、〇	鯨尺 三尺	一、〇	一尺以下	二、五	三尺以下	二、五	七尺以下	五、〇	十八尺以下	五、〇	六十尺以下	二五、〇	百尺以下	五〇、〇

屬	
曲り尺各種	三五
半「メートル」以下	五〇
一「メートル」以下	六〇
二「メートル」以下	七、五
五「メートル」以下	七、五
二十「メートル」以下	三五、〇
三十「メートル」以下	五〇、〇
鯨尺 一尺	二、五
鯨尺 二尺	二、五
鯨尺 三尺	二、五

〔参照〕

勅令第七十七號(明治二十四年八月十九日官報)抄録
第一條中

細帶狀	金	屬	卷尺	形状		種類
				物	質	
六十尺	六十尺	六十尺	九十尺	三	尺	種
十二尺	十八尺	三十尺	五	一	十	類
六十尺	六十六尺	九十尺	二十	一	十	類
			三十	二	十	類

海峽防禦ニ關スル全般ノコトヲ計畫指揮セシム
要塞司令官ノ幕僚ニ海軍參謀ヲ兼務セシメ計畫ニ遺算ナカラシムヘシ

其四 對馬防禦

對馬防禦ハ警備隊司令官及要港司令官中高級古參ノ者ヲシテ對馬防禦司令官ヲ兼任セシメ其所屬部隊及他ノ司令官ヲ統ヘ防禦ニ關スル全般ノコトヲ計畫指揮セシム

第四條 以上諸防禦ニ任スル各府各司令部及各隊各艦ハ作戰上ニ就テハ東京防禦總督鎮守府司令官長官要塞司令官若クハ對馬防禦司令官等ニ屬スト雖モ人事、經理、衛生及兵器彈藥其他物品ノ補給ニ關シテハ陸海軍各其關係官衙ノ區處ヲ受クルモノトス

附則

第五條 本條例實施ノ期限ハ陸海軍大臣告示ヲ以テ之ヲ定ム

朕東京防禦總督部條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年一月十五日

陸軍大臣伯爵西鄉從道

勅令第九號(官報一月十八日)

東京防禦總督部條例

第一條 東京防禦總督部ハ之ヲ東京ニ置ク

第二條 東京防禦總督ハ陸軍大(中)將ヲ以テ之ニ補シ
天皇陛下ニ直隸シ東京防禦ニ任ス

第三條 東京防禦總督ハ東京ノ衛戍勤務ヲ統轄シ師團長ニ命シテ之ヲ實行セシム

第四條 東京防禦總督ハ軍政及人事ニ係ル事ニ就テハ陸軍大臣防禦計畫ニ係ル事ニ就テハ參謀總長ノ區處ヲ受ク

第五條 參謀長ハ部務ヲ整理シ參謀及副官ハ參謀長ノ監視ヲ受ケ各自擔任ノ事務ニ服シ其責ニ任ス

附則

第六條 本條例實施ノ期限ハ陸軍大臣告示ヲ以テ之ヲ定ム

朕陸軍定員令中追加ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年一月十五日

陸軍大臣伯爵西鄉從道

勅令第十號(官報一月十八日)

陸軍定員令第六條「師團司令部ノ上ニ東京防禦總督部(附表第十一號甲)ノ一項竝ニ附表第十號乙ノ次ニ左ノ一表ヲ加フ

第十一號甲

東京防禦總督部編制表

區分	階級	大將	中將	乘馬少將	大佐	乘馬少佐	大尉	乘馬中尉	乘馬下士
	東京防禦總督	一	三						

參謀部	參謀長	一	參謀	二	四	六
副官部	副官	二	副官	二	二	
計	將校	六	將校馬	一	二	
備考	參謀部ノ參謀ニノ内一名ハ海軍參謀中本職アルモノヲ以テ兼務セシム					

附則

本令實施ノ期限ハ陸軍大臣告示ヲ以テ之ヲ定ム

朕茲ニ故參謀總長兼神宮祭主陸軍大將大勳位功二級熾仁親王國葬ノ件ヲ裁可ス

御名 御璽

明治二十八年一月二十四日

內閣總理大臣伯爵伊藤博文

勅令第十一號

參謀總長兼神宮祭主陸軍大將大勳位功二級熾仁親王薨去ニ付特ニ國葬ヲ行フ

○

朕日清兩國交戰中陸軍各兵科豫備後備下士上等兵ヲ陸軍軍吏部下士ニ補充ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年一月二十二日

陸軍大臣伯爵西鄉從道

勅令第十二號 (官報一月二十五日)

日清兩國交戰中陸軍軍吏部下士補充上必要アルトキハ各兵科豫備後備下士ヲ其ノ階級ニ應シ陸軍一、二、三等書記ニ同上等兵ヲ陸軍三等書記ニ任スルコトヲ得但其ノ服役及期限ハ前兵科ノ下士上等兵タリシ時ノ儘トシ之ヲ變更セス

朕國民軍條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年一月二十五日

陸軍大臣伯爵西鄉從道

勅令第十三號 (官報一月三十一日)

國民軍條例

第一條 國民軍ハ陸軍ニ屬シ主トシテ衛戍若クハ邊境ノ警備ニ充ツ

第二條 國民軍ハ國民兵ヲ以テ之ヲ編制ス

第三條 國民兵ノ召集及解散ハ勅命ニ依リ師團長之ヲ行フ

戒嚴ヲ宣告シ得ルノ權アル司令官時機切迫シテ通信斷絶シ命ヲ請フノ途ナキトキハ直ニ召集ヲ行フコトヲ得

第四條 國民軍幹部ハ必要ニ應シ現役豫備後備ノ陸軍將校、同相當官、准士官、下士ヲ以テ充ツルノ外左ニ掲グル者ヨリ選拔シテ之ニ充ツ

一 退役ノ陸軍將校、同相當官、准士官ニシテ國民兵役ニ在ル者若クハ國民軍編入志願ノ者

二 元陸軍下士、上等兵ニシテ國民兵役ニ在ル者若クハ國民軍編入志願ノ者

三 國民兵中材幹技能アル者

第五條 陸軍後備兵ニシテ後備軍召集ニ加ハラサル者ハ特ニ國民軍ニ編入スルコトヲ得
 第六條 第四條第二第三ニ該ル者ノ任官ハ陸軍武官等表ニ依リ士官以上ハ師團長ノ具狀ニ由リ
 陸軍大臣之ヲ奏薦宣行シ其ノ他ハ師團長ノ認可ヲ得テ聯隊長同等以上ノ權アル長官之ヲ行フ
 第三條第二項ニ依リ召集ヲ行ハタル司令官ハ召集員ニ士官以上ノ勤務ヲ命スルコトヲ得其ノ勤
 務ヲ命セフレタル者ノ身分取扱ハ其ノ官職ヲ有スル者ニ準ス
 前項ノ司令官師團長ニアラサルトキハ準士官以下ノ任官ニ付師團長ト同一ノ權ヲ有ス
 第七條 國民軍幹部ノ進級ハ拔擢トス其ノ任官ハ前條ノ例ニ依ル
 第八條 國民軍編制ノ爲メ召集セラレタル者及志願ニ由リ國民軍ニ編入セラレタル者ハ其ノ間現
 役ニ準ス
 第九條 第四條第二第三ニ該リ任官シタル者解散ノトキハ準士官以上ハ之ヲ退役トシ下士ハ其ノ
 官ヲ免ス

○ 朕戰時又ハ事變ニ際シ理事及主理任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年二月九日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文
 海軍大臣兼
 陸軍大臣 伯爵西郷從道

勅令第十四號(官報二月十三日)
 戰時又ハ事變ニ際シ理事若クハ主理ノ増員又ハ補闕ノ必要アルトキハ理事主理任用令ニ定ムル所
 ノ實務修習ノ期限ニ拘ラス且實務修習試験ヲ用井ス理事試補若クハ主理試補ヲ本官ニ任用スルコ
 トヲ得
 本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

○ 朕屯田兵給與令中改正追加ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年二月九日

陸軍大臣伯爵西郷從道

勅令第十五號(官報二月十三日)
 屯田兵給與令中左ノ通改正追加ス
 第一條中「各隊」ノ下ニ「及砲兵第一方面札幌支署」ノ十一字ヲ加フ
 第六條ノ第一「士官以上」ヲ「准士官以上」ニ改ム

第七條中「士官以上」ヲ「准士官以上」ニ改ム

第八條ヲ左ノ如ク改ム

士官以上在職中左ニ掲グルモノハ陸軍給與令第二表ノ職務俸甲額ヲ加給シ其ノ他ハ乙額ヲ加給ス又砲兵上等監護ハ在職中丙額ヲ加給ス
屯田兵司令官參謀官屯田兵司令部副官監督部長軍醫長歩兵大隊長騎砲工兵隊長

第九條第二項ヲ左ノ如ク改ム

前項下士卒ニシテ扶助米鹽菜料ヲ受クル者ニハ其ノ間之ヲ給セス又扶助年限滿期ノ後外宿加俸ヲ受ケサル者ニハ一日六時間以上ノ勤務ニ服シタルトキニアラサレハ之ヲ給セス

第十條中「第二表」ヲ「第一表」ニ改ム

第十一條ヲ左ノ如ク改ム

隊附上長官士官准士官及外宿加俸ヲ受クル下士ニハ土地ノ狀況ニ依リ陸軍大臣之ニ第二表ノ隊附特別加俸ヲ給シ若クハ之ヲ停止スルコトヲ得

第十二條ヲ左ノ如ク改ム

現役下士ニハ第九條給料ノ外外宿加俸ヲ給ス其ノ金額ハ陸軍給與令第五表特務曹長ノ在職者ニ依ル但屯田兵出身ノ下士及屯田兵條例ニ依リ服役スル下士ニシテ其ノ移任地ニ奉職スルモノハ此ノ限ニアラス

第十四條ヲ第十三條ニ改メ同條中「一等藥劑官」ノ下ニ「及砲兵上等監護」ノ七字ヲ加ヘ同條ノ次ニ左ノ一條ヲ設ク

第十四條 豫備後備ノ准士官以上及豫備役扶助米鹽菜料ヲ受クル者ヲ除ク後備役下士召集中ハ准士官以上ハ在職ニ下士卒ハ現役ニ準シ俸給ヲ給ス其ノ一二等給アルモノハ二等給ヲ一等卒ニハ二等卒ノ給料ヲ給ス但六時間未滿召集ノトキハ俸給ヲ給セス

前項召集中兵村内ニ於テ演習ノ際天候其ノ他事故ノ爲メ演習ヲ施行スルコト能ハサルトキハ其ノ兵村内居住者ニ限リ俸給ヲ給セス

第十五條中第十八條ノ四字ヲ削ル

第十六條中士官以上ヲ「准士官以上」ニ改メ「兵卒」ノ二字ヲ削ル

第四章ノ下「食料」ヲ「糧食」ニ改ム

第十八條ヲ左ノ如ク改ム

左ノ各項ニ該ル者ニハ第三表ノ食料ヲ給ス

一 准士官以上及下士卒公務ノ爲メ傷痍疾病ニ依リ病室ニ入りタルトキ但軍屬モ亦之ニ準ス

二 現役下士見習士官及外宿加俸ヲ受クル者ヲ除ク兵卒傷痍疾病ニ依リ病室ニ入りタルトキ

三 現役下士外宿加俸ヲ受クル者ヲ除ク兵卒扶助年限滿期ノ後六時間以上勤務ニ服シタルトキ但糧食若クハ旅費ヲ給スルトキハ食料ヲ給セス

四 豫備役扶助米鹽菜料ヲ受クル者ヲ除ク後備役ノ下士卒召集シタルトキ及召集解散ノ際傷痍疾病其ノ他ノ事故ニ依リ歸村セシメ難キトキ但糧食若クハ旅費ヲ給スルトキ又ハ六時間未滿召集ノトキハ食料ヲ給セス又兵村内ニ於テ演習ノ際天候其ノ他事故ノ爲メ演習ヲ施行スルコト能ハサルトキハ其ノ兵村内居住者ニ限リ食料ヲ給セス

第十九條中「士官」ヲ「准士官」ニ「演習中」ヲ「野外演習中」自炊ヲ爲ストキハ糧食ヲ給シ「ニ改メ」露營ノ下ニ若クハ夜間作業ノ七字ヲ加ヘ金額ヲ「定額」ニ改ム

第二十條中「營倉ニ處シタル者及檢察處分ニ由リ留置シタル者」又ハ違警罪ニ依リ處分ヲ受ケタル者ヲ「營倉ニ處セラレタル者及留置場ニ留置拘禁中ノ者」ニ改ム

第二十一條中「屯田兵」ヲ「陸軍」ニ改メ「監獄」ノ下ニ「未決監已決監」ノ七字ヲ加ヘ「入監」ノ下「スル」ヲ「中」ニ改ム

第二十二條ヲ左ノ如ク改ム

被服ハ准士官以上自辨トシ下士兵卒ニハ官給トス其ノ給與ノ區別ハ左ノ各項ニ依ル

一 特務曹長及外宿加俸ヲ受クル下士ノ被服ハ現員ニ應シ現品ト代金トニ分チ之ヲ給ス其ノ員數ハ第五表其ノ金額ハ第七表ニ依ル但給與ノ現品ハ地質ト金額トニ分チ之ヲ其ノ所管ニ交付シ被服代金ハ其ノ定額ヲ各自ニ交付シ之ニ對スル被服ヲ調辨セシム

二 見習士官ノ被服ハ現品ヲ給ス其ノ被服ハ現員ニ應シ被服料ヲ所屬隊ニ交付シ經理ヲ該隊ニ委任ス其ノ金額ハ第七表ニ依ル

三 屯田兵出身現役豫備役下士兵卒ノ被服ハ定員ハ其ノ當時ノ召募人員ヲ以テ定員トス各隊ニ應シ現品ヲ以テ之ヲ給ス其ノ員數ハ第六表ニ依ル但給與ノ現品ハ地質ト金額トニ分チ之ヲ各隊ニ交付シ其ノ經理ヲ該隊ニ委任ス

四 屯田兵出身後備役下士兵卒召集中ノ被服ハ現品ヲ給ス其ノ被服ハ現員ニ應シ被服保續料ヲ各隊ニ交付シ經理ヲ該隊ニ委任ス其ノ金額ハ第七表ニ依ル

五 動員ノ際各部隊ニ屬スル豫備役ノ者ヲ除ク後備役下士兵卒所要ノ被服ハ其ノ人員ニ應シ各一箇地質ト金額トニ分チ漸次屯田兵ノ各部隊ニ交付シ之ヲ調辨セシム

六 被服ノ地質定尺及金額ハ陸軍大臣之ヲ定ム

第二十三條ヲ左ノ如ク改ム
屯田兵出身現役豫備役下士兵卒ニハ被服補修ノ爲メ毎月被服補修料ノ定額ヲ定員三月以前ニ於テ設置ノ各隊ハ其ノ當時ノ召募人員ヲ以テ定員トス各隊ニ應シ各隊ニ交付シ經理ヲ該隊ニ委任ス其ノ金額ハ第七表ニ依ル
第二十四條ニ左ノ一項ヲ加フ
備附ノ現品ハ定數ニ應シ地質ト金額トニ分チ之ヲ交付ス其ノ地質定尺及金額ハ第二十二條第六

項ノ例ニ依ル

第二十六條第一項中「移任ノ初度」ノ下ニ「步兵隊附騎兵下士ノ馬匹ハ其ノ隊附ヲ命シタルトキ」ノ二十三字ヲ加ヘ第二項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

步兵中隊ノ馬匹ハ初度馬匹購買料ヲ交付シ爾後ハ馬匹保續料ヲ交付シテ經理ヲ當該大隊ニ委任ス其ノ金額ハ第九表ニ依ル

第二十七條ヲ左ノ如ク改ム

騎兵及砲兵隊現役下士兵卒步兵隊附騎兵下士及步兵中隊ノ馬匹ニハ飼養料ヲ給ス其ノ金額ハ第九表ニ依ル但外宿加俸ヲ受クル下士及步兵中隊ノ馬匹ニハ甲額ヲ給シ其ノ他ニハ乙額ヲ給ス
步兵隊乘馬斥候兵ニハ自馬飼養手當ヲ給ス其ノ金額ハ第九表ニ依ル
飼養料及自馬飼養手當ハ毎月下旬ニ於テ之ヲ給ス

飼養料若クハ自馬飼養手當ヲ受クル者軍隊旅行演習旅行ノトキ其ノ馬匹ニハ陸軍給與令第二十ニ表ノ馬糧ヲ給ス但馬糧ヲ給スル日數間ハ定額飼養料若クハ自馬飼養手當ヲ給セス

豫備役後備役ノ騎兵砲兵下士兵卒召集中其ノ馬匹ニハ陸軍給與令第二十二表ノ馬糧ヲ給ス但六時間未滿召集ノトキハ之ヲ給セス又兵村内ニ於テ演習ノ際天候其ノ他事故ノ爲メ演習ヲ執行スルコト能ハサルトキハ其ノ兵村内居住者ニ限り馬糧ヲ給セス

同條ノ次ニ左ノ一條ヲ加フ

第二十七條ノ二 外宿加俸ヲ受クル下士死亡其ノ他ノ事故ニ依リ貸與ノ馬匹ヲ返還シタルトキハ

第九表飼養料ノ甲額以內ヲ以テ該隊ニ於テ飼養スルコトヲ得

第二十八條第一項中「現役下士兵卒」ノ下ニ「步兵隊附騎兵下士及步兵中隊」ノ十三字ヲ加ヘ同項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

豫備役後備役ノ騎兵砲兵下士兵卒馬匹ト共ニ召集シ一週日以上ニ及ヒタルトキモ亦前項ニ同シ

第三十條ニ左ノ二項ヲ加フ

豫備役後備役ノ騎兵砲兵下士兵卒馬匹ト共ニ召集シ一週日以上ニ及ヒタルトキハ現馬數十分一ニ應シ亦前項ニ同シ

歩兵隊附騎兵下士及歩兵中隊ノ馬匹馬糞ヲ要スルトキハ第九表馬糞料ノ定額以內ニ於テ實費支辨スルコトヲ得

第三十二條ニ左ノ一項ヲ加フ

後備役下士兵卒召集中所要ノ消耗品料ハ所屬隊ニ交付シ該隊ニ經理ヲ委任ス其ノ金額ハ第十表ニ依ル

第三十三條中「ニ依ルト雖モ其定額以內ヲ以テ本條ノ期限ヲ伸縮スルコトヲ得」ヲ「ノ範圍内ニ於テ土地ノ寒暖ニ依リ陸軍大臣其ノ期限ヲ定ム」ニ改ム

第三十七條中「第三十三表ノ下ニ「第三十五表」ノ五字ヲ加ヘ「第十四表」ノ下「陸軍給與令第三十五表ノ車馬料ハ本令第十五表」ノ二十二字ヲ削ル

第三十九條中「扶助米鹽糶料ヲ受クル現役」ノ下ニ「並豫備役」ノ四字ヲ加ヘ「服シタルトキニ限リ」ヲ「服シタルトキハニ改ム

第四十一條第一項中「現役」ノ下「及豫備役」ノ五字ヲ削リ第二項「後備役」ノ上ニ「豫備役」ノ三字ヲ加フ

第四十二條ヲ左ノ如ク改ム

本令中ニ陸軍給與令ヲ適用スル條項ニ於テ營内居住ノ下士兵卒ニ係ル事項ハ下士外宿加俸ヲ受兵卒ニ營外居住ノ下士ニ係ル事項ハ外宿加俸ヲ受クル下士ニ適用ス

第二表ヲ第一表トシ更ニ第二表ヲ別表ノ如ク設ク
第三表ヲ別表ノ如ク改ム

第四表中「檢察處分」ノ爲メ留置スル者ヲ「留置拘禁中」ノ者ニ改メ「違警罪」ノ爲メ拘留處分ヲ受クル者ノ十五字ヲ削ル

第五表第六表第七表ヲ別表ノ如ク改ム

第八表中「本部厚毛布」(二組)ヲ「厚毛布」(四枚)ニ「防寒用本部厚毛布」ヲ「防寒用厚毛布」(二組)ニ「歩兵中隊」ヲ「歩兵大隊」ニ改メ同表ノ末ニ左ノ一項ヲ加フ

歩兵大隊ノ宿番用被服ハ其ノ中隊ト所在地ヲ異ニスルトキニ限り之ヲ備附ルモノトス

第九表第十表第十一表第十二表第十三表ヲ別表ノ如ク改ム

第十四表ノ末ニ左ノ一項ヲ加フ

一 特務曹長ハ准士官ノ額ニ依ル

第十五表削除

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス但第十一條ノ隊附特別加俸ノ支給ハ明治二十八年四月一日ヨリ施行シ第四十條ノ移殖地在職手當ハ明治二十八年三月三十一日限り廢止ス

(別表)

第二表

名	區分	月			
		甲	乙	丙	丁
上	長官	七	四	六	五
士	官	五	四	三	四
准士官及外宿加俸ヲ受クル下士	官	二圓五十錢	二	四	一圓五十錢
					一

組	小					服	
	水綿製手套	夏襦袢袴下	冬襦袢袴下	襪	第二種衣袴	外	夏衣袴
歩騎砲工兵下士兵卒	歩騎砲工兵下士兵卒	歩騎砲工兵下士兵卒	歩騎砲工兵下士兵卒	歩騎砲工兵下士兵卒	歩騎砲工兵下士兵卒	歩騎砲工兵下士兵卒	歩騎砲工兵下士兵卒
五組八年	三組八年	二組八年	四組八年	二組八年	一箇八年	二組八年	二組八年
初度二組ヲ給シ爾後滿二年毎ニ二組ヲ給ス	初度二組ヲ給シ滿二年ヲ經テ尙一組ヲ給ス	初度二組ヲ給シ滿二年ヲ經テ尙一組ヲ給ス	初度一箇ヲ給シ爾後滿二年毎ニ一箇ヲ給ス	初度二箇ヲ給ス	初度一箇ヲ給ス	初度二組ヲ給ス	夏季ニ至リ初度二組ヲ給ス 自七月至九月間ハ初度二組ヲ給ス其ノ期 月外ハ七月ニ於テ之ヲ給シ滿三年ヲ經テ 尙一組ヲ給ス

履具	具				服							
	水	飯	具	手	靴	靴	革	麻	麻	靴	靴	靴
歩騎砲工兵下士兵卒	歩騎砲工兵下士兵卒	歩騎砲工兵下士兵卒	歩騎砲工兵下士兵卒	歩騎砲工兵下士兵卒	歩騎砲工兵下士兵卒	歩騎砲工兵下士兵卒	歩騎砲工兵下士兵卒	歩騎砲工兵下士兵卒	歩騎砲工兵下士兵卒	歩騎砲工兵下士兵卒	歩騎砲工兵下士兵卒	歩騎砲工兵下士兵卒
一箇八年	一箇八年	一組八年	一箇八年	一組八年	一組八年	十組八年	十六組八年	四組八年	二組八年	五組八年	二組八年	十三組八年
初度一箇ヲ給ス	初度一箇ヲ給ス	初度一組ヲ給ス	初度一箇ヲ給ス	初度一組ヲ給ス	初度一組ヲ給ス	自毎年十一月至翌年三月間毎月二組ヲ給ス	毎年十一月ニ於テ二組ヲ給ス	初度一組ヲ給シ爾後滿二年毎ニ一組ヲ給ス	初度二組ヲ給ス	初度二組ヲ給シ爾後滿二年毎ニ二組ヲ給ス	初度二組ヲ給ス	初度二組ヲ給シ滿一年ヲ經テ尙一組ヲ給シ爾後滿八月毎ニ一組ヲ給ス

貸與ス
 一 靴靴下ノ給與ハ時宜ニ依リ草鞋草鞋掛ニ換給スルコトヲ得
 一 明治二十七年以前ニ於テ各隊ニ編入シタル下士兵卒給與ノ被服ニシテ本表ノ給與員數ニ限リ給給ヲ要スルモノハ漸ク以テ給與スルコトヲ得

第七表

名	稱		名	稱	月	額
	甲	乙				
各兵特務曹長	小被服	四圓九十五錢	步兵科見習士官被服料	一圓六十六錢		
歩騎砲工兵曹長軍曹	大被服	十六圓六十四錢	歩騎砲工兵下士兵卒被服補修料	三錢五厘		
火工曹長軍曹	小被服	五圓六錢	歩騎砲工兵下士兵卒被服保續料	二錢四厘		
鐵銃木銃鐵工長下	小被服	五圓六錢	歩騎砲工兵下士兵卒被服保續料	二錢四厘		
長	小被服	五圓六錢	歩騎砲工兵下士兵卒被服保續料	二錢四厘		
一 大小被服ハ初度甲額ヲ給シ爾後大被服ハ一箇年毎ニ小被服ハ四箇月毎ニ各乙額ヲ給シテ新調保續セシム						
一 小被服及被服料ノ定額中ニハ被服手入具新調費及被服ノ補修ニ要スル費用ヲ包含ス						

第九表

馬	匹	購買料	一年額	三十五圓	馬	飼養料	月額	五圓	馬	藥料	月額	五圓
馬	匹	購買料	一年額	三十五圓	馬	飼養料	月額	五圓	馬	藥料	月額	五圓
馬	匹	購買料	一年額	三十五圓	馬	飼養料	月額	五圓	馬	藥料	月額	五圓

第十表

馬	砲	工	兵	隊	十	圓	額	馬	砲	工	兵	隊	十	圓	額
馬	砲	工	兵	隊	十	圓	額	馬	砲	工	兵	隊	十	圓	額
馬	砲	工	兵	隊	十	圓	額	馬	砲	工	兵	隊	十	圓	額

第十一表

品	目	一日一箇ノ定額	焚方期限
煙	薪	五	從十月一日至五月十五日

第十二表

大	隊	本	部	四	圓	八	十	三	錢	八	圓	額
大	隊	本	部	四	圓	八	十	三	錢	八	圓	額
大	隊	本	部	四	圓	八	十	三	錢	八	圓	額

砲	兵	隊	五	圓	九	錢	四	厘
砲	兵	隊	五	圓	十	三	錢	六
工	兵	隊	四	圓	六	十	八	錢
工	兵	隊	四	圓	六	十	八	錢

大隊本部ト離隔シタル歩兵中隊ニ在テハ金一圓十五錢四厘豫備役歩兵中隊ニ在テハ金一圓四厘ヲ各増額ス但ニ中隊同所ナルトキハ右翼中隊ニ之ヲ増額ス
大隊本部ト離隔シタル歩兵中隊ニ在テハ診斷所ヲ設置シタルトキ一中隊ノ診斷所ニハ金一圓三十錢ニ中隊ノ診斷所ニ在テハ右翼中隊ニ金一圓三十七錢二厘ヲ給ス

第十二表

名	稱	區別	北 海 道 車 馬 料			
			北	海	道	料
特務曹長ハ准士官ノ額ニ依ル			十	錢	十	六
兵	卒		十	錢	十	六
下	士	判	十	錢	十	八
准	士	官	十	錢	二	十
上	長	官	十	錢	二	十
將	官	相	十	錢	三	十
將	官	常	十	錢	三	十

〔參照〕

勅令第二百一號屯田兵給與令(明治二十三年九月六日官報抄録)
第一條 屯田兵各部各隊ノ將校及ニ相當官以下ニ係ル給與ハ總テ本令ニ依ル軍屬ニ在テ特ニ本令ニ規定シタルモノ亦同シ

第六條 俸給ノ分

第七條 士官以上 俸給
第七條 士官以上現役中俸給ハ陸軍給與令第一表ニ依ル但停職中ハ其半額ヲ給ス
第八條 士官以上在職中左ニ掲ケルモノハ陸軍給與令第二表ノ職務俸額ヲ加給シ其他ハ乙額ヲ加給ス
屯田兵司令官 同副司令官 參謀官 屯田兵司令官 副司令官 監督部長 軍醫長 歩兵大隊長 騎砲兵隊長
第九條 現役下士兵卒ノ給料ハ陸軍給與令第三表ニ依ル但特務曹長ノ休職中ハ其ノ給料ノ半額停職中ハ其ノ給料ノ四分ノ一ヲ給ス
前項下士兵卒屯田兵移住給與規則ニ依リ扶助米鹽米料ヲ受ケル者ニハ之ヲ給セス
第十條 見習士官手當金ハ第二表ニ依ル
第十一條 豫備役下士兵卒公務ニ服シタルトキハ現役ニ準シ給料ヲ給ス
第十二條 現役下士兵卒第九條給料ノ外左ニ掲ケルモノハ外宿加俸ヲ給ス其金額ハ陸軍給與令第五表ニ依ル
一 他管ヨリ屯田各兵科ニ轉シタル下士
二 軍吏部(衛生部)下士及看守卒
第十四條 一等軍吏一等藥劑官ニシテ多年勤勞成績顯著ナルモノニハ陸軍給與令第七表ノ特別俸ヲ加給スルコトヲ得但此場合ニ於テハ第八條ノ職務俸ヲ給セス
第十五條 陸軍給與令第十一條及第十三條第十四條第十六條第十七條第十八條第十九條ハ本令ニ之ヲ適用ス
第十六條 宅料ハ在職士官以上及日外宿加俸ヲ受ケル現役下士兵卒ニ給ス其月額額ハ陸軍給與令第八表ニ依ル
前項宅料ハ毎月下旬ニ於テ之ヲ給ス
第四章 食料
第十八條 食料ハ左ノ區別ニ由リ給ス其金額ハ第三表ニ依ル
一 豫備役備下士兵卒召集中若クハ公務ニ服スルトキ但軍隊旅行演習旅行及其他旅費ヲ給スルトキハ給セス
二 現役及豫備役下士兵卒ヲ受ケル病室ニ入りタルトキ
三 士官以上及下士兵卒公務ノ爲メ傷疾疾病ヲ受ケ病室ニ入りタルトキ但軍屬モ之ニ準ス
第十九條 士官以上及下士兵卒演習中 露營又ハ夜中行軍スルトキ其他下士兵卒不履番ヲ爲ストキハ夜食料ヲ給ス其金額ハ第三表ニ依ル軍屬馬丁モ亦之ニ準ス
第二十條 下士兵卒營倉ニ處シタル者及檢察處分ニ由リ留置シタル者又ハ演習中ニ依リ處分ヲ受ケタル者ノ食料ハ第四表ニ依ル
第二十一條 屯田兵監獄ニ入監スル者ノ糧食ハ第四表ニ依ル其糧食ハ現人員ニ應ジ定額ヲ交付シ監獄ニ經理ヲ委任スルコトヲ得
明治二十八年二月 勅令 第十五號

第二十二條 被服ハ士官以上自辨トシ下士以下ハ官給トス其給與ノ區別ハ左ノ各項ニ依ル
 一 特務曹長及外宿加俸ヲ受クル下士兵卒ノ被服ハ現品及代金ヲ給ス其員數及金額ハ第五表第七表ニ依ル
 二 各隊下士兵卒ノ被服ハ現品ヲ給シ見習士官ノ被服ハ被服料ヲ給ス其員數及金額ハ第六表第七表ニ依ル其下士兵卒ハ定員ニ應ジ地質ト金額トヲ以テ交付シ見習士官ハ現員ニ應ジ定額ヲ交付ス而シテ其經理ヲ該隊ニ委任ス但地質ノ定尺及金額ハ陸軍大臣ノヲ定ム
 第二十三條 各隊ニ於テハ被服修理料及被服手入具永續料トシテ其定額ヲ下士兵卒ノ定員ト外宿加俸ヲ受クルニ應ジ之ヲ交付シ該隊ニ其經理ヲ委任ス其金額ハ第七表ニ依ル
 第二十四條 各隊宿舎及病室所要ノ被服ハ初年度現品ヲ備付ケ爾後毎月永續料ヲ交付シ該隊ニ其經理ヲ委任ス其員數及金額ハ第八表ニ依ル
 第二十六條 騎兵及砲兵ノ馬匹ハ移住ノ初年度之ヲ給ス但外宿加俸ヲ受クル下士ニハ貸與ス
 前項給與ノ馬匹應覽シタルトキハ下士兵卒現役中ニ限リ之ヲ換給ス
 第二十七條 騎兵砲兵隊ノ下士兵卒ニハ現役中飼養料ヲ給ス其金額ハ第九表ノ乙額ニ依ル但外宿加俸ヲ受クル下士ニハ甲額ヲ給ス
 前項飼養料ハ毎月下旬ニ於テ之ヲ給ス
 第二十八條 騎兵及砲兵隊現役下士兵卒ノ馬匹ニハ裝蹄料トシテ現馬數ニ應ジ定額ヲ交付シ該隊ニ其經理ヲ委任ス其金額ハ第九表ニ依ル
 騎兵及砲兵隊ニハ裝蹄器械ヲ初年度現品ニテ備付ケ爾後裝蹄料ノ内ヲ以テ之ヲ保綴セシム
 第三十條 騎兵及砲兵隊現役下士兵卒ノ馬匹ニハ馬糞料トシテ定馬數ノ十分一ニ應ジ定額ヲ交付シ該隊ニ其經理ヲ委任ス其金額ハ第九表ニ依ル
 第三十二條 各隊日常所要ノ消耗品ハ消耗品料及燧室用薪炭料ノ二種ニ分チ各定額金ヲ交付シ該隊ニ其經理ヲ委任ス其金額ハ第十表第十一表ニ依ル
 第三十三條 燧室用薪炭料ハ燧室器備付ノ現數及焚方期限ニ應ジ之ヲ交付ス但焚方期限ハ第十一表ニ依ルト雖モ其定額以內ヲ以テ本條ノ期限ヲ伸縮スルコトヲ得
 第三十七條 陸軍給與令第六十五條第六十六條第六十七條第六十八條第六十九條第七十條第七十一條第七十二條第七十三條第七十四條第七十五條第七十六條第七十七條第七十八條第七十九條第八十條第八十二條第八十三條第八十四條第八十五條第八十六條第八十七條ハ本令ニ之ヲ適用ス但北海道内陸路旅行ニ限リ陸軍給與令第三十二條第三十三條ノ車馬費ハ本令第十三表ニ陸軍給與令第三十四條ノ車馬料ハ本令第十四表ニ陸軍給與令第三十五條ノ車馬料ハ本令第十五表ニ依ル
 第三十九條 屯田兵移住給與規則ニ依リ扶助米糧料ヲ受クル現役下士上等兵看護手及喇叭手タルニ等卒ニハ公務ニ服シタルトキニ限リ勤務手当ヲ給ス其金額ハ現役下士兵卒給料ノ額ニ同シ

第四十一條 現役及豫備役ノ下士兵卒ノ見習士官及外宿加俸 死亡スルトキハ埋葬料ヲ給ス其金額ハ陸軍給與令第四十六表ニ依ル
 後備役下士兵卒召集中死亡スルトキモ亦同シ
 第四十二條 本令中ニ陸軍給與令ヲ適用スル條項ニ於テ營内居住ノ下士兵卒ニ係ル事項ハ外宿加俸ヲ受ケサル下士兵卒ニ係ル外居住ノ下士兵卒ニ係ル事項ハ外宿加俸ヲ受ケル下士兵卒ニ適用ス

第三表

食料一人一日ノ額	夜食料
拾貳錢	三錢

第四表

食料		糧		區分	
一人一日ノ額	一人一日ノ額	精米	脂肪料	入監中ノ者ニシテ力業ニ服スル者	入監中ノ者ニシテ力業ニ服セザル者及未決者並警署ノ爲メ拘留處分ヲ受クル者
一 營倉 貳錢	一 米 貳錢	六 合	三 錢	入監中ノ者ニシテ力業ニ服スル者	入監中ノ者ニシテ力業ニ服セザル者及未決者並警署ノ爲メ拘留處分ヲ受クル者
二 營倉 貳錢	二 米 貳錢	六 合	三 錢	入監中ノ者ニシテ力業ニ服スル者	入監中ノ者ニシテ力業ニ服セザル者及未決者並警署ノ爲メ拘留處分ヲ受クル者
三 營倉 貳錢	三 米 貳錢	六 合	三 錢	入監中ノ者ニシテ力業ニ服スル者	入監中ノ者ニシテ力業ニ服セザル者及未決者並警署ノ爲メ拘留處分ヲ受クル者

第五表

區分	品名	稱	給與期限	給與區別
第一種	立帽	步兵特務曹長	一箇三年	初度一箇ヲ給シ爾後供用期限ニ應ジ交換ス

區分	品名	給與供用 員數期限	給與區別	服		裝具	
				夏衣袴	雨衣	第二種軍隊手帳	士官背蓋
歩騎砲工兵下士	第二種帽	五箇七年	初度二箇ヲ給シ爾後滿二年毎ニ一箇ヲ給ス	同	同	歩兵特務曹長 外宿加俸ヲ受クル下士	歩兵特務曹長 外宿加俸ヲ受クル下士
	正衣袴	一組五年	初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シテ給ス	同	同	同	同
歩騎砲工兵下士	軍衣袴	五組七年	初度二組ヲ給シ爾後滿二年毎ニ一組ヲ給ス	同	同	同	同
	肩草	一組五年	初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シテ給ス	同	同	同	同
歩騎砲工兵下士	夏衣袴	五組七年	自七月至九月間ハ初度二組ヲ給ス其期外ハ七月ニ於テ之ヲ給シ爾後滿二年毎ニ一組ヲ給ス	同	同	同	同
	雨衣	一箇三年	初度一箇ヲ給シ爾後供用期限ニ照シテ給ス	同	同	同	同
歩騎砲工兵下士	第二種軍隊手帳	一箇七年	從前ノ給與品ヲ以テ應用セシメ紙葉盡テ向一箇ヲ給ス	同	同	同	同
	士官背蓋	一箇六年	初度一箇ヲ給シ爾後供用期限ニ照シテ給ス	同	同	同	同
歩騎砲工兵下士	背蓋	一箇七年	初度一箇ヲ給ス	同	同	同	同
	飯盒	一箇十二年	初度一箇ヲ備附爾後供用期限ニ照シテ給ス	同	同	同	同
歩騎砲工兵下士	水筒	一箇十二年	初度一箇ヲ備附爾後供用期限ニ照シテ給ス	同	同	同	同
	外宿加俸ヲ受クル隊附騎兵下士ニハ乘馬用トシテ水筒製手鞆革製脚絆及拍車各一組ヲ貸與ス						

區分	品名	給與供用 員數期限	給與區別	大		服		小	
				第二種帽	第一種衣袴	夏衣袴	外蓋	第二種衣袴	襪
歩騎砲工兵下士	第二種帽	二箇七年	初度二箇ヲ給ス	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等
	第一種衣袴	四箇七年	日勤ノ職務ニ就キタルトキ一箇ヲ給シ爾後滿二年毎ニ一箇ヲ給ス	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士
歩騎砲工兵下士	夏衣袴	一組七年	初度一組ヲ給ス	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等
	第一種衣袴	二組七年	初度二組ヲ給ス	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士
歩騎砲工兵下士	夏衣袴	二組七年	初度二組ヲ給ス	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等
	第一種衣袴	四組七年	日勤ノ職務ニ就キタルトキ一組ヲ給ス爾後滿二年毎ニ一組ヲ給ス	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士
歩騎砲工兵下士	夏衣袴	二組七年	自七月至九月間ハ初度二組ヲ給ス其期外ハ七月ニ於テ之ヲ給シ爾後滿二年毎ニ一組ヲ給ス	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等
	第一種衣袴	二組七年	初度二組ヲ給ス	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士
歩騎砲工兵下士	夏衣袴	一箇七年	初度一箇ヲ給ス	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等
	第一種衣袴	一箇三年	日勤ノ職務ニ就キタルトキ一箇ヲ給シ爾後供用期限ニ照シテ給ス	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士
歩騎砲工兵下士	夏衣袴	二箇七年	初度二箇ヲ給ス	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等
	第一種衣袴	七箇七年	日勤ノ職務ニ就キタルトキ一箇ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一箇ヲ給ス	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士
歩騎砲工兵下士	夏衣袴	三組七年	初度一組ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士
	第一種衣袴	七組七年	初度一組ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士
歩騎砲工兵下士	冬襪袴袴下	七組七年	自甲午十月至乙未六月間ハ日勤ノ職務ニ就キタルトキ一組ヲ給ス其期外ハ十月ニ於テ之ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士	歩騎砲工兵日勤下士

服		被	
靴	靴	短靴	木綿製手袋
歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等
七組 七年	九組 七年	六組 七年	七組 七年
初度一組ヲ給ス	初度一組ヲ給ス	初度二組ヲ給ス	初度二組ヲ給ス
日勤ノ職務ニ就キタルトキ一組ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス	日勤ノ職務ニ就キタルトキ一組ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス	日勤ノ職務ニ就キタルトキ一組ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス	日勤ノ職務ニ就キタルトキ一組ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス
歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等
七組 七年	九組 七年	六組 七年	七組 七年
初度一組ヲ給ス	初度一組ヲ給ス	初度二組ヲ給ス	初度二組ヲ給ス
日勤ノ職務ニ就キタルトキ一組ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス	日勤ノ職務ニ就キタルトキ一組ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス	日勤ノ職務ニ就キタルトキ一組ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス	日勤ノ職務ニ就キタルトキ一組ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス
歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等
七組 七年	九組 七年	六組 七年	七組 七年
初度一組ヲ給ス	初度一組ヲ給ス	初度二組ヲ給ス	初度二組ヲ給ス
日勤ノ職務ニ就キタルトキ一組ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス	日勤ノ職務ニ就キタルトキ一組ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス	日勤ノ職務ニ就キタルトキ一組ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス	日勤ノ職務ニ就キタルトキ一組ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス
歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等
七組 七年	九組 七年	六組 七年	七組 七年
初度一組ヲ給ス	初度一組ヲ給ス	初度二組ヲ給ス	初度二組ヲ給ス
日勤ノ職務ニ就キタルトキ一組ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス	日勤ノ職務ニ就キタルトキ一組ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス	日勤ノ職務ニ就キタルトキ一組ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス	日勤ノ職務ニ就キタルトキ一組ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス
歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等	歩騎砲工兵日勤下士上等
七組 七年	九組 七年	六組 七年	七組 七年
初度一組ヲ給ス	初度一組ヲ給ス	初度二組ヲ給ス	初度二組ヲ給ス
日勤ノ職務ニ就キタルトキ一組ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス	日勤ノ職務ニ就キタルトキ一組ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス	日勤ノ職務ニ就キタルトキ一組ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス	日勤ノ職務ニ就キタルトキ一組ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス

作業衣袴		靴		被		手袋		手袋		手袋	
也田兵手膝	歩砲工兵下士兵卒	靴	靴	襪	襪	手袋	手袋	手袋	手袋	手袋	手袋
歩砲工兵下士兵卒	歩砲工兵下士兵卒	歩砲工兵下士兵卒	歩砲工兵下士兵卒	歩砲工兵下士兵卒	歩砲工兵下士兵卒	歩砲工兵下士兵卒	歩砲工兵下士兵卒	歩砲工兵下士兵卒	歩砲工兵下士兵卒	歩砲工兵下士兵卒	歩砲工兵下士兵卒
一箇 七年	一箇 七年	一組 七年	一組 七年	一組 七年	一組 七年	一組 七年	一組 七年	一組 七年	一組 七年	一組 七年	一組 七年
初度一箇ヲ給ス	初度一箇ヲ給ス	初度一組ヲ給ス	初度一組ヲ給ス	初度一組ヲ給ス	初度一組ヲ給ス	初度一組ヲ給ス	初度一組ヲ給ス	初度一組ヲ給ス	初度一組ヲ給ス	初度一組ヲ給ス	初度一組ヲ給ス
日勤ノ職務ニ就キタルトキ一箇ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一箇ヲ給ス	日勤ノ職務ニ就キタルトキ一箇ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一箇ヲ給ス	日勤ノ職務ニ就キタルトキ一組ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス	日勤ノ職務ニ就キタルトキ一組ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス	日勤ノ職務ニ就キタルトキ一組ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス	日勤ノ職務ニ就キタルトキ一組ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス	日勤ノ職務ニ就キタルトキ一組ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス	日勤ノ職務ニ就キタルトキ一組ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス	日勤ノ職務ニ就キタルトキ一組ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス	日勤ノ職務ニ就キタルトキ一組ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス	日勤ノ職務ニ就キタルトキ一組ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス	日勤ノ職務ニ就キタルトキ一組ヲ給シ爾後滿一年毎ニ一組ヲ給ス

第七表		名		額		名		額	
歩兵特務曹長	小被服	四圓九拾五錢	四圓六拾壹錢	歩兵科見習士	被服料	壹圓六拾六錢	被服修理料	三錢	
歩砲工兵曹長軍曹	大被服	拾六圓六拾四	八圓八拾錢	歩砲工兵下士兵卒	被服料	壹圓六拾六錢	被服修理料	三錢	
火工曹長軍曹	小被服	五圓六錢	三圓三錢	歩砲工兵下士兵卒	被服料	壹圓六拾六錢	被服修理料	三錢	
被統木被服工下長	小被服	拾五圓貳拾壹	八圓拾三錢	歩砲工兵下士兵卒	被服料	壹圓六拾六錢	被服修理料	三錢	
一二三等看服長	大被服	八圓拾三錢	三圓三錢	歩砲工兵下士兵卒	被服料	壹圓六拾六錢	被服修理料	三錢	
一二三等看服長	小被服	五圓六錢	三圓三錢	歩砲工兵下士兵卒	被服料	壹圓六拾六錢	被服修理料	三錢	
一二三等看服長	小被服	五圓六錢	三圓三錢	歩砲工兵下士兵卒	被服料	壹圓六拾六錢	被服修理料	三錢	

看 守 卒	大被服	貳拾壹圓三拾	五圓五拾三錢	步騎砲工兵下 具永納料	被服手入 料	錢
	小被服	拾圓貳拾貳錢	三圓貳拾九錢	步兵卒	具永納料	錢

一大小被服ハ初度甲額ヲ給シ爾後大被服ハ一箇年毎ニ小被服ハ四箇月毎ニ各乙額ヲ給シテ新調保續セシム
一 小被服及被服料ノ定額中ニハ被服修理料被服手入具薪調整及其永納料ヲ包含ス

第八表

品 目	供用期限	宿 番 用				病 室 用
		步兵中隊	步兵分屯隊	騎砲工兵隊	病室用	
本部厚毛布	一組 十六年	三	一	三	三	五
包	八年	三	一	三	三	五
蒸入蒲團	六年	三	一	三	三	五
蒸入蒲團	四年	三	一	三	三	五
敷布	二枚 二年	三	一	三	三	五
枕	二年	三	一	三	三	五
蚊帳	十五年	三	一	三	三	五
單病衣	二年	三	一	三	三	五
裕病衣	四年	三	一	三	三	五
綿入病衣	四年	三	一	三	三	五
襦	二年	三	一	三	三	五

第九表

帶 防寒用本部厚毛布	永 續 料	月 額	甲 額		乙 額	馬 藥 料	月 額	永 續 料	月 額
			額	額					
二年	十六年	四拾四錢	拾五錢	四拾四錢	壹圓四拾六錢	三	壹圓四拾六錢	三	壹圓四拾六錢

第十表

名	稱	月	額	
			月	額
大隊本部	貳拾三圓七拾四錢	四圓	貳拾七圓七拾四錢	四圓
步兵中隊	拾六圓三拾壹錢八厘	四圓	拾二圓三拾壹錢八厘	四圓
豫備步兵中隊	拾圓八拾七錢八厘	四圓	拾四圓七錢八厘	四圓
騎砲工兵隊	拾圓	四圓	拾四圓	四圓

朕陸軍豫備徵員ノ徵集ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年三月二日

陸軍大臣伯爵西郷從道

勅令第十六號(官報 三月四日)

日清兩國交戰中陸軍豫備徵員ヲ徵集スルニ際シ徵兵事務條例第四條ノ規程ニ依リ要員ヲ充タシ能ハサルトキハ他ノ師管ヨリ其ノ不足ヲ補充スルコトヲ得

〔參照〕

勅令第十三號徵兵事務條例(明治二十三年二月二十七日官報)抄錄
第四條 常備歩兵各聯隊ノ兵員ハ其旅管内最寄ニ大隊區ヨリ徵集スルヲ例トシ不足スルトキハ同管内他ノ大隊區ヨリ補充ス其他ノ兵員ハ其師管ヨリ徵集ス
近衛歩兵隊ノ兵員ハ各師管ヨリ其他ノ兵員ハ第一師管ヨリ徵集ス
警備隊ノ兵員ハ其警備隊區ヨリ徵集ス

朕東京學士會院規程補助ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年三月二日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文
文部大臣侯爵西園寺公望

勅令第十七號(官報 三月八日)

東京學士會院規程補則

外國ノ著徳碩學ニシテ特ニ帝國ニ對シ功勞アル者ハ會員ノ推選ニ依リ文部大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ客員ト爲スコトヲ得

朕一般會計ニ屬スル海軍省所管軍事費一時繰替支辨ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年三月十四日

大藏大臣 渡邊 國武

勅令第十八號(官報 三月十六日)

海外派遣ノ海軍艦船及海軍ニ屬スル海外特設ノ各部團隊ニ於テ明治二十七年法律第二十四號臨時軍事費特別會計ニ屬スル臨時軍事費ノ現金前渡ヲ受ケタル出納官吏ハ其ノ現金ヲ以テ一般會計ニ屬スル海軍省所管軍事費中會計法第十五條第二項ノ費途ニ該當スルモノニ限リ一時繰替支辨スルコトヲ得

〔参照〕

法律第四號會計法(明治二十二年二月十一日)抄錄

第十五條第二項

左ノ諸項ノ經費ニ限リ國務大臣ハ主任ノ官吏ニ委任シ又ハ政府ノ命シタル銀行ニ委任シテ現金支拂ヲ爲サシムル爲ニ現金前渡ヲ任拂命令ヲ發スルコトヲ得

第一 國債ノ元利拂

第二 軍隊軍艦及官船ニ屬スル經費

第三 在外各處ノ經費

第四 前項ノ外總テ外國ニ於テ任拂ヲ爲ス經費

第五 運輸通信ノ不償ナル内國ノ地方ニ於テ任拂ヲ爲ス經費

第六 應中常用經費ニシテ一箇年ノ總額額五百圓ニ滿タサルモノ

第七 場所ノ一定セサル事務所ノ經費

第八 各團ニ於テ直接ニ從事スル工事ノ經費但シ主任官ニ付三千圓マテヲ限ル

朕日清兩國間交戰中陸軍監督部及軍吏部士官補充ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年三月十六日

陸軍大臣 伯 爵 山 縣 有 朋

勅令第十九號(官報 三月二十日)

日清兩國間交戰中陸軍監督部及軍吏部士官補充ヲ要スルニ當リ明治二十七年勅令第二百二十八號ニ依リ補充スルモ猶足ラサルトキハ陸軍各兵科大尉若クハ陸軍一等軍吏ノ中ヲ特選シテ陸軍監督補ニ任用シ豫備後備陸軍一等書記ノ中ヲ特選シテ陸軍三等軍吏ニ任用スルコトヲ得
前項ニ依リ三等軍吏ニ任用シタル者ノ服役ハ陸軍豫備後備將校補充條例第十六條ノ例ニ依ル

〔参照〕

勅令第二百二十八號(明治二十七年七月二十九日官報)

戰時若クハ事變ニ際シ陸軍監督部及軍吏部士官ニ缺員アルトキハ必要ニ應ジ陸軍監督學生ノ中ヲ特選シテ陸軍監督補ニ陸

軍一等書記ノ中ヲ特選シテ陸軍三等軍吏ニ任用スルコトヲ得

陸軍一等書記ヲ陸軍三等軍吏ニ任用スルハ實役停年滿一年以上ノ者ニ限ル

勅令第六十九號陸軍豫備後備將校補充條例(明治二十二年五月二十二日官報)抄錄

第十六條 豫備後備將校同相當官ハ當分豫備後備下士官適任證書ヲ所持スル者ヨリ補充スルコトアル可シ

士官適任證書ヲ所持スル者ヲ豫備後備ノ士官ト爲スニハ第一條第一ニ當ル者ノ例ニ依リ其服役期限ハ豫備二箇年後備五箇年トス

朕海軍軍人俸給令中追加ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年三月二十日

内閣總理大臣 伯爵伊藤博文
海軍大臣 伯爵西郷從道

勅令第二十號 (官報 三月二十三日)

海軍軍人俸給令中左ノ通追加ス

第十四條ニ左ノ但書ヲ加フ

但退職恩給免除恩給ノ支給ヲ受ケサル者ニハ其ノ月末日マテノ俸給ヲ給ス

第十五條ニ左ノ但書ヲ加フ

但退職恩給免除恩給ノ支給ヲ受ケサル者若クハ死亡シタル者ニハ其ノ月末日マテノ俸給ヲ給ス

附則

本令ハ海軍軍人ニシテ日清兩國間開戦以後戦死シタル者又ハ戦地ニ於テ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ爲ニ死亡シタル者ニモ適用ス

〔参照〕

勅令第二百五十二號海軍軍人俸給令(明治二十六年十二月十八日官報)抄録
第十四條 准士官以上ニシテ豫備後備退役トナリタルキハ服役終期ノ日マテ其ノ俸給及加俸ヲ給ス
第十五條 准士官以上ニシテ免官恩給トナリ若クハ候補生ニシテ候補生ヲ免セラレ又ハ下士卒ニシテ現役ヲ離レ若クハ歸休兵トナリタルキハ其ノ當日マテ俸給及加俸ヲ給ス

朕明治二十七年十一月二十二日亞米利加合衆國華盛頓ニ於テ朕カ全權委員ト亞米利加合衆國全權委員ノ記名調印シタル通商航海條約ヲ批准シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年三月二十四日 (官報 三月二十五日)

内閣總理大臣 伯爵伊藤博文
外務大臣 子爵陸奥宗光

通商航海條約

日本國皇帝陛下及亞米利加合衆國大統領ハ兩國民ノ交際ヲ阜張増進シ以テ幸ニ兩國間ニ存在スル所ノ厚誼ヲ維持セムコトヲ欲シ而シテ此ノ目的ヲ達セムニハ從來兩國間ニ存在スル所ノ條約ヲ改正スルニ如カサルヲ確信シ公正ノ主義ト相互ノ利益ヲ基礎トシ其ノ改正ヲ完了スルコトニ決定シ之カ爲メニ日本國皇帝陛下ハ米國駐劄帝國特命全權公使從四位勳四等栗野慎一郎ヲ亞米利加合衆國大統領ハ合衆國國務大臣「ウォルター・キューングレッシュ」ヲ各其ノ全權委員ニ任命セリ因テ各全權委員ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ其ノ良好妥當ナルヲ認メ以テ左ノ諸條ヲ協議決定セリ

第一條

兩締盟國ノ一方ノ臣民或ハ人民ハ他ノ一方ノ領土内何レノ所ニ到リ、旅行シ或ハ居住スルモ全ク隨意タルヘク而シテ其ノ身體及財産ニ對シテハ完全ナル保護ヲ享受スヘシ
該臣民或ハ人民ハ其ノ權利ヲ伸張シ及防護セムガ爲メ自由ニ裁判所ニ訴出ルコトヲ得ヘク又該裁判所ニ於テ其ノ權利ヲ伸張シ及防護スルニ付内國臣民或ハ人民ト同様ニ代言人、辯護人及代人ヲ撰擇シ且使用スルコトヲ得ヘク而シテ右ノ外司法取扱ニ關スル各般ノ事項ニ關シテ内國臣民或ハ人民ノ享有スル總テノ權利及特典ヲ享有スヘシ

住居權、旅行權及各種動産ノ所有、遺囑又ハ其ノ他ノ方法ニ因ル所ノ動産ノ相續並ニ合法ニ得ル所ノ各種財產ヲ如何ニ處分スルコトニ關シ兩締盟國ノ一方ノ臣民或ハ人民ハ他ノ一方ノ領土内ニ在リテ内國若ハ最惠國ノ臣民或ハ人民ト同様ノ特典、自由及權利ヲ享有シ且此等ノ事項ニ關シテハ内國若ハ最惠國ノ臣民或ハ人民ニ比シテ多額ノ税金若ハ賦課金ヲ徵收セラルコトナカルヘシ兩締盟國ノ一方ノ臣民或ハ人民ハ他ノ一方ノ領土内ニ於テ良心ニ關シ完全ナル自由、及法律、勅令及規則ニ從テ公私ノ禮拜ヲ行フノ權利、並ニ其ノ宗教上ノ慣習ニ從ヒ埋葬ノ爲メ設置保存セララル所ノ適當便宜ノ地ニ自國ノ人ヲ埋葬スルノ權利ヲ享有スヘシ

何等ノ名義ヲ以テスルモ該臣民或ハ人民ヲシテ内國若ハ最惠國ノ臣民或ハ人民ノ納ムル所若ハ將來納ムヘキ所ニ異ナルカ又ハ之ヨリ多額ノ取立金若ハ租稅ヲ納メシムルヲ得ス
兩締盟國ノ一方ノ臣民或ハ人民ニシテ他ノ一方ノ領土内ニ住居スル者ハ陸軍、海軍、護國軍、民兵等ニ論ナク總テ強迫兵役ヲ免カレ且其ノ服役ノ代リトシテ取立ル所ノ一切ノ納金ヲ免カレ又一切ノ強募公債及軍事上ノ賦歛、或ハ捐資ヲ免カルヘシ

第二條

兩締盟國ノ間ニハ相互ニ通商及航海ノ自由アルヘシ
兩締盟國ノ一方ノ臣民或ハ人民ハ他ノ一方ノ領土内何レノ所ニ於テモ總テ正業ニ屬スル各種ノ生産物、製造品及貨物ノ卸賣若ハ小賣營業ニ從事スルヲ得ヘシ右營業ニ從事スルニ於テ自身ニ之ヲ爲シ、或ハ代理人ヲ以テシ、又ハ一人ニテ之ヲ爲シ、或ハ外國人若ハ内國臣民或ハ人民ト組合ヲ結ビテ之ヲ爲スモ隨意タルヘク又必要ナル家屋、製造所、倉庫、店舖及附屬構造物ヲ所有シ或ハ之ヲ借受ケ又ハ使用シ且住居及商業ノ爲メニ土地ヲ借受クルコトヲ得、但シ内國臣民或ハ人民ト同様其ノ國ノ法律、警察規則及稅關規則ヲ遵守スルヲ要ス
該臣民或ハ人民ハ他ノ一方ノ領土内ノ各地、諸港及諸河ニシテ外國通商ノ爲メ開カレ又ハ開カル

ヘキ場所へ船舶及貨物ヲ以テ自由ニ到ルヲ得且通商及航海ニ關シテハ政府、官吏、公吏、一私人或ハ會社若ハ何等施設ノ名稱ヲ以テスルカ又ハ其ノ利益ノ爲メニ課セラル、所ノ税金或ハ取立金ハ其ノ性質若ハ名稱ノ如何ヲ論セス内國臣民或ハ人民若ハ最惠國臣民或ハ人民ノ拂フ所ニ異ナルカ或ハ之ヨリ多額ノモノヲ拂フコトナク内國臣民或ハ人民若ハ最惠國臣民或ハ人民ト同一ノ取扱ヲ受クヘキモノトス
但シ本條及前條ノ規定ハ兩締盟國ノ各方ニ於テ商業、勞働者ノ移住、警察及公安ニ關シ現ニ行ハレ又ハ將來制定セラレヘキ法律、勅令及規則ニハ何等ノ影響ヲ及ホスコトナシ

第三條

兩締盟國ノ一方ノ臣民或ハ人民カ他ノ一方ノ領土内ニ於テ住居若ハ商業ノ爲メニ供スル家宅、製造所、倉庫、店舖及之ニ屬スル總テノ附屬構造物ハ侵スヘカラス
右家宅等へハ猥ニ侵入搜索スヘカラス又帳簿、書類或ハ簿記帳ヲ検査點閱スヘカラス但シ内國臣民或ハ人民ニ對シ法律、勅令及規則ヲ以テ制定セル條件及定式ニ據ルトキハ此ノ限ニ在ラス

第四條

合衆國領土内ノ生産或ハ製造ニ係ル物品ハ何レノ地ヨリ日本國皇帝陛下ノ領土内ニ輸入シ又日本國皇帝陛下ノ領土内ノ生産或ハ製造ニ係ル物品ヲ何レノ地ヨリ合衆國ノ領土内ニ輸入スルニモ總テ別國ノ生産或ハ製造ニ係ル同種ノ物品ニ課スル所ノ稅ニ異ナルカ或ハ之ヨリ多額ノ稅ヲ課セラ
ルコトナカルヘシ又締盟國ノ一方ノ領土内ニ別國ノ生産或ハ製造ニ係ル物品ノ輸入ヲ禁止スルニ非サレハ他ノ一方ノ領土内ノ生産或ハ製造ニ係ル同種ノ物品ヲ何レノ地ヨリ輸入スルコトヲモ
禁止スルコトナカルヘシ但シ此ノ末段ノ取極ハ人畜或ハ農業ニ有用ナル植物ノ安全ヲ保護スルニ
必要ナル衛生上及其ノ他ノ禁止ニハ適用スヘカラスモノトス

第五條

明治二十八年三月 勅令 無號

兩締盟國ノ一方ノ領土内ヨリ他ノ一方ノ領土内へ輸出スル一切ノ物品ハ他ノ各外國へ輸出スル同種物品ニ對シ賦課シ若ハ賦課スヘキ所ニ異ナルカ或ハ之ヨリ多額ノ税金又ハ雜費ヲ賦課スルコトナカルヘシ又兩締盟國ノ一方ノ領土内ニ於テ他ノ各外國ニ向ヒ物品ノ輸出ヲ禁止スルニ非サレハ他ノ一方ノ領土内へ同種ノ物品ヲ輸出スルコトヲモ禁止セサルヘシ

第六條

兩締盟國ノ一方ノ臣民或ハ人民ハ他ノ一方ノ領土内ニ在リテ總テノ内地通關稅ハ免除セラルヘク又倉入、獎勵金、便益及税金拂戻等ノ事項ニ就テハ全ク内國臣民或ハ人民ト均等ノ取扱ヲ享クヘシ

第七條

日本國皇帝陛下ノ領土内ノ諸港へ日本國ノ船舶ヲ以テ適法ニ輸入シ若ハ輸入セラルヘキ物品ハ亦合衆國ノ船舶ヲ以テ同様ニ之ヲ右諸港ニ輸入スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ日本國船舶カ右様ノ物品ヲ輸入スルトキ課スヘキ税金或ハ雜費ノ外何等ノ名義ヲ以テスルモ更ニ別種或ハ多額ノ税金雜費等ヲ課セサルヘシ又合衆國ノ領土内ノ諸港へ合衆國ノ船舶ヲ以テ適法ニ輸入シ若ハ輸入セラレヘキ物品ハ亦日本國ノ船舶ヲ以テ同様ニ之ヲ右諸港へ輸入スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ合衆國船舶カ右様ノ物品ヲ輸入スルトキ課スヘキ税金或ハ雜費ノ外何等ノ名義ヲ以テスルモ更ニ別種或ハ多額ノ税金雜費等ヲ課セサルヘシ右相互對等ノ取扱ハ右物品ノ直ニ原産地ヨリ到ルト其ノ他ノ場所ヨリ到ルトト問ハス必ス之ヲ施スモノトス

輸出ニ關シテモ前項ノ場合ト同様全ク均等ノ取扱ヲ施スヘシ故ニ締盟國ノ一方ヨリ適法ニ輸出シ若ハ輸出セラルヘキ物品ハ其ノ輸出ノ日本國船舶ニ依ルト合衆國船舶ニ依ルトニ拘ハラヌ又其ノ仕向先ノ締盟國ノ一港タルト第三國ノ一港タルト問ハス締盟國ノ領土内ニ於テハ之ニ課スルニ同一ノ輸出稅ヲ以テシ又之ニ許スニ同一ノ獎勵金並ニ税金拂戻ノコトヲ以テスヘシ

第八條

政府官吏、公吏、私人、會社若ハ何等施設ノ名義ヲ以テスルカ又ハ其ノ利益ノ爲メニ課セラルヘキノ噸稅、港稅、水先案内料、燈臺稅、檢疫費其ノ他之ト同種ノ税金ハ其ノ性質並ニ名義ノ如何ニ拘ハラヌ同一ノ條件ヲ以テ同様ノ場合ニ於テ内國船舶一艘若ハ最惠國船舶ニ課スルモノニ非サレハ兩締盟國ノ一方ハ其ノ領土内ノ港ニ於テ之ヲ他ノ一方ノ船舶ニ課セサルヘシ此ノ如キ均等ノ取扱ハ兩國ノ船舶カ何レノ地或ハ港ヨリ來リ又何レノ所ニ往クモノタリトモ相互同一タルヘキモノトス

第九條

兩締盟國ノ一方ノ領土内ノ海港、海灣、船渠、川河或ハ其ノ他ノ碇泊所ニ於テ船舶ノ繫留又貨物ノ積、船卸ニ關スル一切ノ事項ニ就テハ内國船舶ニ許與セサル特典ハ均シク他ノ一方ノ締盟國ノ船舶ニモ許與セサルヘシ但シ本件ニ關シテモ亦兩締盟國ノ目的ハ兩國ノ船舶ニ對シ互ニ全ク均等ノ取扱ヲ施スニ在ルモノトス

第十條

兩締盟國ノ沿海貿易ハ本條約ニ於テ規定スルノ限ニ在テス各其ノ法律、勅令及規則ニ從ヒ之ヲ規定スヘキモノトス然レトモ日本國皇帝陛下ノ領土内ニ於ケル合衆國人民又ハ合衆國ノ領土内ニ於ケル日本國臣民ハ此ノ事項ニ關シテハ各右法律、勅令及規則ヲ以テ他ノ外國臣民或ハ人民ニ許與シ若ハ許與セラルヘキ諸權利ヲ享有スルモノトス合衆國ノ領土内ノ二箇以上ノ港へ仕向ケタル荷物ヲ外國ニ於テ積載シタル日本國船舶及日本國皇帝陛下ノ領土内ノ二箇以上ノ港へ仕向ケタル荷物ヲ外國ニ於テ積載シタル合衆國船舶ハ外國貿易ヲ許サレタル仕向港ノ一ニ於テ其ノ積荷ノ一部ヲ陸揚シ而シテ其ノ最初ニ積載シタル荷物ノ剩餘ヲ陸揚スル爲メ他ノ一港若ハ數港へ進航スルコトヲ得ヘシ但シ常ニ兩國ノ法律及稅關規則ニ從フヘキモノトス

但シ日本國政府ハ本條約ノ期限間是迄ノ通り合衆國船舶カ帝國ノ現開港場間ニ積荷ヲ運搬スルコトヲ許スコトヲ承諾ス尤大阪、新潟及夷港ハ此ノ限ニ在ラヌ

第十一條

兩締盟國ノ一方ノ軍艦或ハ商船ニシテ暴風又ハ其ノ他ノ危難ニ遭遇シ避難ノ爲メ已ムヲ得ス他ノ一方ノ海港ニ進入スルモノハ内國船舶ノ拂フヘキ税金ノ外何等ノ税金ヲ拂フコトナク其ノ港ニ於テ更ニ艀裝ヲ爲シ一切ノ需用品ヲ求メ再ヒ航行スルヲ得ヘシ但シ商船ノ船長ニシテ其ノ費用ヲ支辨スル爲メ其ノ積荷ノ一部ヲ賣却スルヲ要スル場合ニハ該船長ハ其ノ寄港地ノ規則及税目ヲ遵守スヘキモノトス

兩締盟國ノ一方ノ軍艦或ハ商船ニシテ他ノ一方ノ沿岸ニ於テ淺瀬ニ乗上ケ或ハ難破シタルトキハ地方官ヨリ其ノ事件ノ生シタル地方ニ在ル所ノ總領事、領事、副領事又ハ代辦領事ヘ其ノ旨ヲ通知スヘシ但シ若其ノ地方ニ領事官ノ駐在セサルトキハ最近地方ノ總領事、領事、副領事又ハ代辦領事ヘ通知スヘシ

日本國皇帝陛下ノ領海ニテ難破シ若ハ海岸ニ乗上ケタル合衆國船舶ノ救助ニ關スル一切ノ手續ハ日本國法律、勅令及規則ニ從テ之ヲ爲スヘク又相互ノ主義ニ基キ合衆國ノ領海ニテ難破シ若ハ海岸ニ乗上ケタル日本船舶ニ關スル一切ノ救助ノ處分ハ合衆國法律ニ從テ之ヲ爲スヘシ右難破若ハ乗上ケタル船舶並ニ其ノ器具及其ノ他一切ノ附屬品及該船舶ヨリ救上ケタル貨物並ニ商品及右等ノ諸物件ニシテ海中ニ投棄セラレタルモノ又ハ之ヲ賣却シタルトキハ其ノ收得金、並ニ該難破船内ニ發見セラレタル一切ノ書類ハ右船舶ノ持主或ハ代理人ヨリ要求スルトキハ之ニ引渡スヘシ右持主或ハ代理人ノ現場ニ在ラサルトキハ内國法律ニ定メタル期限内ニ當該總領事、領事、副領事或ハ代辦領事ヨリ請求アレハ之ヲ引渡スヘシ而シテ右領事官、持主或ハ代理人ハ内國船舶難破ノ場合ニ於テ拂フヘキ所ノ物品保存費並ニ難破救助費及其ノ他ノ費用ノミヲ拂フヘキモノトス

難破船ヨリ救上ケタル貨物及商品ハ消費ノ爲メニ通關手續ヲ爲スモノニ非サレハ一切ノ關稅ヲ免

除スヘシ但シ消費ノ爲メニ賣却ノ場合ニハ普通ノ關稅ヲ納ムルヲ要スルモノトス

兩締盟國ノ一方ノ臣民或ハ人民ニ屬スル船舶ニシテ他ノ一方ノ領土内ニ於テ淺瀬ニ乗上ケ或ハ難破シタルトキ其ノ持主、船長若ハ持主代理人不在ノ場合ニハ當該總領事、領事、副領事若ハ代辦領事ハ其ノ自國臣民或ハ人民ニ必要ノ補助ヲ與フル爲メ職權上ノ助力ヲ爲スヲ許サルヘキモノトス此ノ規定ハ持主、船長若ハ他ノ代理人現ニ其ノ場ニ在ルトキト雖モ右様ノ補助ヲ與フルヲ請求スル場合ニハ亦適用スヘキモノトス

第十二條

本條約ニ於テハ日本國ノ國法ニ從ヒ日本國船舶ト見做サルヘキ一切ノ船舶ハ之ヲ日本國船舶ト見認メ又合衆國ノ國法ニ從ヒ合衆國船舶ト見做サルヘキ一切ノ船舶ハ之ヲ合衆國船舶ト見認ムヘシ

第十三條

兩締盟國ノ一方ノ領土内ニ駐在スル他ノ一方ノ總領事、領事、副領事及代辦領事ハ自國ノ脱船人ヲ取戻ス爲メ法律ノ許ス所ノ補助ハ之ヲ地方官ヨリ受クヘキモノトス

第十四條

兩締盟國ハ其ノ一方ノ通商及航海ヲ他ノ一方ニ於テ總テ最惠國ノ基礎ニ置ク主意ヲ有スルニ因リ通商及航海ニ關スル一切ノ事項ニ關シ其ノ一方ヨリ別國ノ政府、船舶、臣民或ハ人民ニ現ニ許與シ或ハ將來許與スヘキ一切ノ特典、殊遇若ハ免除ハ他ノ一方ノ政府、船舶、臣民或ハ人民ニモ若シ別國ヘ無報酬ニ許與シタルトキハ無報酬ニテ又若シ條件ヲ附シテ許與シタルトキハ其レト均一ノ條件ヲ附シテ之ヲ許與スヘキコトヲ兩締盟國ニ於テ約定ス

第十五條

兩締盟國ノ一方ハ他ノ一方ノ海港、都府及其ノ他ノ場所ニ總領事、領事、副領事、領事代及代辦領事ヲ

置クコトヲ得ヘシ但シ領事官ノ駐在ヲ認許スルニ便宜ナラサル場所ハ此ノ限ニ在ラス
然レトモ右ノ制限ハ他ノ諸外國ニ對シ之ヲ適用スルニ非サレハ一方ノ締盟國ニ對シテ之ヲ適用ス
ルヲ得サルモノトス

總領事、領事、副領事、領事代及代辦領事バ一切ノ職務ヲ執行スルコトヲ得且其ノ在留國ニ於テ最惡
國ノ領事官ニ現ニ許與シ或ハ將來許與セラルヘキ一切ノ特典、特權及免除ハ總テ之ヲ享有スヘキ
モノトス

第十六條

兩締盟國ノ一方ノ臣民或ハ人民ハ他ノ一方ノ領土内ニ於テ法律ニ定ムル所ノ手續ヲ履行スルトキ
ハ專賣特許、商標及意匠ニ關シ内國臣民或ハ人民ト同一ノ保護ヲ受クヘシ

第十七條

兩締盟國ハ左ノ取極ニ同意ス
日本國ニ在ル各外國人居留地ハ全ク其ノ所在ノ日本國市區ニ編入シ爾後日本國地方組織ノ一部ト
ナルヘシ

然ル上ハ日本國當該官吏ハ之ニ關シテ其ノ地方施政上ノ責任義務ヲ悉皆負擔スヘシ又之ト同時ニ
右外國人居留地ニ屬スル共有資金若ハ財產アルトキハ之ヲ右日本國官吏ヘ引渡スヘキモノトス
尤前記外國人居留地ヲ日本國市區ニ編入ノ場合ニハ該居留地内ニテ現ニ因テ以テ財產ヲ所持スル
所ノ現在永代借地券ハ有效ノモノト確認セラルヘシ而シテ右財產ニ對シテハ右借地券ニ載セタル
條件ノ外ハ別ニ何等ノ條件ヲモ附セサルヘシ但シ借地券中ニ領事官トアルハ總テ日本國當該官吏
ヲ以テ之ニ代ユヘキコト、知ルヘシ

外國人居留地公共ノ目的ノ爲メニ無借料ニテ既ニ貸與シタル各地所ハ永代ニ保存セラルヘシ且該
地所ニシテ最初貸與シタルトキノ目的ニ使用セラル、限ハ總テノ租稅及徵收金ヲ免スヘシ但シ土

地收用權ニハ從フヘキモノトス

第十八條

本條約ハ其ノ實施ノ日ヨリ兩締盟國間ニ現存スル嘉永七年三月三日即千八百五十四年三月三十一
日締結ノ和親條約安政五年六月十九日即千八百五十八年七月二十九日締結ノ修好通商條約慶應二
年五月十三日即千八百六十六年六月二十五日締結ノ改稅約書明治十一年七月二十五日即千八百七
十八年七月二十五日締結ノ約書及之ニ附屬スル一切ノ諸約定ニ代ハルヘキモノトス而シテ該條約
及諸約定ハ右期日ヨリ總テ無効ニ歸シ隨テ合衆國カ日本帝國ニ於テ執行シタル裁判權及該權ニ屬
シ又ハ其ノ一部トシテ合衆國人民カ享有セシ所ノ特典、特權及免除ハ本條約實施ノ日ヨリ別ニ通
知ヲナサス全然消滅ニ歸シタルモノトス而シテ此等ノ裁判管轄權ハ本條約實施後ニ於テハ日本帝
國裁判所ニ於テ之ヲ執行スヘシ

第十九條

本條約ハ明治三十二年七月十七日ヨリ實施セララルヘキモノトス而シテ其ノ日ヨリ十二箇年間效力
ヲ有スルモノトス

兩締盟國ノ一方ハ本條約實施ノ日ヨリ十一箇年ヲ經過シタル後ハ何時タリトモ本條約ヲ終了セム
ト欲スル旨ヲ他ノ一方ヘ通知スルノ權利ヲ有スヘシ而シテ此ノ通知ヲ爲シタル後十二箇月ヲ經過
シタルトキハ本條約ハ消滅ニ歸スヘキモノトス

第二十條

本條約ハ兩締盟國ニ於テ之ヲ批准シ其ノ批准ハ本條約調印後六箇月以内ニ可成速ニ東京又ハ華盛
頓ニ於テ交換スヘシ

右證據トシテ各全權委員ハ之ニ記名調印スルモノナリ

明治二十七年十一月二十二日華盛頓ニ於テ本書一通ヲ作ル

栗野 慎一郎 印
ウオルター、キユー、グレンシャム 印

亞米利加合衆國政府ノ提議ニ係ル右條約ニ對スル修正
第十九條第二項中「兩締盟國ノ一方ハ」ノ下「本條約實施ノ日ヨリ十一箇年ヲ經過シタル後ハ」ノ文字
ヲ削リ「其ノ後」ノ文字ヲ挿入ス因テ該項ハ左ノ如クナルヘシ
兩締盟國ノ一方ハ其ノ後何時タリトモ本條約ヲ終了セムト欲スル旨ヲ他ノ一方ヘ通知スルノ權
利ヲ有スヘシ而シテ此ノ通知ヲ爲シタル後十二箇月ヲ經過シタルトキハ本條約ハ消滅ニ歸スヘ
キモノトス

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル日本國皇帝(御名)此書ヲ見ル有衆ニ宣示ス
朕帝國ト亞米利加合衆國トノ交際ヲ永久親睦ナラシメムコトヲ欲シ明治二十七年十一月二十二日
華盛頓ニ於テ兩國全權委員ノ記名調印シタル通商航海條約及亞米利加合衆國政府ノ提議ニ係ル該
條約ニ對スル修正ヲ親シク閱覽點檢シタルニ善ク朕カ意ニ適シ間然スル所ナキヲ以テ右修正ヲ加
ヘタル條約ヲ嘉納批准ス
神武天皇即位紀元二千五百五十五年明治二十八年二月二十七日廣島行在所ニ於テ親カラ名ヲ署シ
璽ヲ鈐セシム

御名 國 璽

外務大臣子爵陸奥宗光 印

議定書

日本國皇帝陛下ノ政府及亞米利加合衆國政府ハ本日調印セシ通商航海條約ノ外ニ雙方ニ關スル特
別ノ事項ヲ規定スルコト兩國ノ利益上便宜ナルヲ以テ雙方ノ全權委員ハ左ノ約定ニ同意セリ

第一 兩締盟國ニ於テハ本日調印シタル通商航海條約批准交換後一箇月ノ後ハ合衆國人民カ日
本國ニ輸入スル貨物及商品ニ關シテ現今日本國ニ於テ實施スル所ノ輸入税目ハ無効ニ歸スヘキ
モノトス而シテ右税目ノ無効ニ歸シタル後ハ日本國ニ輸入スル合衆國ノ領土ノ生産若ハ製造
ニ係ル貨物又ハ商品ニ對シテハ其ノ時現ニ行ハル、所ノ日本國普通關稅則ヲ適用スヘシ但シ
目下兩締盟國間ニ現存スル嘉永七年三月三日ノ條約ノ有效ナル間ハ其ノ第九條ノ規定ニ準據
シ又右嘉永七年三月三日ノ條約ノ無効ニ歸シタル後ハ本日調印シタル條約第四條及第十四條
ノ規定ニ準據スヘキモノトス然レトモ日本國政府ニ於テ純良ナラサル藥材、製藥、食物若ハ飲
料、猥褻ノ印刷物、圖書、書籍、紙牌、石版若ハ其ノ他ノ彫刻畫、寫真及其ノ他總テ猥褻ノ物品、日本
帝國ノ專賣特許商標及版權ニ關スル法律ニ違背スル物品又ハ其ノ他衛生、公安若ハ風俗ニ關
シテ危害ヲ生スヘキ物品ノ輸入ヲ制限シ若ハ禁止スルノ權利ハ本議定書ノ爲メ制限セラレハコ
トナカルヘキモノトス

第二 日本國政府ハ合衆國人民ニ對シ内國ヲ開ク迄ハ現行ノ旅券方法ヲ擴張スルコトニ同意ス
即合衆國人民カ在東京同國公使若ハ日本國開港場ニ駐在スル合衆國領事官ヨリノ紹介證書ヲ
所持シテ出願スルニ於テハ十二箇月以内ノ期限間内何レノ地ヘモ到ルコトヲ得ヘキ旅券ヲ
東京外務省若ハ開港場所在地方長官ヨリ交付スヘシ但シ帝國ノ内地ニ旅行スル合衆國人民ニ
關スル現行規定ハ之ヲ保續スヘキモノト知ルヘシ

第三 本議定書ハ本日調印シタル通商航海條約同時ニ兩締盟國政府ニ提供スヘシ而シテ右條
約批准セラレハトキハ本議定書ニ掲載スル所ノ諸約定モ別ニ正式ノ批准ヲ要セスシテ亦兩締
盟國政府ノ可認セシモノト看做スヘキコトヲ約ス又本議定書ハ前記條約ノ無効ニ歸スルト同

神奈川 午三月より凡十五箇月の後より
 長崎 午三月より凡十五箇月の後より
 新潟 午三月より凡二十箇月の後より
 兵庫 午三月より凡十五箇月の後より
 若し新潟港を開き難き事あるは其代りとして同所前後に於て一港を別に擇ぶべし
 神奈川港を開く後六箇月に於て下田港は鎖すべし此箇條の内に於ける各地は亞米利加人に居留を許すべし居留の者は一箇の地を假し出して借す又其所に建物あれば之を買ふ事妨なく且住宅倉庫を建てる事をも許すべし之を建てるに托して要害の場所を取建てる事は決して成さざるべし此條を堅くせん爲に其建物を新築改修修補など爲る事あらん時には日本役人を見分する事當然たるべし
 亞米利加人建物の爲に借り得る一箇の場所並に港々の定則は各港の役人と亞米利加人コンシユルと議定すべし若し議定し難き時は其事件を日本政府と亞米利加人プロマチャー・エージェントに示して處置せしむべし
 其居留場を門扉を設けず出入自在にすべし
 江戸 午三月より凡十四箇月の後より
 大阪 同前凡五十六箇月の後より
 右二箇所ハ亞米利加人只商賣を爲す間に於て逗留する事を得べし此兩所の町に於て亞米利加人建家を假し以て借るべき相當なる一區の場所並に散歩すべき規程を以て日本役人と亞米利加人プロマチャー・エージェントと談判すべし
 雙方の國人品物を賣買する事總て障りなく其拂方等に付ては日本役人は立會はず諸日本人亞米利加人より得たる品物を賣買し或は所持する俱に妨なく軍用の諸物は日本役所外へ賣るべからず尤外國人互の取引は差違ある事なし此箇條は條約本書爲取替濟の上は日本國內へ兩渡すべし
 米並に亞米利加人運留の亞米利加人並に船主乗組たる者及び船中旅客食料の爲の用意ハ與ふとも積荷として輸出する事を許さず○日本産する所の銅餘分あれば日本役所に於て其時々公けの札を以て拂渡すべし○在留此亞米利加人日本の賤民を雇ひ且諸用事に充る事を許すべし
 第四條 總て國地に輸入輸出の品々別冊の通日本役所へ運上を納むべし
 日本の上所に於て荷主申立の價改好ありと察する時は運上役より相當の價を付け其荷物を買入る事を許すべし荷主若し之を否む時は運上より付たる價に従て運上を納むべし承允する時は其價を以て直に買上べし
 合衆國海軍用意の品神奈川長崎箱館の内に陸揚し庫内に蔵めて亞米利加番人守護するものは運上此沙汰に及はず若し其品を買拂ふ時は買入る人より規定の運上を日本役所に納むべし
 阿片の輸入嚴禁たり若し亞米利加船三斤以上を持渡らば其過量の品ハ日本役人之改取上へし輸入の荷物定例の運上納

濟の上日本より國中に輸送すとも別に運上改取立る事なし亞米利加人輸入する荷物は此條約に定めたるより餘分の運上改納する事なく又日本船及他國の商船にて外國より輸入せる同一荷物の運上高と同様たるべし
 第五條 外國此諸貨幣は日本幣貨同種類同量度以て通用すべし(金ハ金銀ハ銀と量目を以て比較するを云)雙方此國人五斗物假し換ふに日本と外國との貨幣を用ゆる妨なく
 日本ハ外國此貨幣は開港の後凡一箇年此間各港の役所より日本の貨幣を以て亞米利加人頭次第引換渡すべし向後引換の爲め分割を償ふ及はす日本諸貨幣は(銅錢を除く)輸出する事改得並に外國の金銀は貨幣に歸するも歸さるも輸出すべし
 第六條 日本に對し法改犯せる亞米利加人は亞米利加人コンシユル裁斷所にて吟味の上亞米利加の法度を以て罰すべし亞米利加人へ對し法改犯たる日本人は日本役人の上日本の法度を以て罰すべし日本奉行所亞米利加人コンシユル裁斷所は雙方商人補償等の事をも公けに取扱ふべし
 都て條約中の規定並に別冊に記せる所の法則を犯すべし於てはコンシユルへ申送し取上品並に過料を日本役人へ渡すべし兩國の役人と雙方商民取引此事に付て差違事なし
 第七條 日本開港の場所に於て亞米利加人遊歩の規程左の如し
 神奈川 六郷川筋を限りて其他は各方へ凡十里
 箱館 各方へ凡十里
 兵庫 京都條路の事十里の地へは亞米利加人立入るる當に付き其方角を除き各方へ十里且兵庫に來る船々の乗組人は猪名川より海邊迄此川筋を越ゆべし
 都て里數を各港此奉行所又は御用所より陸路の程度なり(一里は亞米利加の四千二百七十五ヤルド日本の凡三十町四十八間一尺二寸五分に當る)
 長崎 其周圍ある御料所を限りてす
 新潟は治定の上境界を定むべし
 亞米利加人重立たる惡事ありて裁斷を請又は不身持にて再び裁許し處せられし者は居留の場所より一里外に不可出其者等は日本奉行所より國地退去の儀を其地在留此亞米利加人コンシユルに送すべし
 其者共引合奉行所並にコンシユルに對し其居留の上退去の期限檢査の儀はコンシユルより申立に依て相協ふべし尤其期限ハ決して一箇年を越ゆべし
 第八條 日本に在る亞米利加人自ら其國の宗法改心し禮拜堂或居留場の内に置も障りなく並に其建物を破壊し亞米利加人宗法を自ら念するを妨る事なし亞米利加人日本人の堂宮を毀傷する事なく又決して日本神佛此禮拜堂妨げ神像佛像を毀る事あるべからず
 雙方の人民互に宗旨に付て此争論あるべからず日本長崎役所に於て隨給の仕來ハ既に廢せり

第九條 亞米利加コンシユルに依て都て出奔人並に裁許の場より逃去し者及召捕又はコンシユル捕へ置たる罪人を獄に繋ぐ事協ふべし且陸地並に船中に在る亞米利加人に不法戒め規則を遵守せしむるか爲にコンシユル中立次第助力すべし

右等の諸入費並に依て日本の獄に繋きたる者の雜費は都て亞米利加コンシユルより償ふべし

第十條 日本政府合衆國より軍艦汽船商船船隻大砲軍用兵器並に兵器の類其他要需の諸物を買入れ又ハ製作を請へ或は其國の學者海陸軍法の士諸科の職人並に船夫を雇ふ事意の儘たるべし

都て日本政府注文の諸物品は合衆國より輸入し亞米利加人は差支なく本國より差送るべし合衆國親交の國と日本國萬一戰爭ある間は軍中制禁の品々合衆國より輸出せず且武事を扱ふ人々は差送らざるべし

第十一條 此條約に添たる商法別冊は本書同様雙方の臣民互に遵守すべし

第十二條 安政元年寅三月三日(即千八百五十四年三月三十一日)神奈川に於て取替したる條約の中此條々に關聯する條は取用ひす同四年己五月二十六日(即千八百五十七年六月十七日)下田に於て取替したる約書は此條約中に盡せるに依て取捨すべし

日本使官又は委任の役人と日本に來れる合衆國のデプロマチーキ、アグメントと此條約に規則並に別冊の條を全備せしむる爲に要すべき所の規律等談判致すべし

第十三條 今より凡百七十一箇月の後(即千八百七十二年七月四日に當る)雙方政府の存意を以て兩國の内より一箇年前に通過し此條約並に神奈川條約の内存し置る箇條及び此書に添たる別冊共々雙方委任の役人實験の上談判を盡し補ひ或は改る事を得べし

第十四條 右條約の趣は來る未年六月五日(即千八百五十九年七月四日)より執行すべし此日限或は其以前にても都合次第に日本政府より使節を以て亞米利加華盛頓府に於て本書を取替すべし若無餘儀子細ありて此期限中本書取替し濟すども條約の趣は此期限より執行すべし

本條約は日本より大君の御名と奥印を要し高官の者名を記し印を調て證とし合衆國よりは大統領自ら名を記しセキレタリース、フアンスタ、と共に自ら名を記し合衆國の印を給て證とし尤日本語英語關語にて本書寫共に四通を書し其譯文は何れも同義なりと雖關語譯文を以て證據と爲すべし此取極の爲安政五年六月十九日(即千八百五十八年亞米利加合衆國獨立の八十二年七月二十九日)江戸府に於て前に載たる兩國の役人署名を記し調印する者也

井上 信濃守 花押
岩崎 肥後守 花押
タウセンド、ハルリス 手記

日本開きたる港々に於て亞米利加商民貿易の章程

第一則 日本開港の場所(亞米利加商船入津次第二十四時中、亞米利加の四十八時但日曜日を除く)に船司又は頭立たる者

より日本役所へ亞米利加コンシユルの積取の書付を差出すべし

此積取書は亞米利加國の提通り認たる船目録其外の書類を亞米利加コンシユルへ預けたる積取書なり

右は入津の船の名其船の仕出し場の港の名順數船司或は頭立たる者の名乘來る旅人の名(乘組有之節は認入る)一船の乘組人數を認たる者より書面の通相違無之旨を船司或は頭立たる者與書致し證據として當人の名前を認入たる者なり

同時に其船積荷の告書を役所に預くべし

右は其積荷の諸帳並に番付且其入目斤數等を送狀に認めし通に寫し荷物引請先の人々の名を記せる者なり

船中用意の品物の目録も告書へ加ふべし

但船中用意の品物も書面の通相違無之旨を船司又は頭立たる者與書し其名前を記すべし

此告書の文面相違の限日本十二時(亞米利加の二十四時但日曜日を除く)の中に心附改るに於ては過料の沙汰に及ばざる其期限後に至り書改る或又は告書に書入れするに於ては十五ドルの過料を日本役所に納むべし○積荷總目録告書中に載せざる品を陸揚するに於ては其品二重の運上を日本役所に納むべし○船司或は頭立たる者入港の手數納方前書の期限に後る時は過料として一日毎に毎六ドルの過料を日本役所に納むべし

第二則 日本政府より其港内入津の船々(軍艦を除く)に運上方改の役人乘組する儀當然たるべし

乘組の者共は右役人より對し不敬無之丁寧に取扱いたし船中可成丈相當の用便を爲すべし○夜中は日本役所より許なくして荷卸すべし○荷揚前船々出入口荷物仕舞置戸口より口共夜中は日本役人並に或は印封し夫々の取締を爲し置べし○萬一許なく之を開き又は錠印封を破り品物を引出等の者は其犯せる人毎に六十ドルの過料を日本役所に取立べし○日本役所へ當然の差出書を出さずして荷卸いたし或は其事を謀れる品々は次の箇條に定めたる通取押へ日本役所に取上るべし

荷物の中積荷目録に載せる品々を取隠し匿收納を減せんと仕組たる者は其品を日本役所に取上べし○日本の開かざる港にて密買を爲すは勿論其仕組有之亞米利加船は其品を日本役所に取上の上犯せる毎に千ドルの過料を納むべし

修復の爲に入津の船々は運上なく積荷を陸揚し日本役所へ預るべし○雖職數作事並に番人等の諸入用は相當の價を出すべし

若し其積荷の内を賣拂ふ時は其積荷物丈は規定の通日本役所に運上を納むべし

積荷を同港内の他船へ移す時は日本役人見分の上事情明白に相分り免狀を請る上は定の運上なり

阿片の輸入嚴禁たり然るに密商し又其事を謀る者は阿片一斤毎に十五ドルの過料を日本役所に納むべし○其組合の人數の多少に拘らず此法を以てすべし

第三則 品物を送る荷主又は引請先の者より入津の荷物を陸揚せんとする者は其積荷の差出書を日本役所に出すべし

此書面は荷主又は引請人の名前積送たる船の名荷物の體積番付其積荷の斤數石高每品の代料を認め其總高を其番付の末に記す(一)

都て此差出書付は荷主又は引請人認たる爲なき價を申立る書面にて日本役所の規定に關れたる際、荷物なき證據として右之通積荷目録差出等の書類日本役所に差出、右書付引合せ積荷用意品等取調濟送は品物とも日本役所の預りたる(一)

日本役人右之通差出たる荷物の内或は總體を定式の通改む(一)

若し運上役所に引上げ改る事ある時は輸入人の失費相掛けす可成寸品物の損せざる様に致し改濟の上は元の如く取始末す(一)取調方格外時日を費さる(一)

荷主或ハ輸入人餘々持受の品改濟役所より引渡さる以前輸入の途中(日本役所へ差出さる以前の事をいふ)破壊損傷の品々心附く時は當人より其段運上役所に申立其品取扱ふ職業の廉潔なる者兩人以上出會直組致させ其荷物毎に損高を分割に記し其體積番數共に證書に相認込(一)故日本役人立合にて直組人等名を記す(一)右の體積兼々持受の差出書へ添へ總高の内を引落す(一)尤條約第四箇條の取極の通運上役所にて取扱ふ事故降ある(一)からず

諸運上納濟の後運上役所より陸揚不苦段免許状を渡す(一)品物渡方は運上役所にて其者の願に任す(一)

輸出に極りたる荷物は船に輸送する前廣に運上役所へ船名荷物の體積番付入高斤數目性合並に代料を記せる差出書付を出し書面の通脚爲なき由を輸出人等證據として其名前を認む(一)運上役所へ差出以前船中へ積込たる荷物並に運上役所へ差出、賣の上禁制品を載し荷物の内へ入れ有之は改の上日本役所に取上(一)

船中當用の品又は乗組旅客の當用衣類等は運上役所に差出さる(一)

第四則 出港手数を願ふ船々は日本十二時(亞米利加の二十四時)前に運上役所へ申立(一)此期限内に右手數遅々せざる取扱ふは勿論たる(一)右手數差止る事あらは日本役人より船司又は頭立たる者並に其船荷の取引人等(其段申渡し亞米利加コンシユルに申達す(一)合衆國の軍艦は入港出港運上筋の手數に及はず運上役人並に番兵等差構ふ事な(一)合衆國飛脚の爲めの落氣船は入港出港の手數を一日に致し日本の上陸する旅客並に品々の外は告書差出、書面の手數なしと雖何箇度にも入港の度毎に入港出港の手數を一日に致し日本の上陸する旅客並に品々の外は告書差出、書面の手數なしを提出す(一)雖若其積荷を賣拂はんは願ふ時は第一則の通定式輸入の手數をいたす(一)

第五則 日本運上役所の規則に違ひたる船差出、積荷目録を出し、並に證書に名前を記せる輩は其犯す毎に百二十五ドルの過税を日本役所に納む(一)

第六則 噸税は日本開港の場所に於て亞米利加船より取立すと雖左の規定の通其地其地の運上役所に納む(一)

一 船の入港手數に付 十五ドル
一 船の出港手數に付 七ドル

夫々の瓦狀に付 一ドル半
其外の各書に付 一ドル半

第七則 總て日本開港の場所へ陸揚する物品には左の運上目録に従ひ其地の運上役所に租税を納む(一)

第一類 貨幣に造りたる金銀並に造らざる金銀當用の衣服
家財並に商賣の爲にせざる書籍
何れも日本居留のため來る者の所持の品に限る(一)

右の品々は運上(一)

第二類 凡て船の造立網具修復或は船裝の爲に用ふる品々、顯漁具の類、鹽漬食物の諸類
パン並にパンの粉
生たる鳥獸類
石炭
家を造るための材木
米、飯、蒸氣の器機
トタン、鉛、錫、生絹

右の品々は五分の運上を納む(一)

第三類 都て蒸溜或は醸種々の製法にて造りたる一切の酒類右は三割五分の運上を納む(一)

第四類 凡し前條に舉ぐる品々は何に寄らず二割の運上を納む(一) 金銀貨幣並に植銅の外日本産の物積荷として輸出する時は五分の運上を納む(一)

右は神奈川開港後五年に至り日本役人より談判次第入港出港の税則を再議す(一)

改稅約書 西曆一千八百六十六年六月二十五日
日本安政五戊午(西曆一千八百五十八年)日本政府と大親利太泥亞、佛蘭西、亞米利加合衆國、荷國、四箇國と取結、條約に添たる交易規則第七則に定め置、通り其輸入輸出の運上目録を改む(一)を旨右四箇國の名代人夫々の政府より一様の命令を受け且又日本慶應元年乙丑十月(西曆一千八百六十五年十一月)四箇國の名代人大阪に赴き、折日本政府より輸入輸出の諸品都て假五分の運上を基本とし、右運上目録を猶豫なく改む(一)を趣を約束、將日本政府は外國との交易を盛んにし、和親の交際益駕からん事を欲するの願を更に顯はさんか爲め日本外國事務老中水野和泉守殿大親利太泥亞の名代人シル、ハルリー、エス、パ、イ、ク、ス、佛蘭西の名代人モツシユル、レ、オ、ン、ロ、セ、ス、亞米利加合衆國の名代人エ、ム、ル、ン、ボ、ルト、マン、エ、ス、ク、ワ、イル、荷國の名代人モツシユル、ド、デ、ガ、ラ、イ、フ、ア、ン、ボ、ル、ス、フ、ル、ン、ク、合議の上左の十二條を決定せり

第一條 各政府の名代として此度約書を議定せし全權は此約書に添たる運上目録を採用し各政府の臣民皆之を遵奉す

（き事とせり）
 其運上目録は日本と右四箇國と取結たる條約に添たる元の運上目録に代るのみならず又日本政府と大親利太泥亞、佛蘭西、亞米利加合衆國政府とは是迄度々取結たる右運上目録に關係せる別約にも代れるものとす右新運上目録取行ふ事神奈川に於ては日本應應二年丙寅五月十九日（西洋千八百六十六年七月一日）より長崎箱館に於ては同六月二十一日（第八月一日）よりとす。

第二條 此度の約書に添たる運上目録は調印の日より日本と右四箇國と取結たる條約の内に併せられたれば日本來壬申年中（西洋千八百七十二年七月一日）に至り改むべしと雖も茶生絲運上の分は此度の約書調印より二箇年の後雙方の内何れの方よりなりとも六箇月前に告知し前三箇年中平均相場五分に基き之を改むる事を求むべし又材木の運上は此度の約書調印より六箇月後に告知して時相場に従ひ運上を納る事を改めて品物に従ひ運上高を定むる事を得べし

第三條 元條約に添たる交易規則の第六則に従ひ是迄取立來れる免狀料は此度より相懸せり尤荷物陸揚船積に付ての免狀料は是迄通りたるべしと雖も以後は其謝銀を出す事なかるべし

第四條 神奈川於て日本應應二年丙寅五月十九日（西洋千八百六十六年七月一日）長崎箱館於て日本應應二年丙寅八月二十三日（西洋千八百六十六年十月一日）より日本政府輸入する者の乘に應じ運上を納る事なく其輸入品を藏に入置用意を爲すべし日本政府にて其品を預り置間には盜難並風雨の損害なき様引受べし尤火難は政府にては引受すと雖も外國商人共右荷物火難の受合十分出來すべし其積固の土藏を取進べし就ては荷物を輸入する人又は荷主之を土藏より引取んとする時は運上目録通りの運上を拂ふべし其品物を再び輸出せんと欲する時は輸入運上を納るに及ばず荷物を引取る節は何れにも藏敷を拂ふべし右藏敷高は貨藏取扱規則に雙方相談の上議定すべし

第五條 日本と外國との陸路水路修復の爲諸商貨に付て取立る通例の運上の外は別に運送運上を納むる事なく日本の内何れの地より外國交易の爲開きたる各港へ運送する事勝手たるべし

第六條 日本と外國との條約中に外國貨幣は日本貨幣と同種同量の割合を以て通用すべしと取極たる箇條に従ひ是迄日本運上所に選差哥ドルを以て運上を納むる時は一分銀の貨目に比較しドル百枚を一分銀三百一十箇の割合を以て請取來れり然る處日本政府に於て右仕來を改め總て外國の貨幣日本貨幣と引替る事に際りなき様にして又日本通用の貨幣を不足なき様に交易を便利にせん事を欲するに於て日本政府は金銀吹立所を盛大にせん事を既に決せり然る上は日本人又は外國人より差出すべき總て外國金銀貨幣並地金は日本貨幣に吹替へ其諸雜費を差引其貨の單位を以て其爲め定めたる場所に於て引替んとす此處置を行ふ爲め日本と條約を取結し各國は其條約に書載たる貨幣通用に關係せる箇條を改むる事要ならば右箇條を改むる様日本政府より申請し承諾の上日本來丁卯年十一月廿一日（西洋千八百六十八年第一月一日）より其處置を取行へし

吹替の雜費として取立べき高の割合は向後雙方の全協協議の上定むべし

第七條 運上所請取扱荷物の陸揚船積及び船人足小遣等原方に付開港場に於て是迄取出たる不都合を除かんか爲し各開港場の奉行並に外國のコンシニールと談判に及び雙方協議の上右の不都合決して無之様規則を立て交易の道此各人の所務を可成り容易く且安全ならむる様雙方妥に議定せり

右規則の内には各港に於て外國人荷物陸揚船積の爲に用ふる波月場の内にて荷物雨露に損せざる様小屋掛を作る事を書入へし

第八條 日本人身分に拘はらず日本開港場又は海外に於て旅客又は荷物を送るべき各種の帆船船積共買入る事勝手たるべし尤軍艦は日本政府の免許をければ買入る事を得ず

日本人買入たる諸外國船は蒸氣船は一噸に付一分銀三箇帆前船は一噸に付一分銀一箇の運上を定通り相納る時は日本の船として船籍に書載すべし尤其船の噸數を定むる爲め日本長官の需に應じ其船のコンシニールより本國の船目録の寫を相示し其真を證すべし

第九條 日本と右四箇國と取結したる條約且日本政府の使節日本文久二年壬戌五月九日（西洋千八百六十二年六月六日）大親利太泥亞政府へ送れる免狀及同八月十三日（第十月六日）佛蘭西政府へ送れる免狀に載せたる別約に従ひ日本人と外國人と交易又は交通する事の妨を全く除くべき趣を以て日本政府より既に免狀を達したり就ては日本の諸商人政府役人の立合なく相對に日本の開港場及び此約書中第十條に載せたる仕方に於て海外へ出る許しを得れば各外國に於ても外國商人と交易する事勝手たるべし尤日本人通商例に於て取立る運上より餘分は日本政府へ收むる事なし且諸大名並に其使用する人々現在取締の規則を守り定通の運上を納る時は日本役人の立合なく諸外國又は日本の諸開港場に赴き其場所にて交易する事右同様勝手たるべし

第十條 日本人身分に拘はらず日本の開港場又は各外國の港々より日本の開港場又は各外國の港々に赴くべき日本人所持の船又は條約外國船にて荷物を積入る事勝手たるべし且既に日本應應二年丙寅四月九日（西洋千八百六十六年第五月二十三日）日本政府より開港場を以て布告せし如く其船より政府の印章を得れば修行又は商賣する爲め各外國に赴く事並に日本と親睦なる各外國の船中に於て諸般の職事を勤むる事故障なく外國人雇居く日本人海外へ出る時は開港場の奉行へ願出政府の印章を得る事妨げなし

第十一條 日本政府は外國交易の爲め開きたる各港寄船々の出入安全のため燈明標淨水標印本等を備ふべし

第十二條 此約書取行ふ以前雙方政府許允の沙汰を待たざざる故日本應應二年丙寅五月十九日（西洋千八百六十六年第七月一日）より取行ふべし

右約書を政府許允の上は雙方全權其段互に通達すべし右通達の書面は雙方君主保證の代りとし

此證據として前文全權此約書に名を記し調印せり

日本應應二年丙寅五月十三日（西洋千八百六十六年六月二十五日）江戸に於て雙方全權各其國語を以て之を記せり

水野 和泉守 花押

（き事とせり）
 其運上目録は日本と右四箇國と取結たる條約に添たる元の運上目録に代るのみならず又日本政府と大親利太泥亞、佛蘭西、亞米利加合衆國政府とは是迄度々取結たる右運上目録に關係せる別約にも代れるものとす右新運上目録取行ふ事神奈川に於ては日本應應二年丙寅五月十九日（西洋千八百六十六年七月一日）より長崎箱館に於ては同六月二十一日（第八月一日）よりとす。

第二條 此度の約書に添たる運上目録は調印の日より日本と右四箇國と取結たる條約の内に併せられたれば日本來壬申年中（西洋千八百七十二年七月一日）に至り改むべしと雖も茶生絲運上の分は此度の約書調印より二箇年の後雙方の内何れの方よりなりとも六箇月前に告知し前三箇年中平均相場五分に基き之を改むる事を求むべし又材木の運上は此度の約書調印より六箇月後に告知して時相場に従ひ運上を納る事を改めて品物に従ひ運上高を定むる事を得べし

第三條 元條約に添たる交易規則の第六則に従ひ是迄取立來れる免狀料は此度より相懸せり尤荷物陸揚船積に付ての免狀料は是迄通りたるべしと雖も以後は其謝銀を出す事なかるべし

第四條 神奈川於て日本應應二年丙寅五月十九日（西洋千八百六十六年七月一日）長崎箱館於て日本應應二年丙寅八月二十三日（西洋千八百六十六年十月一日）より日本政府輸入する者の乘に應じ運上を納る事なく其輸入品を藏に入置用意を爲すべし日本政府にて其品を預り置間には盜難並風雨の損害なき様引受べし尤火難は政府にては引受すと雖も外國商人共右荷物火難の受合十分出來すべし其積固の土藏を取進べし就ては荷物を輸入する人又は荷主之を土藏より引取んとする時は運上目録通りの運上を拂ふべし其品物を再び輸出せんと欲する時は輸入運上を納るに及ばず荷物を引取る節は何れにも藏敷を拂ふべし右藏敷高は貨藏取扱規則に雙方相談の上議定すべし

第五條 日本と外國との陸路水路修復の爲諸商貨に付て取立る通例の運上の外は別に運送運上を納むる事なく日本の内何れの地より外國交易の爲開きたる各港へ運送する事勝手たるべし

第六條 日本と外國との條約中に外國貨幣は日本貨幣と同種同量の割合を以て通用すべしと取極たる箇條に従ひ是迄日本運上所に選差哥ドルを以て運上を納むる時は一分銀の貨目に比較しドル百枚を一分銀三百一十箇の割合を以て請取來れり然る處日本政府に於て右仕來を改め總て外國の貨幣日本貨幣と引替る事に際りなき様にして又日本通用の貨幣を不足なき様に交易を便利にせん事を欲するに於て日本政府は金銀吹立所を盛大にせん事を既に決せり然る上は日本人又は外國人より差出すべき總て外國金銀貨幣並地金は日本貨幣に吹替へ其諸雜費を差引其貨の單位を以て其爲め定めたる場所に於て引替んとす此處置を行ふ爲め日本と條約を取結し各國は其條約に書載たる貨幣通用に關係せる箇條を改むる事要ならば右箇條を改むる様日本政府より申請し承諾の上日本來丁卯年十一月廿一日（西洋千八百六十八年第一月一日）より其處置を取行へし

吹替の雜費として取立べき高の割合は向後雙方の全協協議の上定むべし

第七條 運上所請取扱荷物の陸揚船積及び船人足小遣等原方に付開港場に於て是迄取出たる不都合を除かんか爲し各開港場の奉行並に外國のコンシニールと談判に及び雙方協議の上右の不都合決して無之様規則を立て交易の道此各人の所務を可成り容易く且安全ならむる様雙方妥に議定せり

右規則の内には各港に於て外國人荷物陸揚船積の爲に用ふる波月場の内にて荷物雨露に損せざる様小屋掛を作る事を書入へし

第八條 日本人身分に拘はらず日本開港場又は海外に於て旅客又は荷物を送るべき各種の帆船船積共買入る事勝手たるべし尤軍艦は日本政府の免許をければ買入る事を得ず

日本人買入たる諸外國船は蒸氣船は一噸に付一分銀三箇帆前船は一噸に付一分銀一箇の運上を定通り相納る時は日本の船として船籍に書載すべし尤其船の噸數を定むる爲め日本長官の需に應じ其船のコンシニールより本國の船目録の寫を相示し其真を證すべし

第九條 日本と右四箇國と取結したる條約且日本政府の使節日本文久二年壬戌五月九日（西洋千八百六十二年六月六日）大親利太泥亞政府へ送れる免狀及同八月十三日（第十月六日）佛蘭西政府へ送れる免狀に載せたる別約に従ひ日本人と外國人と交易又は交通する事の妨を全く除くべき趣を以て日本政府より既に免狀を達したり就ては日本の諸商人政府役人の立合なく相對に日本の開港場及び此約書中第十條に載せたる仕方に於て海外へ出る許しを得れば各外國に於ても外國商人と交易する事勝手たるべし尤日本人通商例に於て取立る運上より餘分は日本政府へ收むる事なし且諸大名並に其使用する人々現在取締の規則を守り定通の運上を納る時は日本役人の立合なく諸外國又は日本の諸開港場に赴き其場所にて交易する事右同様勝手たるべし

第十條 日本人身分に拘はらず日本の開港場又は各外國の港々より日本の開港場又は各外國の港々に赴くべき日本人所持の船又は條約外國船にて荷物を積入る事勝手たるべし且既に日本應應二年丙寅四月九日（西洋千八百六十六年第五月二十三日）日本政府より開港場を以て布告せし如く其船より政府の印章を得れば修行又は商賣する爲め各外國に赴く事並に日本と親睦なる各外國の船中に於て諸般の職事を勤むる事故障なく外國人雇居く日本人海外へ出る時は開港場の奉行へ願出政府の印章を得る事妨げなし

第十一條 日本政府は外國交易の爲め開きたる各港寄船々の出入安全のため燈明標淨水標印本等を備ふべし

第十二條 此約書取行ふ以前雙方政府許允の沙汰を待たざざる故日本應應二年丙寅五月十九日（西洋千八百六十六年第七月一日）より取行ふべし

右約書を政府許允の上は雙方全權其段互に通達すべし右通達の書面は雙方君主保證の代りとし

此證據として前文全權此約書に名を記し調印せり

日本應應二年丙寅五月十三日（西洋千八百六十六年六月二十五日）江戸に於て雙方全權各其國語を以て之を記せり

水野 和泉守 花押

佛國全權公使
レオン、ロセス 印

英國特派全權公使
ハリ、エス、パークス 印

合衆國代理公使
エ、エルシ、ポルトマン 印

蘭國日代表コンシニル、ゼネラール
ド、デグラーフ、フアン、ボルスブルック 印

運上目録
(輸入品輸出品各種共之ヲ略ス)

規則
第一則 輸入目録に載せざる品は輸出目録に載する事あり共之に隨て税を納むヘからず元代に隨て税を納むヘ一輸出目録に載せざる品も右同様たるヘ一

第二則 日本に在留せる外國人及ハ外國船の乗組人又旅客に自己の用に足れる丈は輸出目録に載せたる穀物並に粉を賣入る、事許すヘ一尤右穀物並に粉を外國船に積込んとする以前に通例の通運上所より船積の免許狀を得る事必須トす

第三則 此規則に載する所の日本一斤(則百六十目)は英吉利アカイルチニゴイツ貨目一ポンド及三分一に當リ一ヤード(日本曲尺三尺餘)は英吉利尺度三フットに當リ一分(目方二文目三分)は日本の銀貨にして其重量トロイ實目百三十四グレイン以下に下らず其貨は純銀の九分以下に下らず其交せ物は一分より多からざるヘ一分以下の數は一分を百分にせし算動なり

英國特派全權公使
ハルリー、エス、パークス 手記

佛國全權公使
レラン、ロセス 手記

合衆國代理公使
エ、デ、ポルトマン 手記

蘭國日代表コンシニル、ゼネラール
フアン、ボルスブルック 手記

水野 和泉守 花押

第二十五號布告(明治二十八年七月一日)
今般亞米利加合衆國ト別冊ノ通改定條約相成條條此旨布告候事
(別冊)

日本國 日本國合衆國間現存條約中或箇條ヲ改定シ且兩國ノ通商ヲ增進スル爲メノ約書

日本國 皇帝陛下及亞米利加合衆國

大統領ハ從來幸ニ兩國間ニ現存スル所ノ親睦ナル交際ヲ維持セントコトヲ希望シ且追加ノ約書ニ因テ庶幾クハ尙一層其交際ヲ固クシ兩國間ノ貿易ヲ擴張シ且堅實ナラシメントス其爲メ雙方ニ於テ各自ノ全權委員ヲ選フ即チ日本國皇帝陛下ハ亞米利加合衆國ニ駐劄スル特命全權公使從四位勳三等吉田清成 合衆國大統領ハ國務卿ウヰリアム、マツキスウエル、エウワソフ 右雙方ノ全權委員ハ各其委任狀ヲ相示シ雙方其確實正當ナルヲ認認シテ左ノ各條ヲ協議決定セリ

第一條

慶應二年五月十三日即チ西曆一千八百六十六年六月二十五日一方ハ日本國委員他ノ一方ハ亞米利加合衆國大統領太泥亞佛蘭西和蘭ノ委員江戸ニ於テ調印シタル改稅約書並ニ右約書中ニ載セタル輸出入品運上目録及借庫規則ハ日本ト合衆國トノ間ニ於テハ茲ニ之ヲ廢棄シ而シテ現ニ其施行ヲ止ムルハ此約書ノ第十條ニ揭載スル約書實施ノ時ニ於テスヘシ又江戸ニ於テ取結ヒタル安政五年即チ西曆一千八百五十八年條約ノ中港海關稅及諸稅ノ諸規則ニ關スル條款並ニ右安政五年即チ西曆一千八百五十八年ノ條約ニ添ヘタル貿易章程モ悉皆之ヲ廢棄スヘシ 此約書實施ノ日ヨリ日本海關稅並ニ其他ノ諸稅ヲ自由ニ賦課シ及日本開港場外國貿易ニ關スル諸規則制定ノ權利ハ獨リ日本政府ニ屬スルコトヲ合衆國ハ認認スヘシ

第二條

然レトモ合衆國ヨリ日本ニ輸入スル諸物品ニ課スル稅額ハ他ノ外國ヨリ輸入スル同種類ノ物品ニ課スルモノニ超過ス可カラズ而シテ若日本政府ニ於テ其領地内ヘ或物品ノ輸入若クハ輸出ヲ禁止スルコトアルトキハ合衆國ノ產物船積或ハ人民ニ對シ他ニ異ナル所ノ禁止ヲ爲サ、ル可シ

第三條

合衆國ハ日本ニ向テ輸出スル物品ニ輸出稅ヲ課セサルヲ以テ此約書實施ノ後ハ日本ニ於テモ亦合衆國ヘ向テ輸出スル物品ニ輸出稅ヲ課セサルヘシ

第四條

安政五年即チ西曆一千八百五十八年ノ條約第六條第一節即チ最初ノ三句現存スル間ハ右現存條約ノ違犯若クハ此約書ニ因テ日本政府ニ於テ時々制定スル海關稅借庫及港ノ諸規則違犯ニ關スル沒入品或ハ罰金ニ付日本政府ノ要求ハ悉ク合衆國領

審裁判所ニ依リ可シ而シテ該國領事ハ各該國ノ公正ニ審案シ右條約及諸規則ノ條款ニ照ラシテ之ヲ裁斷ス可シ而シテ右没入品或ハ罰金ハ日本官員ニ交付スヘシ

第五條

日本沿海貿易統轄ノ權利ハ獨リ日本政府ノミニ屬スル者タルコトハ固ヨリ雙方ノ承認スル所タルヲ以テ此ニ之ヲ明言ス

第六條

然レトモ日本開港場ニ來着スル合衆國ノ船舶ハ日本海關稅則ニ隨ヒ其船載スル物品中幾部分タリトモ其空ニ任セ陸揚スルヲ得ヘシ而シテ其船舶ハ右陸揚シテ積荷目録中ニ其事由ヲ記載シタル部分ノ外ハ輸入稅其他一切ノ諸稅ヲ拂ハスシテ其積餘ノ物品ヲ載セ出港スルヲ得ヘシ右船舶ハ其後他ノ日本諸開港場ニ航行シ其空ニ依リ殘リノ物品ヲ右諸開港場ニ陸揚スルヲ得ヘシ然レトモ凡テ船舶ノミニ對シ課スル諸稅諸費ハ最初其積荷ノ幾部分ヲ陸揚スル港ニノミニ於テ拂フヘシ而シテ該船舶其後引續キ航海シテ到ル所ノ港ニ於テハ其地方港内諸稅ノミヲ入港ノ爲メニ拂フヘシ

第七條

合衆國ハ上文第一條ニ約スルカ如ク日本輸出入品運上目録運上規則及ヒ其他ノ諸規則ニ關シ讓與スル所アルヲ以テ日本政府ハ五相ノ理ニ基キ左ノ事ヲ讓與ス即チ從前開港場ノ外ニ更ニ二港ヲ此約書實施ノ日ヨリ合衆國人民並ニ商船來往貿易ノ爲メニ開ク可シ

第八條

但シ二港中一港ハ下ノ關タルヘシ而シテ他ノ一港ハ此後雙方協議ノ上決定スヘシ

第九條

從來兩國間ニ結約シタル條約或ハ約書ノ條款中今茲ニ廢棄ヲ明揭セザルモノニシテ此約書ノ條款ニ抵觸スルモノハ悉皆廢棄ス可シ且ツ此約書ハ兩國間現存條約ノ一部分ト爲ス可シ

第十條

此約書ハ日本ト他ノ締結各國ト現存此約書ト均シキ所ノ約書或ハ現存條約ト重修ヲ取結ヒ右現行ノ時ニ至リ實施スヘシ此約書ハ批准ヲ要スルモノトス而シテ其交換ハ此約書調印ノ日ヨリ十五箇月以内ニ成ル可ク速ニ華盛頓府ニ於テスヘシ右ノ照シテ上文記載ノ全權委員各自カラ其名ヲ署シ印ヲ給ス

華盛頓府ニ於テ

明治二十八年七月二十五日

西曆一千八百七十八年七月二十五日

吉田 清成 (印)

ウヰリアム、エム、エウワト (印)

天祐ヲ保有シ萬世ノ帝祚ヲ踐タル日本國皇帝(御名)此書ヲ見ル有衆ニ宣示ス善長適宜ナル朕カ特別ノ全權ヲ有セル特命全權公使吉田清成ヲ以テ千八百七十八年七月二十五日華盛頓府ニ於テ日本國及合衆國ノ間ニ取結ヒシ約書ヲ朕親ヲ閱覽點檢セシニ能ク朕カ意ニ適シ更ニ開然スヘキナシ故ニ凡テ其約書條款ニ掲クル本趣ハ朕並ニ之ヲ嘉納批准ス

神武天皇即位紀元二千五百三十九年明治二十八年二月七日東京宮中ニ於テ親ヲ名ヲ署シ照シ給セシム

奉勅 外務卿 寺島 宗則 (印)

朕選信省部内定員外補缺員ノ俸給支給ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年三月二十六日

内閣總理大臣 伯耆伊藤博文
遞信大臣 渡邊國武

勅令第二十一號(官報三月二十八日)

遞信省部内ニ於テ明治二十七年勅令第百八十三號ニ依リ定員外判任官ノ補缺ヲ爲サントスル場合ニ於テ便宜雇員ヲ使用シ其ノ俸給ハ判任官俸給豫算定額内ヨリ之ヲ支給スルコトヲ得

(參照)

勅令第百八十三號(明治二十七年十月二十日官報)

遞信省部内ノ官吏ニシテ本官ノ儘陸軍戰時特設ノ職務ニ從事スル者ハ本國官職ノ必要ニ應ジ之ヲ定員外トシ其ノ補缺ヲ爲スコトヲ得

朕郵便及電信局官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年三月二十七日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文
逓信大臣 渡邊國武

勅令第二十二號(官報 三月二十九日)

郵便及電信局官制中左ノ通改正ス

第十五條中「千八百四十五人」ヲ「千九百二十八人」ニ改ム

第十七條中「三千百一十一人」ヲ「三千二百八十二人」ニ改ム

附則

本令ハ明治二十八年四月一日ヨリ施行ス

〔參照〕

勅令第五百五十二號郵便及電信局官制(明治二十六年十月三十一日官報)抄録

第十五條 郵便電信書記ハ各局ヲ通シテ千八百四十五人ヲ以テ定員トス

第十七條 郵便電信書記補ハ各局ヲ通シテ三千百一十一人ヲ以テ定員トス

朕郵便爲替貯金管理所官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年三月二十七日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文
逓信大臣 渡邊國武

勅令第二十三號(官報 三月二十九日)

郵便爲替貯金管理所官制中左ノ通改正ス
第七條中「五百四十九人」ヲ「五百六十九人」ニ改ム

附則

本令ハ明治二十八年四月一日ヨリ施行ス

〔參照〕

勅令第四百四十八號郵便爲替貯金管理所官制(明治二十四年七月二十七日官報)抄録

第七條 書記書記補ハ五百四十九人ヲ以テ定員トス

朕水産調査所官制改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年三月二十七日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文
農商務大臣子爵榎本武揚

勅令第二十四號(官報 三月三十日)

水産調査所官制

第一條 水産調査所ハ農商務大臣ノ管理ニ屬シ左ノ事務ヲ掌ル

一 水産物ノ調査

二 漁具、漁船及漁法ノ調査

三 漁場ノ調査

四 水産物ノ繁殖、製造及漁撈ノ試験

五 製鹽ノ調査及試験

六 水産物販路ノ調査
 七 水産物、其ノ製品、鹽田土壤等ノ分析鑑定
 第二條 水産調査所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長
 技師
 技手
 書記

第三條 所長ハ農務局長ヲ以テ之ニ充ツ農務大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所中全般ノ事務ヲ掌理ス
 第四條 技師ハ上官ノ指揮ヲ承ケ所務ヲ掌ル技師ハ三人ヲ以テ定員トス
 第五條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ所務ニ從事ス專任技手ハ十四人ヲ以テ定員トス
 第六條 書記ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス專任書記ハ四人ヲ以テ定員トス
 第七條 農務大臣ハ必要ト認ムル地ニ於テ水産試験場ヲ置キ水産調査所職員ヲ派シ調査事務ヲ分掌セシムルコトヲ得

附則

第八條 本令ハ明治二十八年三月三十一日ヨリ施行ス

朕水産調査會規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年三月二十七日

内閣總理大臣 伯爵 伊藤博文
農商務大臣 子爵 榎本武揚

勅令第二十五號(官報三月三十日)

水産調査會規則

第一條 水産調査會ハ農商務大臣ノ監督ニ屬シ水産ノ調査試験其ノ他水産ニ關スル重要ノ事項ニ付農商務大臣ノ諮詢ニ應シ意見ヲ開申ス
 第二條 水産調査會ハ水産ニ關スル事項ニ付主任各省大臣ニ建議スルコトヲ得
 第三條 水産調査會ハ會務整理ノ爲メ規則ヲ議定シ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ
 第四條 水産調査會ハ會長一人委員二十人以内ヲ以テ之ヲ組織ス
 第五條 特別ノ事件ヲ審議スル爲メ臨時必要ノ場合ニ於テ前條定員ノ外臨時委員ヲ命スルコトヲ得
 第六條 會長委員及臨時委員ハ官吏又ハ學識若クハ經驗アル者ノ中ヨリ選定シ農商務大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス
 第七條 會長ハ議事規則ニ依リ議事ヲ整理シ會議ノ決議ヲ農商務大臣及主任各省大臣ニ具申ス
 第八條 會長事故アルトキハ農商務大臣ノ指命シタル委員ヲシテ事務ヲ代理セシム
 第九條 水産調査會ニ幹事一人ヲ置キ農商務省高等官ヲ以テ之ニ充ツ
 第十條 會長委員及幹事ニハ一箇年五百圓以内臨時委員ニハ事件ノ輕重ニ應シ其ノ都度相當ノ手当ヲ給スルコトヲ得
 第十一條 水産調査會ニ書記ヲ置ク會長及幹事ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス
 書記ハ農商務省判任官ヲ以テ之ニ充ツ
 第十二條 書記ニハ一箇年百圓以内ノ手当ヲ給スルコトヲ得
 附則
 第十三條 本令ハ明治二十八年三月三十一日ヨリ施行ス

朕公使館領事館費用條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セム

御名 御璽

明治二十八年三月二十七日

外務大臣子爵陸奥宗光

勅令第二十六號(官報 三月三十日)

明治二十六年勅令第七十一號公使館領事館費用條例中左ノ通改正ス

第七條 外交官領事官公使館書記生及領事館書記生兼任國若クハ兼任地駐在中ハ本任所ノ在勤俸ヲ給ス但本任所ニ於テ不在中代理者ヲ命シ之ニ其ノ代理ニ對スル在勤俸ヲ給スルトキハ事務引繼ヲ爲シタル日ヨリ代理者ニ給スル在勤俸ノ全額ヲ控除シタル殘額ヲ給ス
兼任國若クハ兼任地駐在中ハ到著ノ翌日ヨリ出發ノ前日マテ其ノ日數ニ應シ左ノ割合ニ依リ在勤俸ヲ増給ス

	甲額	乙額
特命全權公使	十八圓	十五圓
辦理公使	十五圓	十二圓
代理公使	十二圓	十圓
公使館一等書記官	十圓	八圓
總領事	十圓	八圓
公使館二等書記官	九圓	七圓
一等領事		
二等領事		

公使館三等書記官	八圓	六圓
外交官補	八圓	六圓
領事官補	六圓	四圓
公使館書記生	六圓	四圓
領事館書記生	六圓	四圓

前項ノ増給ハ歐米濠洲布哇ニ於テハ甲額ヲ其ノ他ノ諸國ニ於テハ乙額ヲ給ス
兼任國若クハ兼任地ニ於テ代理ヲ命セラレタル場合ニ於テハ第十四條ニ依リ兼任所ノ代理ニ對スル在勤俸ヲ給シ本任所ノ在勤俸並本條第二項ノ増給ヲ給セス

第八條第二項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ
第六條ノ増給ヲ受クル者轉官轉勤又ハ歸朝ヲ命セラレタル場合ニ於テ已ヲ得サル事故ノ爲メ外務大臣ノ許可ヲ得テ其ノ妻ヲ舊任地若クハ任地ニ殘置クドキハ其ノ事故ノ存スル間從前ノ通増給ヲ給スルコトヲ得但其ノ地ノ在勤俸支給ヲ止メタル日ヨリ起算シテ百八十日ヲ超ルコトヲ得ス

第十條中第四ノ下ニ「第五ヲ加ヘ「公使館二等書記官」ノ下「及一等領事」ヲ「一等領事及二等領事」ニ改ム

第十一條第二項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ
前項ノ場合ニ於テ第六條ノ増給ハ死亡ノ日ヨリ四週間以內ヲ限リ其ノ妻舊任地出發ノ前日マテ從前ノ通之ヲ給スルコトヲ得其ノ已ムヲ得サル事故ノ爲メ四週間以內ニ出發スルコト能ハス特ニ外務大臣ノ許可ヲ得タル者ニハ死亡ノ日ヨリ百八十日ヲ限リ其ノ事故ノ存スル間仍其ノ増給ヲ給スルコトヲ得

第十二條中第四ヲ左ノ通改メ其ノ次ニ第五ヲ加フ

〔參照〕

勅令第七十一號公使館領事館費用條例明治二十六年十月三十一日官報抄録

第七條 外交官及公使館書記生兼任國駐在ノ場合ニ於テハ到著ノ翌日より出發ノ前日マテ其ノ日數ニ應シ一日分左ノ割合ニ依リ在勤俸ヲ増給ス

特命全權公使

十五圓

代理公使

十三圓

公使館一等書記官

十圓

公使館二等書記官

八圓

公使館三等書記官

七圓

外交官補

五圓

公使館書記生

四圓

第八條 歸朝ヲ命セラレタル者又ハ賜暇歸朝ヲ許サレタル者ニハ任所出發ノ前日マテ在勤俸ヲ給ス

轉勤ヲ命セラレ又ハ轉官シタル者ニハ其ノ事務引繼ノ前日マテ從前ノ在勤俸ヲ給シ其ノ當日ヨリ新任所到著ノ日マテハ

第二十四條及第二十五條ノ規程ニ依リ日當ヲ給ス但轉官スルモ同一ノ地ニ在勤ヲ命セラレタル者ハ此ノ限ニアラス

第十條 外交官及領事官ニシテ第六條及第十二條第四ノ支給ヲ受クヘキ者ハ特命全權公使、代理公使、公使館一等書記官、總領事、公使館二等書記官及一等領事ニ限ル

第十一條 任所ニ於テ非難ヲ命セラレタル者又ハ退官シタル者ニハ其ノ命令到達ノ日マテ本俸及在勤俸ヲ給ス

任所ニ於テ死亡シタルトキハ其ノ當日マテ在勤俸ヲ給ス

第十二條 加俸ハ本俸及在勤俸ノ外左ノ規程ニ依リ之ヲ給ス

一 新任ニ本邦ヨリ赴任スルトキハ特命全權公使、代理公使、轉勤又ハ轉官ノ場合ニ於テハ其ノ赴任地ノ在勤俸年額十分ノ一但轉官スルモ同一ノ地ニ在勤ヲ命セラレタル者ハ此

ノ限ニアラス

三 歸朝ヲ命セラレタル者又ハ賜暇歸朝ヲ許サレタル者ハ其ノ在勤俸年額十分ノ一但歸朝ヲ命セラレタル者赴任スルトキ亦同シ

四 本條第一第二第三ノ場合ニ於テ其ノ妻ヲ同伴スルトキハ更ニ在勤俸年額十分ノ一但其ノ妻ヲ呼寄スルトキ及歸朝セシムルトキハ各一回ヲ限リ本項ノ額ヲ給ス

第十三條 在勤又ハ歸朝ヲ命セラレタル者ニシテ出發前在勤ヲ免セラレ又ハ歸朝ヲ命令ヲ取消サレタルトキハ其ノ加俸ノ半額以內ヲ給スルコトヲ得賜暇歸朝ヲ許サレタル者ニシテ出發前其ノ許可ヲ取消サレタルトキ亦同シ

前項ノ場合ニ於テ死亡シタルトキハ其ノ全額以內ヲ給スルコトヲ得

第二十二條 外交官、領事官、公使館書記生及領事館書記生ノ妻ニ對シ船車料ヲ給スルハ左ノ場合ニ限ル

一 赴任、公用歸朝及賜暇歸朝ノ際同伴スルトキ

二 同伴セザルモ本邦ヨリ任所へ往還スルトキ但各一回ヲ限トス

三 特命全權公使、代理公使、旅行スル場合ニ於テ同伴スルトキ

第二十六條 兼任國駐在中ハ第七條ニ依リ在勤俸ヲ増給シ日當ヲ給セス

第二十八條 第一項

本邦任所間往還中死亡シタル者ニハ其ノ旅費ノ全額ヲ給ス其ノ妻又ハ從者死亡ノトキ亦同シ

別表第一號

外交官及公使館書記生在勤俸

官 任 所	英	露	米	佛	獨	澳	伊	關	清	朝
特命全權公使	五,〇〇〇	四,七〇〇	四,三〇〇	四,〇〇〇	四,〇〇〇	四,三〇〇	四,〇〇〇	四,〇〇〇	四,〇〇〇	四,〇〇〇
代理公使								三,五〇〇		三,五〇〇
臨時代理公使	三,〇〇〇	二,六〇〇	二,三〇〇	二,一五〇	二,一五〇	二,三〇〇	二,一五〇	二,一五〇	二,一五〇	二,一五〇
公使館一等書記官	二,〇〇〇	一,八〇〇	一,六〇〇	一,五〇〇	一,五〇〇	一,六〇〇	一,五〇〇	一,五〇〇	一,五〇〇	一,五〇〇
公使館二等書記官	一,四〇〇	一,二〇〇	一,一〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
公使館三等書記官	一,二〇〇	一,〇〇〇	九五〇	九〇〇	八〇〇	八〇〇	八〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇
外交官補	一,〇〇〇	九〇〇	八五〇	八〇〇	六〇〇	六〇〇	六〇〇	六〇〇	六〇〇	六〇〇
公使館書記生	一,〇〇〇	九〇〇	八五〇	八〇〇	六〇〇	六〇〇	六〇〇	六〇〇	六〇〇	六〇〇

朕海軍戰時給與規則中追加ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年三月二十七日

海軍大臣伯爵西郷從道

勅令第二十八號(官報四月一日)

海軍戰時給與規則第十三條ニ左ノ二項ヲ追加ス

下士卒ニシテ戰地若クハ陸戰合圍地境ニ在ル者又ハ派遣セラレ、者ニハ必要ニ應シ海軍被服條
例第二條及第一表ノ被服物品ノ箇數ヲ適宜増加シ交付スルコトヲ得

准士官以上及候補生ニシテ其ノ乘組艦船ノ被壞沈没其ノ他公務上非常ノ災害ノ爲メ被服物品ヲ
亡失シタル者ニハ必要ニ應シ適宜被服物品ヲ給與スルコトヲ得其ノ毀損シテ使用ニ堪ヘサルニ
至リタルトキ亦同シ

朕海軍被服條例中追加ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年三月二十七日

海軍大臣伯爵西郷從道

勅令第二十九號(官報四月一日)

海軍被服條例第八條中囚衣ノ次ニ左ノ通り追加ス

襦 袴 一 枚

明治二十八年四月 勅令 第二十八號 第二十九號

〔參照〕

勅令第六十五號海軍被服條例(明治二十三年三月二十八日官報)抄録
第八條 監獄ニ在ル未決者及既決囚ニハ平入軍屬及常人ノ別ナク左ノ被服物品ヲ貸與ス
(品名數量略ス)

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ徵兵事務條例中改正追加ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年三月二十九日

陸軍大臣伯露山縣有朋
海軍大臣伯露西鄉從道
內務大臣子爵野村 靖

勅令第三十號(官報四月一日)

徵兵事務條例中左ノ通改正追加ス

第四條第一項中「徵集スルヲ例トシ不足スルトキハ同管内他ノ大隊區ヨリ補充ス」ノ二十八字ヲ削
リ同條第四項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

本條第一項第二項ニ依リ要員ヲ充タシ能ハサルトキハ他ノ大隊區若クハ他ノ師管ヨリ其ノ不足
ヲ補充スルコトヲ得

第十一條中「第二十條ヲ第二十二條ニ改ム」

第十九條第二十一條及第二十二條中「新兵」ヲ「現役兵及補充兵」ニ改ム

第三十四條第二項中「現役ニ徵ス可キヲタル」ニ改ム

第三十六條中「新兵徵募」ヲ「現役兵徵募及補充兵編入」ニ「新兵名簿豫備徵員」ヲ「現役兵名簿補充兵」ニ
改ム

第三十八條第一項中「新兵」ヲ「現役兵」ニ「豫備徵員」ヲ「補充兵」ニ改メ「大隊區司令官」ノ下ニ「又ハ警備
隊區司令官」ノ九字ヲ加フ同條第二項中「新兵」ヲ「現役兵」ニ改ム

第四十一條中「新兵徵募豫備徵員」ヲ「現役兵徵募補充兵」ニ改ム

第四十三條第一項中「第二十條」ヲ「第二十二條」ニ改ム

第七章ノ下「新兵」ヲ「現役兵及補充兵」ニ改ム

第四十七條第一項中「新兵」ヲ「現役兵」ニ改ム

第四十八條 現役兵入營ノトキハ先ツ大隊區司令官若クハ便宜ノ地ニ召集シ入營兵引率員之ヲ入
營地ニ引率シ大隊區司令官所在ノ入營地ニ當該隊長ニ交付ス但入營兵五人未滿ナルトキハ直ニ
入營地ニ單行セシム

近衛現役兵及海軍現役兵ハ其ノ集合地ニ引率シ入營兵受領員ニ交付スルモノトス但入營兵引率
員出發後到着シタル者ハ直ニ入營地ニ單行セシム

第四十九條第一項中「新兵」ヲ「現役兵」ニ改ム

第五十條第一項中「新兵」ヲ「現役兵」ニ改メ「寄留地」以下二十字ヲ削リ同條第二項中又ハ「寄留地」ニ於
テ徵集ニ應ス可キ者ニシテ同條區域外ノ本籍ニ復歸シ「三十一」字ヲ削ル

第五十一條 現役兵入營前死亡シ若クハ疾病犯罪其ノ他ノ事故ニ由リ十二月三十一日迄ニ入營シ
難シト認メタル者又ハ入營ノ後翌年一月三十一日前ニ死亡シタル者若クハ常備後備ノ服役及永
久服役ニ堪ヘ難キ者アルトキハ其ノ徵募區ヨリ同兵種ノ第一補充兵若クハ海軍補充兵ヲ抽籤番
號ノ順序ニ從ヒ召集シ若シ其ノ徵募區ヨリ召集スルコト能ハサルトキハ大隊區内他ノ徵募區ヨ
リ補フ其ノ配賦ハ各徵募區補充兵ノ總數ヲ率トシ比例ヲ以テ之ヲ定ム

第五十二條中「新兵」ヲ「現役兵」ニ改ム

第五十三條第一項中「新兵」ヲ「現役兵」ニ「第二十條」ヲ「第二十二條」ニ改メ同條第二項中「新兵」ヲ其ノ

明治二十八年四月 勅令 第三十號

年徴集ニ應ス可キ現役兵ニ改ム
 第五十四條第一項中「新兵入營前」ヲ「現役兵入營前及補充兵補充兵證書附與後其ノ年十一月三日以前ノ者モ含有ス以下皆同シ」ニ改ム
 同條第二項ヲ削リ同條第三項中「轉籍若クハ復歸」ヲ「其ノ轉籍ニ改ム」ニ改ム
 第五十五條第一項中「新兵入營前」ヲ「現役兵入營前及補充兵ニ徴集」ヲ「召集」ニ改メ同條第三項中「徴集」ヲ「召集」ニ改ム
 第五十五條ノ次ニ左ノ一條ヲ加フ
 第五十六條 第一補充兵及海軍補充兵ハ他ノ徴募區ニ轉籍スルモ現役兵補缺ノ爲メニハ舊徴募區ノ召集ニ應セシム
 第八章總テ削除以下逐章繰上ク
 第六十條ヲ第五十七條トシ以下第六十二條迄順次繰上ク
 第六十條第一項中「第十條」ヲ「第十二條」ニ改ム
 第六十二條第一項中「第二十條」ヲ「第二十二條」ニ改ム
 第六十二條ノ次ニ左ノ二條ヲ加フ
 第六十條 徴兵令第二十三條第一項ノ事故止ミタル者ノ屆書及同條第二項ノ歸朝シタル者ノ屆書ハ町村長ヨリ其ノ年ノ壯丁名簿進達前ニ在テハ其ノ名簿ト共ニ進達後ニ在テハ三日以内ニ大隊區徴兵官又ハ警備隊區徴兵官ニ差出ス可シ但市長ニ在テハ本文ノ屆書ヲ大隊區徴兵署開設ノトキ同署ニ提出ス可シ
 第六十一條 他ノ徴募區ニ寄留シ其ノ地ニ於テ身體検査ヲ受ケンコトヲ冀望スル者ハ三月一日迄ニ島司又ハ郡市長ニ願出可シ
 島司又ハ郡市長ニ差出ス願書ニハ本籍地町村長ノ與書證明ヲ受ク可キモノトス
 島司郡市長其ノ願ヲ許可シタルトキハ之ヲ本人寄留地ノ島司郡市長ニ通知ス可シ

本條ノ願出已ムヲ得サル事故ノ爲メ三月一日ヲ過クルモノハ島司郡市長ヨリ本人寄留地ノ島司郡市長ニ協議シ徴募上故障ナキモノニ限り許可ス可シ
 第六十三條ヲ削除シ第六十四條ヲ第六十二條トシ以下順次繰上ク
 第六十六條中「新兵」ヲ「現役兵」ニ改ム
 第六十七條第一項中「現役年」ヲ「通シテ」トシ「陸軍ニ在テハ七箇年四箇月間海軍ニ在テハ」ノ九字ヲ加ヘ同條第二項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ
 陸軍現役兵ニシテ一時服役ニ堪ヘ難キ者軍隊第二期ノ教育ヲ卒ラサル前ニ在テハ第一補充兵ニ編入シ現役年期ヲ通シテ七箇年四箇月間服役セシム
 第六十八條第一項中「第二十條」ヲ「第二十二條」ニ編入ス但「編入」ニ改メ「現役年」ヲ「通シテ」トシ「陸軍ニ在テハ七箇年四箇月間海軍ニ在テハ」ノ九字ヲ加ヘ「服役セシム」トシ「但陸軍現役兵ニシテ軍隊第二期ノ教育ヲ卒ラサル前ニ在テハ第一補充兵ニ編入シ現役年期ヲ通シテ七箇年四箇月間服役セシム」ノ五十六字ヲ加フ
 第六十九條中「函館江差福山」ノ六字ヲ削ル
 第七十條中「同令第二十六條後段」ノ例ニ準シ「ノ」十四字ヲ削リ「徴集ニ應ス」ヲ「身體検査ヲ受ク」ニ改ム
 附則
 現今ノ豫備徴員ハ從前ノ規程ニ依ル

〔參照〕

勅令第十三號徴兵事務條例(明治二十二年二月二十七日官報抄録)
 第四條 常備歩兵各聯隊ノ兵員ハ其旅管内最寄ニ大隊區ヨリ徴集スルヲ例トシ不足スルトキハ同管内他ノ大隊區ヨリ補充ス其他ノ兵員ハ其師管ヨリ徴集ス
 近衛歩兵隊ノ兵員ハ各師管ヨリ其他ノ兵員ハ第一師管ヨリ徴集ス

警備隊ノ兵員ハ其警備隊區ヨリ徵集ス
 海軍兵員ハ各師管内海軍及島嶼ヲ包括スル大隊區ヨリ徵集ス
 第十一條 旅管徵兵委員及大隊區徵兵委員又ハ警備隊區徵兵委員ハ徵兵令第二十條ニ當ル徵集延期及徵集免除ニ關スル事件ヲ審議シ意見ヲ徵兵官ニ具申スルヲ任トス但徵兵官ノ裁決ニ付可テ議スルノ權ナキモノトス
 第十九條 毎年徵集ス可キ新兵ノ員數ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム
 第二十一條 師團長ハ第十九條ノ勅令ニ基キ新兵ノ要員ヲ各旅管ニ旅團長ハ之ヲ各大隊區ニ大隊區司令官ハ之ヲ各徵集區ニ配賦ス
 第二十二條 新兵ノ配賦ハ壯丁ノ總數ヲ率トシ比例ヲ以テ之ヲ定ム
 第三十四條 第一項
 身體検査ニ合格シ現役ニ徵ス可キ壯丁ハ徵集順序ヲ定ムル爲メ徵集區毎ニ體格ノ等級及兵種ヲ分チ旅管徵兵官ニ於テ抽籤ヲ行フ
 第三十六條 抽籤終ルトキハ旅管徵兵官ハ營區番號ノ順序ニ從ヒ新兵徵集ノ處分ヲ爲シ其他ハ大隊區徵兵官又ハ警備隊區徵兵官ヨリ差出シタル番號ニ就キ終決ノ處分ヲ爲シ新兵名簿豫備徵兵名簿徵集免除名簿及兵役免除名簿ヲ作ル可シ
 第三十八條 徵集事務終ルトキハ旅團長ハ旅管徵兵事務報告書及徵兵表ヲ作り師團長ニ差出シ又新兵名簿ヲ各隊ニ交付シ抽籤名簿及豫備徵兵名簿ヲ大隊區司令官ニ交付ス可シ
 近衛新兵名簿ハ近衛師團長ニ海軍新兵名簿ハ鎮守府司令官長ニ送致ス可シ
 徵集免除名簿及兵役免除名簿ハ府縣廳ニ備置ス可シ
 第四十一條 假決ハ徵集延期及徵集猶豫ノ事ヲ裁決シ終決ハ新兵徵集豫備徵兵員編入徵集免除及兵役免除ノ事ヲ裁決ス
 第四十三條 第一項
 壯丁若クハ其家族ニ於テ徵兵令第二十條ニ關スル大隊區徵兵官又ハ警備隊區徵兵官ノ裁決ニ不服アルトキハ旅管徵兵官ニ差付徵兵官ノ裁決ニ不服アルトキハ師管徵兵官ニ師管徵兵官ノ裁決ニ不服アルトキハ總理徵兵官ニ訴願スルコトヲ得但訴願ノ爲メニ裁決ノ執行ヲ停止セズ
 第七章 新兵
 第四十七條 第一項
 新兵入營期日ハ毎年十二月一日トス但疾病阻其他ノ事故ニ由リ十二月一日ニ入營シ難キ者ハ同月三十一日迄ニ入營セシム
 第四十八條 新兵入營ノトキハ先ツ大隊區司令官若クハ便宜ノ地ニ召集シ新兵引率員之ヲ入營地ニ引率シ大隊區司令官若クハ師管徵兵官若クハ旅管徵兵官ニ交付ス但新兵五人未満ナルトキハ直ニ入營地ニ引率セシム
 近衛新兵及海軍新兵ハ其集合地ニ引率シ新兵受領員ニ交付スルモノトス但新兵引率員出發後到着シタル者ハ直ニ入營地ニ引率セシム

ニ引率セシム
 第四十九條 第一項
 新兵入營ニ際シ父母ノ疾病危篤或ハ死亡ノ爲メ入營ノ延期ヲ願フ者アルトキハ大隊區司令官又ハ警備隊區司令官ニ於テ十四日以内ノ延期ヲ許ス可シ
 第五十條 新兵入營前ハ第四條ノ區域外ニ轉籍シ居ル者ハ本人ノ提出スルモ所屬ノ隊籍ヲ變更セズ寄留地ニ於テ徵集ス可キ者ニシテ本籍ニ復歸シタルトキ亦同シ
 徵兵令第二十七條ニ當リ翌年同ト爲リタル者ハ身體検査ヲ行ヒ更ニ隊籍ヲ定ムルモノトス但第四條ノ區域外ニ轉籍シ又ハ寄留地ニ於テ徵集ス可キ者ニシテ同條區域外ノ本籍ニ復歸シタル者ハ其ノ地ニ於テ身體検査ヲ行ヒ隊籍ヲ定ム
 第五十一條 新兵入營前死亡シ若クハ疾病阻其他ノ事故ニ由リ十二月三十一日迄ニ入營シ難キ者ト認タル者又ハ入營後直ニ施行スル身體検査ニ於テ永久兵役及常備後備ノ服役ニ堪ヘ難キ者アルトキハ其徵集區ヨリ同兵種ノ豫備徵兵員ヲ抽籤番號ノ順序ニ從ヒ徵集シ若シ其徵集區ヨリ徵集スルコト能ハサルトキハ大隊區内他ノ徵集區ヨリ補フ其配賦ハ各徵集區豫備徵兵員ノ總數ヲ率トシ比例ヲ以テ之ヲ定ム
 第五十二條 新兵入營前廢疾又ハ不具ト爲リ永久兵役ニ堪ヘ難キ者アルトキハ旅團長ニ於テ兵役ヲ免ス但徵兵令第二十七條ニ當リ翌年同ト爲リタル者其ノ年徵集事務終結前ハ此ノ限ニ在ラス
 第五十三條 新兵入營前徵兵令第二十條ニ當ルヘキ事故ノ生スルトキハ本人ノ願ニ由リ旅團長ニ於テ徵集ヲ延期ス其願書ニハ同徵集區内新兵ノ月主二名ノ保證書ヲ添ヘ島司郡市長及大隊區司令官又ハ警備隊區司令官ヲ經テ旅團長ニ差出ス可シ但町村ニ在テハ町村長ノ與書證明ヲ受テ可キモノトス
 第五十四條 島司郡市長ハ其非實ヲ審議シ狀況書ヲ作り願書ト共ニ大隊區司令官又ハ警備隊區司令官ニ送付ス可シ住地所管ノ監視區長ニ届出可シ
 寄留地ニ於テ徵集ス可キ者本籍ニ復歸シタルトキハ前項ノ例ニ依リ届出可シ
 轉籍若クハ復歸大隊區外ニ係ルトキハ居住地大隊區司令官ヨリ居住地大隊區司令官ニ通報ス可シ
 本條ノ届出ヲ爲サル者ハ五錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス
 第五十五條 新兵入營前寄留若クハ十四日以上ノ旅行ヲ爲サントスルトキハ徵集ノ命アルトキ之ヲ通報ス可キ者ヲ定メ市町村長ヲ經テ監視區長ニ届出可シ其ノ復歸シタルトキ亦届出可シ
 本條ノ届出ヲ爲サル者ハ五錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス
 通報入正營ノ事由ナクシテ徵集ノ命ヲ通報セズ若クハ其ノ通報ヲ遅緩シタルトキハ五錢以上一圓九十五錢以下ノ科料又ハ一日以上十日以下ノ拘留ニ處ス
 第八章 豫備徵兵員

第五十六條 臨時若クハ事變ニ際シ豫備徴員ヲ徵集スルニハ抽籤番號ノ順序ニ從テ其配賦ノ法ハ豫備徴員ノ總數ヲ率トシ比例ヲ以テ之ヲ定ム
豫備徴員ヲ徵集スルトキハ島嶼若クハ郡市吏員之ヲ入營地又ハ臨時指定ノ地ニ引率シテ大隊區司令官又ハ陸海軍派出官ニ交付スルモノトス

第五十七條 豫備徴員ニシテ他ノ徵募區ニ轉籍シタル者翌年一月一日以後ニ係ルトキハ新舊在地位徵募區最高ノ抽籤番號ヲ率トシ比例ヲ以テ相當番號ノ上位ニ列セシム 但徵募年ノ十二月三十一日以前ニ轉籍シタルトキハ八十四日以内ニ市町村長ヲ經テ監視區長ニ届出可シ 寄留地ニ於テ徵集ニ應ス可キ者本籍ニ復歸シタルトキハ前項ノ例ニ依リ届出可シ

第五十八條 豫備徴員ニシテ本籍ニ復歸シタルトキハ亦前項ノ例ニ依ル 但監視區外ニ係ルトキハ新舊在地位所管ノ監視區長ニ届出可シ 寄留地ニ於テ徵集ニ應ス可キ者本籍ニ復歸シタルトキハ前項ノ例ニ依リ届出可シ

第五十九條 豫備徴員留營若クハ十四日以上ノ旅行ヲ爲サントスルトキハ徵集ノ命アルトキ之ヲ通報ス可キ者ヲ定メ市町村長ヲ經テ監視區長ニ届出可シ其復歸シタルトキ亦届出可シ 本條ニ違背シタル者ハ五錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス 通報人正當ノ事由ナクシテ徵集ノ命ヲ通報セス若クハ其ノ通報ヲ遅延シタルトキハ五錢以上一圓九十五錢以下ノ科料又ハ一日以上十日以下ノ拘留ニ處ス

第六十條 第一項 徴兵令第十條ニ依リ現役ニ服セントラ志願スル者ハ其願書ニ月主或ハ後見人連署シ身元證書ヲ添ヘ市町村長ノ與書證印ヲ受ケ九月一日以前自己ノ服役セント欲スル軍隊又ハ鎮守府ニ届出テ許可ヲ受ケ可シ但軍隊又ハ鎮守府遠隔ノ地ニ居住ノ者ハ徴兵検査ノ際大隊區徴兵署又ハ警備隊區徴兵署若クハ徴兵検査所ニ中立テ身元検査ヲ受ケ合格ノ者ハ合格證書ヲ添ヘ届出ルコトヲ得

第六十一條 徴兵令第二十條ニ當ル者ハ同徵募區内其ノ年ノ徵集ニ應ス可キ壯丁ノ月主二名ノ保證書第二十一條第一項ニ當ル者ハ學科長ノ證明書同條第二項ニ當ル者ハ公使又ハ領事ノ證明書ヲ以テ三月一日迄ニ大隊區徴兵官又ハ警備隊區徴兵官ニ願出可シ但徴兵令第二十二條ニ當リ其事故續シテ三箇年ヲ過クルモ仍ホ止マサル者ハ本條ノ保證書ヲ添ヘ届出可シ

第六十二條 徴兵令第二十六條ニ依リ他ノ徵募區ニ於テ徵集ニ應セント欲スル者ハ三月一日迄ニ本籍地ノ島司又ハ郡市長ノ島司又ハ郡長ニ差出ス願書ニハ本籍地町村長ノ與書證印ヲ受ケ可キモノトス

島司郡市長其願ヲ許可シタルトキハ其壯丁名簿若クハ前年ノ假決名簿ヲ添ヘ本人寄留地ノ島司郡市長ニ通知ス可シ 本條ノ願出巴ムラ得サル事故ノ爲メ三月一日ヲ過クルモノハ島司郡市長ヨリ本人寄留地島司郡市長ニ協議シ徵募上放棄ナキモノニ限り許可ス可シ

第六十三條 徴兵令第二十七條ニ依リ及抽籤總代人ノ旅費 新兵入營ノ旅費 徴兵委員ノ手當金旅費 徴兵醫官補助員ノ給料旅費ハ官給ス

第六十四條 現役中疾病或ハ傷疾ニ依リ永久兵役ニ堪ヘ難キ者ハ師團長又ハ鎮守府司令長官ニ於テ兵役ヲ免ス其一時服役ニ堪ヘ難キ者ハ豫備徴員ニ編入シ現役年期ヲ通シテ七箇年間服役セシム

第六十五條 其疾病傷疾ニ依リ常備後備ノ服役ニ堪ヘ難キ者ハ國民兵ニ編入ス

第六十六條 第一項 現役中徴兵令第二十條ニ當ル可キ事故ノ生スルトキハ其家族ノ願ニ由リ師團長又ハ鎮守府司令長官ニ於テ現役ヲ免シ豫備役ニ編入ス但現役年期ヲ通シテ七箇年間服役セシム

第六十七條 北海道廳管下函館江差福山其他島嶼ニ於テ本條例中ノ條規ヲ實施スルコト能ハサルトキハ師團長地方長官協議ノ上適宜ノ方法ヲ設クルコトヲ得

第六十八條 徴兵令ヲ施行セザル地ニ寄留ノ者ハ同令第二十六條後段ノ例ニ準シ寄留地最寄ノ徵募區ニ於テ徵集ニ應スルコトヲ得

除日清兩國間交戦中准士官以上ノ服裝品給與ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年三月二十九日 陸軍大臣伯耆山縣有朋

勅令第三十一號(官報四月一日)

日清兩國間交戦中陸軍准士官以上(特務曹長)ノ服裝品ハ戰地ニ在テ實際自辨シ難キ場合ニ限り便宜現品ヲ給與スルコトヲ得

朕陸軍給與令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年三月三十日

陸軍大臣伯耆山縣有朋

勅令第三十二號(官報四月一日)

陸軍給與令中左ノ通改正ス

第四十條 營内居住ノ下士以下ニハ被服補修ノ爲メ毎月被服補修料ノ定額ヲ軍隊ニ在テハ下士兵

卒ノ定員一箇年間歸休セシニ應シ軍樂隊士官學校幼年學校戸山學校乘馬學校砲兵射の學校獸

醫學校要塞砲兵幹部練習所教導團砲兵工科學舍被服工長學舍軍樂學舍ニ在テハ下士兵卒及生徒

ノ現員ニ應シ之ヲ交付シ其經理ヲ該隊若クハ該所管ニ委任ス其金額ハ第二十表ニ依ル

第十二表中第二種衣袴ノ下

步兵砲工輜重兵卒縫靴工

兵卒若手縫靴工

二組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

一組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

二組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

一組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

二組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

一組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

二組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

一組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

二組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

一組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

二組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

一組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

二組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

一組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

二組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

一組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

二組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

一組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

二組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

一組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

二組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

一組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

二組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

一組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

二組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

一組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

二組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

一組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

二組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

一組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

二組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

一組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

二組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

一組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

二組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

一組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

二組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

一組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

二組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

一組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

二組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

一組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

二組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

一組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

二組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

一組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

二組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

一組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

二組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

一組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

二組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

一組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

二組 三年 初度一組ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

第一種背蓋	警備隊歩砲兵曹長軍曹同兵卒	一箇六年	初度一箇ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス
第二種背蓋	警備隊砲兵監護隊木銃工長下長	一箇十二年	初度一箇ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス
第三種背蓋	警備隊砲兵監護隊木銃工長下長	一箇十二年	初度一箇ヲ給シ爾後供用期限ニ照シ交換ス

同區畫被服手入具ノ品目中「厨具袋」ヲ「麻袋」ニ改メ其給與區別中「爾後永續料」ヲ以テ交換ノ十一字ヲ總テ削リ及「飯骨柳網共」ヲ「飯盒」ニ其供用期限「一年」ヲ「二年」ニ改メ備考ニ左ノ一項ヲ加フ

一 特務曹長ニハ飯盒ヲ給セス之ニ代フルニ飯骨柳網袋各一箇ヲ給シ其供用期限ヲ二年トス

第十四表中裝具ノ區畫被服手入具ノ品目中「厨具袋」ヲ「麻袋」ニ改メ其給與區別中「爾後永續料」ヲ以テ交換ノ十一字ヲ削リ及「飯骨柳網共」ヲ「飯骨柳網袋」ニ改ム

第十七表中近衛工兵大隊ノ横畫單病衣以下ノ員數ニ「一」ヲ總テ削ル

第二十表ヲ別表ノ如ク改ム

第二十一表備考第二項ヲ左ノ如ク改ム

一 被服手入具新調費及被服ノ補修ニ要スル費用ハ定額中ニ包含ス

第二十二表ノ末尾ニ左ノ備考ヲ加フ

一 第二師管下ノ隊馬ニ限リ十二月ヨリ三月マテ四箇月間防寒ノ爲メ菓二百匁ヲ増給ス

第四十一表中汽車路一哩毎ニ「四錢」ヲ「拾壹錢」ニ改ム

附 則

本令ハ明治二十八年四月一日ヨリ施行ス

(別表)

第二十表

名	歩砲(要塞)工兵特務曹長下副官同曹長軍曹同兵卒	稱	被服補修料月額
---	-------------------------	---	---------

歩砲(要塞)工兵縫靴工長下長同縫靴工	
警備隊歩砲兵特務曹長同曹長軍曹同兵卒	
警備隊歩砲兵縫靴工長下長同縫靴工	
要塞砲兵隊附警備隊附火工曹長軍曹	拾六錢四厘
要塞砲兵隊附警備隊附火工曹長軍曹	
砲兵監護鞍銃木鐵工長下長	
教導團歩工兵科生徒	
要塞砲兵幹部練習所生徒	
騎砲(野砲)兵特務曹長下副官同曹長軍曹同兵卒	
騎砲(野砲)兵歸隊縫靴工長下長同縫靴工	貳拾貳錢六厘
野戰砲兵隊附諸學校教導團附火工曹長軍曹	
教導團騎砲兵科生徒	
騎砲兵特務曹長下副官同曹長軍曹同兵卒	
騎重兵隊鐵縫靴工長下長同縫靴工	貳拾壹錢六厘
教導團騎重兵科生徒	
習熟手輜重輸卒樂生	
軍樂學舍生徒	拾五錢貳厘
幼年學校官費生半官費生	參拾六錢

砲兵工科學舍生徒

一 豫備役後備役ニアル兵卒ニシテ被服工長學舍學生トナリタル者ノ定額ハ其兵科兵卒ニ準ス

〔參照〕

勅令第六十七號陸軍給與令(明治二十三年三月三十一日官報)抄録
 第四十條 軍隊ニ於テハ被服修理料及ヒ被服手入具永續料トシテ其定額ヲ管内居住ノ下士兵卒定員ニ準テ算出セシメシ之ヲ交付シ該隊ニ其經理ヲ委任ス其金額ハ第二十表ニ依ル
 軍樂隊軍樂學舍士官學校幼年學校月山學校乘馬學校砲兵射的學校附屬學校 要塞砲兵幹部練習所教導團砲兵工科學舍被服工長學舍管内居住ノ下士以下ニ於テモ前項ニ準ス但定額ハ現員ニ應ジ之ヲ交付ス
 (各表略ス)

朕臨時陸軍檢疫部官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年三月三十日

内閣總理大臣 伯爵 伊藤博文
 陸軍大臣 伯爵 山縣有朋

勅令第三十三號(官報四月一日)

臨時陸軍檢疫部官制

第一條 臨時陸軍檢疫部ハ陸軍大臣ノ監督ニ屬シ傳染病ヲ豫防スル爲メ地方官ト相符テ戰地ヨリ歸航スル船舶ノ檢疫ヲ施行ス
 第二條 臨時陸軍檢疫部ニ左ノ職員ヲ置ク

- 一 部長
- 二 事務官

三 書記

部長ハ陸軍將官、事務官ハ陸軍上長官、士官、書記ハ下士ヲ以テ之ニ充ツ但事務官及書記ハ必要ノ場合ニ於テ他ヨリ之ヲ任用スルコトヲ得
 他ヨリ任用スル事務官ハ委任、書記ハ判任トス
 第三條 前條職員ノ外技術家ヲ囑託スルコトヲ得
 第四條 部長ハ陸軍大臣ノ指揮ヲ受ケ部内ノ事務ヲ管理ス
 第五條 事務官ハ部長ノ指揮ヲ受ケ部務ヲ掌ル
 第六條 書記ハ上官ノ指揮ヲ受ケ庶務ニ従事ス
 第七條 檢疫施行ノ方法及檢疫所ノ位置ハ陸軍大臣之ヲ定ム

朕陸軍一年志願兵條例中改正追加ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年三月三十日

陸軍大臣伯耆山縣有朋

勅令第三十四號(官報 四月一日)

陸軍一年志願兵條例中左ノ通改正追加ス

第一條第八條第九條中第十一條ヲ第十三條ニ改ム

第六條ニ左ノ一項ヲ加フ

官費服役出願者前項ノ定員ヲ超過スルトキハ年少ノ者ヨリ順次次年ニ廻シ入隊セシム

第七條 一年志願兵ハ現役満期ノ後六箇年四箇月間豫備役ニ五箇年間後備役ニ服セシム

豫備役後備役中犯罪ノ爲メ又ハ正當ノ事由ナクシテ召集ヲ缺キタル者其召集ヲ缺キタル年ハ服

役年期ニ算セス

第二十條中「服セシム」ノ下ニ「ルコトアルヘシ」ノ七字ヲ加フ

第三十五條中第六十七條及第六十八條ヲ「第六十五條及第六十六條」ニ改ム

第三十六條 明治二十七年以前一年志願兵トシテ服役シタル者ノ豫備役後備役年期ハ第七條ニ依

〔参照〕

勅令第七十三號陸軍一年志願兵條例(明治二十六年七月二十日官報)抄録

第一條 徵兵令第十一條ニ據リ一年志願兵トナル者ハ居住地師管内ニ於テ服役スヘキ兵科及衛戍地ヲ選フコトヲ得但第四

條ニ當ル者ハ此限ニ在ラス

第六條 官費服役ヲ許スヘキ一年志願兵ノ定員ハ毎年陸軍大臣之ヲ定ム

第七條 官費服役出願者前條ノ定員ヲ超過スルトキハ年少ノ者ヨリ順次次年ニ廻シ入隊セシム

第八條 一年志願兵志願者ハ其願書ヲ一月三十一日迄ニ本籍ノ島司郡市長（東京府、神奈川縣、千葉縣、埼玉縣、茨城縣、栃木縣、群馬縣、山梨縣、長野縣、新潟縣、富山縣、石川縣、福井縣、岐阜縣、愛知縣、三重縣、滋賀縣、京都府、大阪府、兵庫県、奈良縣、和歌山縣、徳島縣、香川縣、岡山縣、広島縣、山口縣、福岡縣、佐賀縣、長門縣、熊本縣、大分縣、宮崎縣、鹿児島縣、沖縄縣）ニ提出スヘシ但徵

兵令第十一條ノ學校卒業者ハ卒業證書及月主ニアラサルモノハ月主二十歳未満者ハ月主若クハ後見人ノ承認書ヲ添附

スルヲ要ス

島司郡市長ハ志願者ノ身元資産並ニ犯罪有無ノ證明書ヲ製シ其願書ニ添附スヘシ

第九條 前條ノ志願者ニシテ一月三十一日迄ニ徵兵令第十一條ノ學校ヲ卒業セサル者ハ其年十月三十一日迄ニ卒業スヘキ

者ニ限り學校長ノ證明書ヲ以テ卒業證書ニ換フルヲ得但卒業ノ上ハ直ニ卒業證書ヲ添ヘ旅團長ニ届出ヘシ

第三十條 職時若クハ事變ニ際シテハ一年志願兵ト雖モ通常ノ現役勤務ニ服セシム

第三十五條 徵兵事務條例第五十三條第六十七條及第六十八條ハ一年志願兵ニモ亦適用ス但其豫備役ニ編入スヘキ者ハ國

民兵役ニ編入ス

第三十六條 本條例第一條乃至第四條ハ本年十二月迄ニ入隊ノ一年志願兵ニハ適用セス

御名 御璽

明治二十八年三月三十日

勅令第三十八號(官報四月四日)

占領地總督部條例

第一條 占領地總督部ハ占領地ヲ管轄セシムル爲メ其本部ヲ金州ニ置ク

第二條 占領地總督ハ大將若クハ中將ヲ以テ之ニ補シ直ニ大本營ニ隸シ占領地内ニ屯在スル陸軍各部各隊ヲ統率シ軍事ニ關スル諸件及占領地人民ニ係ル一般民政ヲ總理ス

第三條 占領地總督ハ占領地ノ警備及防禦ノコトヲ掌リ其管轄内ノ靜謐ヲ維持シ衛戍條例ニ準據シ衛戍勤務ヲ統轄ス

占領地ノ管轄區域ハ大本營ノ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第四條 占領地總督ハ其管轄區域内ニ在ル陸軍各部各隊ノ給養衛生其他風紀軍紀ヲ維持スルコトニ就テハ職務權限軍司令官ニ同シ

第五條 占領地總督ハ軍政ト民政ニ拘ハラズ一ニ大本營ノ區處ヲ受ク其人事ニ就テハ陸軍武官進級令及陸軍豫備後備武官進級令ニ據ルヘシト雖トモ陸軍武官進級令第十六條及陸軍豫備後備武官進級令第九條ニ準シ特ニ進級補除ノ權ヲ假スコトアルヘシ

第六條 占領地總督ハ民政上ノ必要ニ應シ民政支部ヲ置キ其民政區域ヲ定ムルコトヲ得

第七條 占領地總督部ノ編制ハ別表ノ通

第八條 參謀長ハ部務ヲ整理シ參謀及副官ハ參謀長ノ監視ヲ受ケ各自擔任ノ事務ニ服シ其責任ニ任ス

第九條 砲兵部長以下各部長ハ總督ニ具申スヘキ事ニ就テハ先ツ參謀長ノ承認ヲ得ヘキモノトス

(別表)

占領地總督部											
支						本					
部	支	部	支	部	支	部	支	部	支	部	支
民政部		參謀部		砲兵部		砲兵部		砲兵部		砲兵部	
長		參謀長		長		長		長		長	
一 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
二 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
三 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
四 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
五 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
六 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
七 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
八 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
九 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
十 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
十一 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
十二 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
十三 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
十四 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
十五 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
十六 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
十七 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
十八 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
十九 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
二十 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
二十一 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
二十二 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
二十三 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
二十四 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
二十五 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
二十六 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
二十七 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
二十八 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
二十九 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
三十 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
三十一 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
三十二 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
三十三 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
三十四 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
三十五 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
三十六 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
三十七 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
三十八 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
三十九 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
四十 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
四十一 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
四十二 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
四十三 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
四十四 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
四十五 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
四十六 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
四十七 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
四十八 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
四十九 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	
五十 事務官		一 參謀		一 副官		一 副官		一 副官		一 副官	

制	編	
	部	員
計	一	二五六一二〇九
考	一	五三〇一三三七三
備	一	五五三四一八四二九二五〇

(一)各部ノ下士中砲工兵部各二ノ内一ハ監護監督部三ノ内一ハ技手、法官部ノ三ハ餘事トス其
他ハ職員ヲ以テ之ニ充ツルヲ得(二)從卒馬卒ハ雇役者ヲ以テ之ニ充ツルヲ得(三)本表ノ外必要ニ
應ジ若干ノ臨時官ヲ付スルコトヲ得(四)本表ノ外民政支部ニハ佐尉官若クハ高等文官一名ヲ以
テ長トシ之ニ將校同相當官若クハ高等文官憲兵下士及各兵科下士又ハ判任文官憲兵上等兵若
干ヲ付ス但支部ノ數ハ管轄區域ノ廣狹ニ其職員ノ數ハ管區ノ大小ニ依リ適宜増減スルモノト
ス(五)民政部ニ屬スル憲兵ハ必要ニ應ジ増加スルコトヲ得(六)參謀長及民政部長大佐ナルトキハ
從卒一ヲ減ス七)郵便部長ハ高等文官七等以下トス

〔參照〕

勅令第六十一號陸軍武官進級令(明治二十二年五月七日官報)抄録
第十六條 與軍ノ日ニ方リテ戰地ニ處キテハ特ニ進級補給ノ權ヲ假スコトアルヘシ
勅令第六十二號陸軍軍醫官進級令(明治二十七年九月八日官報)抄録
第九條 (前項第十六條ト同文)

朕要塞司令部條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年三月三十日

陸軍大臣 伯爵 齋藤 有朋

勅令第三十九號(官報 四月五日)

要塞司令部條例

第一條 永久ノ防禦工事ヲ以テ守備スル地ヲ要塞ト稱シ各要塞ニハ其地名ヲ冠シ其要塞ト稱ス

第二條 要塞ハ大小ニ從ヒ三等ニ區分シ各要塞ニ一ノ司令部ヲ置クヲ例トス其編制ハ別ニ定ムル
所ニ據ル但其設置及要塞ノ等級ハ陸軍大臣之ヲ定ム

第三條 要塞勤務ハ分ツテ衛戍及防禦勤務トス衛戍勤務ハ衛戍條例同服務規則ニ據ル

第四條 要塞司令部ハ特ニ規定アルモノ、外通常要塞所在地所管ノ師團長ニ隸ス

第五條 要塞司令部ハ平時專ラ要塞防禦ノ計畫並ニ防禦用諸材料建築物及兵器其他軍需諸品整備
ノ責ニ任ス

第六條 要塞司令部ハ防禦方案ヲ策定シ毎年四月所管長ヲ經テ參謀總長及海軍軍令部長ニ進達ス

第七條 砲兵方面支署長工兵方面支署長ハ要塞司令部ノ指揮ニ從ヒ要塞防禦ノ調査ニ從事ス

第八條 各要塞ニ於テ防禦方案ヲ策定スル爲メ防禦諮詢會議ヲ設置ス

議員ノ組織左ノ如シ

議長 要塞司令部

議員 要塞參謀(參謀ナキトキ) 要塞砲兵隊長(隊長要塞司令部ヲ兼ヌ) 砲兵方面支署長 工兵方面
支署長

其他要スレハ所管長官ニ申請シ臨時議員トシテ陸海軍將校又ハ技師若干ヲ加フルコトヲ得

議員事故アリテ會議ニ列スル能ハサルトキハ議長ノ認可ヲ經テ其代理者ヲ出席セシムルコトヲ得

此會議ハ秘密會議トス

第九條 平戰兩時ニ於ケル兵器其他軍需諸品ノ貯藏保存及補給法ニ關シ軍需品調査委員ヲ設ク其
委員ノ組織左ノ如シ

首坐 要塞司令部

委員 要塞參謀砲兵方面支署長 工兵方面支署長 師團監督部長 其地所在ノ高級古參軍吏師團軍
醫部長 其地所在ノ高級古參衛生部上長官 若クハ士官但戰時ニ在テハ師團監督部長同軍

醫部長ヲ關クコトアルハシ

第八條終リノ二項ハ此委員ニモ亦適用ス

本條ノ事項ニ付必要アルトキハ郡市長又ハ町村長ヲシテ所要ノ調査ヲナサシムルコトヲ得

第十條 要塞司令官ハ平時豫メ地方官ト協議シ臨戰若クハ合圍ノ日ニ方リ軍隊ノ宿營給與及住民

公共ノ保安ニ關シ必要ナル諸件ヲ實行スルノ方法ヲ計畫スヘシ

第十一條 要塞司令部ニハ一ノ祕密文庫ヲ備ヘ要塞司令官自ラ之ヲ保管ス之ニ貯藏スヘキ圖書左

ノ如シ

- 一 要塞防禦計畫書
 - 二 要塞動員計畫書
 - 三 兵器彈藥一覽表
 - 四 公私軍需品ノ調査錄
 - 五 防禦會議議事錄
 - 六 軍需品調査委員議事錄
 - 七 要塞防禦ノ一般圖(梯尺一万分乃至二万分)
 - 八 堡壘ノ平面及斷面圖(梯尺百分乃至千分)
 - 九 戰時増設若クハ改修スヘキ工事ノ平面及斷面圖(梯尺百分乃至千分)
 - 十 海岸要塞ニ在テハ其附近ノ海圖
- 此文庫ノ圖書ハ要塞司令官ノ許可ヲ得ルニ非レハ何人ト雖モ閱覽又ハ謄寫ヲ許サス
- 第十二條 本條例ニ規定スル要塞司令官ノ職務ハ特ニ規定アルモノ、外要塞アル島嶼ノ警備隊司令官ニモ亦適用ス

附則 第十三條 要塞ノ勤務中海軍ト直接關係ヲ有スル事項ハ別ニ定ムル所ニ據ル

朕陸軍定員令中追加ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年三月三十日

陸軍大臣伯耆山縣有朋

勅令第四十號(官報四月五日)

陸軍定員令第六條其二中旅團司令部(附表第十一號丙)ノ前ニ要塞司令部(附表第十一號乙ノ二)及各師管內樞要ノ地ニ置クノ二項ヲ加ヘ竝ニ附表第十一號乙ノ二要塞司令部編制表ヲ別表ノ如ク追加ス

(別表)

第十一號乙ノ二

要塞司令部編制表

職名	第一等		第二等		第三等	
	官	人員	官	人員	官	人員
司令官	中(少)將	一	三少將(大佐)	一	三	
參謀	中(少)佐	一	二少佐(大尉)	一	二	
副官	大(中)尉	二	二大(中)尉	一	一中尉	一
乘馬						

備考	(一) 三等要塞司令官ハ其地在ノ衛戍司令官ヲシテ職務セシム	計	八	七	六	三	一
	(二) 二等要塞書記ノ内一名ハ軍吏部下トス				六		二

朕扶助年限中ニ在ル屯田兵下士兵卒ニシテ勤員ヲ行フタル部隊ニ屬スル者ノ給料給與ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年四月五日

陸軍大臣 伯耆山縣有朋

勅令第四十一號(官報四月六日)
扶助年限中ニ在ル屯田兵下士兵卒勤員ヲ行フタル部隊ニ屬スルトキハ扶助米鹽菜料ヲ受ケサル下士兵卒ト等シテ給料ヲ給與ス此ノ場合ニ在テハ屯田兵移任給與規則ニ依リ給與スル扶助米鹽菜料ヲ控除ス

御名 御璽

明治二十八年四月九日

内閣總理大臣 伯耆伊藤博文
陸軍大臣 伯耆山縣有朋

朕臨時陸軍檢疫部及占領地總督部ノ高等文官及判任文官俸給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

勅令第四十二號(官報四月十一日)

明治二十八年勅令第三十三號檢疫部及同年勅令第三十八號占領地總督部ノ高等文官及判任文官ノ俸給ハ左表ニ依ル

第一表

官等	俸	
	年	月
三 等	一級 二千五百圓	二級 二千二百圓
四 等	一級 二千二百圓	二級 一千八百圓
五 等	一級 一千八百圓	二級 一千四百圓
六 等	一級 一千四百圓	二級 一千二百圓
七 等	一級 一千二百圓	二級 一千圓
八 等	一級 一千圓	二級 八百圓
九 等	一級 八百圓	二級 六百圓

第二表

等級	判		任	
	一 等	二 等	三 等	四 等
一 等	六千圓	五千圓	四千圓	三千圓
二 等	五千圓	四千圓	三千圓	二千圓
三 等	四千圓	三千圓	二千圓	一千五百圓
四 等	三千圓	二千圓	一千五百圓	一千圓
五 等	二千圓	一千五百圓	一千圓	七百圓
六 等	一千五百圓	一千圓	七百圓	五百圓
七 等	一千圓	七百圓	五百圓	三百圓
八 等	七百圓	五百圓	三百圓	二百圓
九 等	五百圓	三百圓	二百圓	一百圓

朕内務省ニ臨時檢疫局ヲ置クノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年四月十五日

内閣總理大臣 伯耆伊藤博文
内務大臣 子爵野村 靖

勅令第四十三號(官報四月十六日)

第一條 内務省ニ臨時檢疫局ヲ置キ傳染病流行ニ際シ檢疫豫防ニ關スル事務ヲ掌理セシム

明治二十八年四月 勅令 第四十三號

- 第一條 臨時檢疫局ニ左ノ職員ヲ置ク
長官 一人
主事 一人
檢疫委員 若干人
書記 若干人
- 第三條 長官主事檢疫委員ハ官吏醫師藥劑師又ハ學識經驗アル者ニ就キ内務大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス
- 其ノ官ニ在ラサル者ノ待遇ハ奏任トス
- 第四條 長官ハ内務大臣ノ命ヲ承ケ部下ノ諸員ヲ監督シ局中一切ノ事務ヲ掌理ス
主事ハ長官ノ指揮ヲ受ケ庶務ヲ整理ス
- 第五條 檢疫委員ハ長官ノ命ヲ承ケ檢疫豫防ニ關スル事務ヲ分掌シ廳府縣以下ニ於ケル傳染病豫防ニ關スル事務ヲ巡視ス
- 第六條 書記ハ内務屬其ノ他ニ就キ内務大臣之ヲ命ス
其ノ官ニ在ラサル者ノ待遇ハ判任トス
- 第七條 書記ハ上官ノ指揮ヲ受ケ庶務ニ從事ス
- 第八條 長官主事檢疫委員ニシテ有給ノ官職ヲ帶ヒサル者ニハ一箇月ニ百圓以内ノ手當ヲ給スルコトヲ得
- 第九條 書記ニシテ有給ノ官職ヲ帶ヒサル者ニハ一箇月六十圓以内ノ手當ヲ給スルコトヲ得
- 第十條 臨時檢疫局ハ傳染病流行シ又ハ流行ノ兆アルニ際ニ必要ニ應ジ開設スルモノトス

朕廳府縣ニ臨時檢疫部ヲ置クノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年四月十五日

内閣總理大臣 伯爵 伊藤博文
内務大臣 子爵 野村 靖

勅令第四十四號 (官報 四月十六日)

- 第一條 廳府縣^{東京府ハニ}臨時檢疫部ヲ置キ傳染病流行ニ際シ檢疫豫防ニ關スル事務ヲ掌理セシム
- 第二條 臨時檢疫部ニ左ノ職員ヲ置ク
部長 一人
次長 一人 ^{警視廳ニ於テハ二人}
檢疫官 若干人
- 第三條 部長ハ警部長ヲ以テ之ニ充テ次長ハ參事官ヲ以テ之ニ充ツ
警視廳ニ於テハ部長ハ警視中ヨリ警視總監之ヲ命シ次長ハ警察醫長東京府參事官ヲ以テ之ニ充ツ
- 北海道廳ニ於テハ次長ハ參事官中ヨリ北海道廳長官之ヲ命ス
- 第四條 檢疫官ハ廳府縣島廳郡區官吏醫師藥劑師等ニ就キ警視總監北海道廳長官府縣知事之ヲ命ス
其ノ官ニ在ラサル者ノ待遇ハ判任トス
- 第五條 部長ハ警視總監北海道廳長官府縣知事ノ命ヲ承ケ部下ノ諸員ヲ監督シ部中一切ノ事務ヲ掌理ス
次長ハ部長ノ事務ヲ輔ケ部長事故アルトキハ其ノ事務ヲ代理ス

第六條 検査官ハ部長ノ命ヲ承ケ検査豫防ニ關スル事務ヲ分掌シ郡區市町村ニ於ケル傳染病豫防ニ關スル事務ヲ巡視ス

第七條 検査官ニシテ有給ノ官職ヲ帶ヒサル者ニハ一箇月百圓以内ノ手當ヲ給スルコトヲ得

第八條 臨時検査部ハ傳染病流行シ又ハ流行ノ兆アルニ際ニ必要ニ應ジ内務大臣ノ指定ニ依リ開設スルモノトス

第九條 警視總監北海道廳長官府縣知事ハ必要ト認ムルトキハ管内ニ臨時検査部出張所ヲ置クコトヲ得

朕海軍軍人俸給令第四表改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年四月十五日

内閣總理大臣 伯爵 伊藤博文
海軍 大臣 伯爵 西郷從道

勅令第四十五號 (官報四月十六日)
海軍軍人俸給令第四表左ノ通改正ス

第四表 軍艦 航海加俸表

大將	司令長官	加俸日當額		加俸日當額	加給額
		本邦沿岸	支那朝鮮 亞細亞露領沿		
二圓	一圓	一圓	一圓	一圓	一圓
四圓	二圓	二圓	二圓	二圓	二圓
六圓	三圓	三圓	三圓	三圓	三圓
八圓	四圓	四圓	四圓	四圓	四圓

少中	少將	大佐	大佐及 相當官	少佐及 相當官	大尉及 相當官	航海加俸		其他
						其	其	
一圓六十錢	一圓三十錢	一圓	一圓	一圓	一圓	一圓	一圓	一圓
八圓	六圓五十錢	五圓	四圓五十錢	四圓	三圓五十錢	三圓	二圓五十錢	二圓
三圓二十錢	二圓六十錢	二圓	一圓八十錢	一圓六十錢	一圓四十錢	一圓	一圓	一圓
四圓八十錢	三圓九十錢	三圓	二圓七十錢	二圓四十錢	二圓二十錢	二圓	一圓八十錢	一圓
六圓四十錢	五圓二十錢	四圓	三圓六十錢	三圓二十錢	二圓八十錢	二圓	二圓四十錢	二圓

下	士	四	錢	二	錢	八	錢	十二	錢	十六	錢
一	等	卒	三	錢	二	錢	六	錢	九	錢	十二
二	等	卒	二	錢	一	錢	四	錢	六	錢	八
三	等	卒	一	錢	一	錢	三	錢	四	錢	六
四	等	卒	一	錢	一	錢	二	錢	三	錢	四
五	等	卒	一	錢	一	錢	一	錢	一	錢	一

大西洋亞米利加洲沿岸ハ第五欄ノ加給額ヲ給ス

〔参照〕

勅令第二百五十二號海軍軍人俸給令(明治二十六年十二月十八日官報)抄録

第四表 定員航海加停表

官	職	加俸日當額		加俸日當額	
		本邦沿岸	支那、朝鮮、南洋羣島	支那、朝鮮、南洋羣島	支那、朝鮮、南洋羣島
大將	司令長官	二圓	四圓	四圓	六圓
少將	司令長官	一圓六十錢	三圓	三圓	四圓八十錢
中將	司令長官	一圓六十錢	二圓六十錢	三圓	四圓八十錢
少將	司令長官	一圓三十錢	一圓六十錢	二圓	三圓九十錢
大佐及 相當官	參謀長	一圓	二圓	三圓	四圓
大佐及 相當官	其他	八十錢	六十錢	八十錢	六十錢
少佐及 相當官	艦長	八十錢	六十錢	八十錢	六十錢
少佐及 相當官	副艦長	七十錢	五十錢	七十錢	五十錢

大尉及 相當官	機長	副機長	航海長	其他	相當官		
					機長	副機長	
機長	六十錢	三十錢	三十錢	三十錢	三十錢	三十錢	
副機長	五十錢	二十錢	二十錢	二十錢	二十錢	二十錢	
航海長	四十五錢	二十錢	二十錢	二十錢	二十錢	二十錢	
其他	四十錢	二十錢	二十錢	二十錢	二十錢	二十錢	
少尉及相當官	三十錢	十五錢	十五錢	十五錢	十五錢	十五錢	
候補生及准士官	二十錢	十錢	十錢	十錢	十錢	十錢	
下	士	四	錢	八	錢	十二	
一	等	卒	三	錢	二	錢	六
二	等	卒	二	錢	一	錢	四
三	等	卒	一	錢	一	錢	二
四	等	卒	一	錢	一	錢	一
五	等	卒	一	錢	一	錢	一

大西洋亞米利加洲沿岸ハ第五欄ノ加給額ヲ給ス

朕明治二十八年年度歳出豫算中第一豫備金ヲ以テ補充シ得ヘキ費途ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシ

御名 御璽

明治二十八年四月十五日

大藏大臣伯爵松方正義

勅令第四十六號(官報四月十六日)

明治二十八年年度歳出豫算中第一豫備金ヲ以テ補充シ得ヘキ費途左ノ通之ヲ定ム

- 死 亡 賜 金
- 死 傷 手 當 金
- 退 官 賜 金
- 訴 訟 費 金
- 賠 償 金
- 貨 幣 交 換 差 金
- 裁 判 費 金
- 在外地所家屋ニ係ル公課料
- 電 信 料
- 在外國難民貸與金
- 巡查看守及守備給助料
- 埋 葬 料
- 官 吏 療 治 料
- 阿 片 費 料
- 藥品検査印紙製造費
- 看守 俸 給
- 囚徒及在監人諸費
- 看守及巡查滿年賜金

豫算上金貨又ハ外國貨幣ヲ以テ支拂フヘキ費途ニ對スル貨幣交換差金
 在外公館費及裁判所費中ノ裁判費
 外務本省及在外公館電信料

陸海軍軍人埋葬料及屯田兵家族ノ埋葬料

褒賞恩賜及救助費

徵兵參事員手當及旅費

海兵附添人旅費

徵兵醫員檢丁旅費及新兵入營旅費

刑事被告人犯罪人護送及留置諸費

難 破 船 費

海 員 取 扱 費

警察費連帶支辨金

北海道及沖繩縣傳染病豫防費

沖繩縣地役人役俸

北海道牧畜獎勵會社利益不足補給

北海道炭礦鐵道會社利益不足補給

日本鐵道會社利益不足補給

九州鐵道株式會社補助

萬國關稅表刊行同盟費

公債證書及銀行紙幣製造費

公債利子及手数料

文官恩給及文官遺族扶助

軍人恩給及軍人遺族扶助

學校職員恩給

學校職員退職賜金

内閣府視察北海道本廳府縣費中ノ褒賞費、北海道本廳府縣費中ノ恩賜及救助費、
 視察伊豆七島地方警察費、北海道本廳府縣、小笠原島地方、沖繩縣地方費中ノ警察
 費與北海道本廳費中ノ補災救助、北海道本廳、沖繩縣地方費中ノ行旅病人死亡人諸費

勅令第五十號(官報 四月二十五日)

明治二十八年徵集スヘキ現役兵及補充兵ノ員數左表ノ通定ス

明治二十八年徵集現役兵補充兵員數表

師管	兵種	現役										補充	合計	
		歩兵	騎兵	野戰砲兵	要塞砲兵	工兵	輜重兵	輜重輸卒	縫工	靴工	小計			
第一師管	近衛師團	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
第二師管	近衛師團	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
第三師管	近衛師團	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
第四師管	近衛師團	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
第五師管	近衛師團	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
第六師管	近衛師團	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
合計		6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000

師管	兵種	補充										合計		
		歩兵	騎兵	野戰砲兵	要塞砲兵	工兵	輜重兵	輜重輸卒	縫工	靴工	小計			
第一師管	近衛師團	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
第二師管	近衛師團	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
第三師管	近衛師團	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
第四師管	近衛師團	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
第五師管	近衛師團	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
第六師管	近衛師團	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
合計		6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000

御名 御鹽

明治二十八年四月二十二日

文部大臣侯爵西園寺公望

勅令第五十三號(官報四月二十五日)
帝國大學教官俸給令中第一表第三行ヲ左ノ通改ム

十	六	人	十	六	人	十	六	人	十	七	人
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

〔參照〕

勅令第八十四號帝國大學教官俸給令(明治二十六年八月十一日官報)抄録

第一表

一級俸	二級俸	三級俸	四級俸	五級俸
千二百圓	千一百圓	千圓	九百圓	八百圓
十五人	十五人	十五人	十五人	十五人

朕帝國大學理科大學植物學ノ講座數改定ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御鹽

明治二十八年四月二十二日

文部大臣侯爵西園寺公望

勅令第五十四號(官報四月二十五日)

明治二十六年勅令第九十三號中理科大學植物學ノ下ニ「講座」ヲ「二講座」ニ改ム

朕郡長廢置ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御鹽

明治二十八年四月二十二日

內務大臣子爵野村 靖

勅令第五十五號(官報四月二十五日)

熊本縣管下飽田郡、託麻郡、宇土郡ニ郡長一人、山鹿郡、山本郡、菊池郡、合志郡ニ郡長一人、上益城郡、下益城郡ニ郡長一人、八代郡、葦北郡ニ郡長一人ヲ置ク。コトヲ廢止シ、飽田郡、託麻郡ニ郡長一人、山鹿郡、山本郡ニ郡長一人、菊池郡、合志郡ニ郡長一人ヲ置ク

附則

本令ハ明治二十八年七月一日ヨリ施行ス

朕占領地民政部高等文官及判任文官任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御鹽

明治二十八年四月二十三日

內閣總理大臣伯爵伊藤博文
陸軍大臣伯爵山縣有朋

勅令第五十六號(官報四月二十五日)

占領地民政部高等文官及判任文官ハ明治二十六年勅令第八十三號文官任用令ノ規定ニ依ラス。高等文官ニ在リテハ文官高等試驗委員判任文官ニ在リテハ文官普通試驗委員ノ銜ヲ經テ任用スルコトヲ得

朕中央衛生會官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年四月二十八日

勅令第五十七號(官報五月一日)

中央衛生會官制

内閣總理大臣伯爵伊藤博文
内務大臣子爵野村 靖

第一條 中央衛生會ハ内務大臣ノ監督ニ屬シ公衆衛生獸畜衛生ニ關スル事項ニ就キ各省大臣ノ諮詢ニ應ジ意見ヲ開申ス

第二條 中央衛生會ハ各省主管事務中衛生ニ關スル事項ニ就テハ其ノ主任大臣ニ建議スルコトヲ得

第三條 中央衛生會ハ衛生各般ノ事項ニ關シ警視總監北海道廳長官及府縣知事ニ尋問ヲ要シ或ハ臨時會員ヲ各地方ニ派遣シテ調査檢察ヲ要スト認ムルトキハ之ヲ内務大臣ニ具申スヘシ

第四條 中央衛生會ハ議事整理ノ爲メ規則ヲ議定シ内務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第五條 中央衛生會ハ會長一人委員二十八人以内ヲ以テ之ヲ組織ス

第六條 會長ハ勅任トス

委員ハ宮内省侍醫局長内務省警保局長内務省衛生局長内務省高等官一人陸軍省醫務局長海軍衛生會議議長帝國大學醫科大學長及醫師藥學家若干人ヲ以テ之ニ充ツ

第七條 特別ノ事件ヲ審議スル爲メ臨時必要ノ場合ニ於テハ前條定員ノ外臨時委員ヲ命スルコトヲ得

第八條 委員中内務省高等官醫師藥學家及臨時委員ハ内務大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス

醫師藥學家ヨリ出テタル委員ノ任期ハ四箇年トス但滿期後再任セラルヽコトヲ得

第八條 會長ハ會務ヲ總管シ 議事規則ニ依リ 議事ヲ整理シ 其ノ決議ヲ內務大臣及主任大臣ニ具申ス
 第九條 會長事故アルトキハ 內務大臣ノ指名シタル委員ヲシテ 事務ヲ代理セシム
 第十條 中央衛生會ニ幹事一人ヲ置ク
 幹事ハ 委任トス 會長ノ指揮ヲ受ケ 庶務ヲ整理ス
 第十一條 會長及幹事ニハ 俸給ヲ給セス
 會長委員及幹事ニハ 一箇年五百圓以內 臨時委員ニハ 事件ノ輕重ニ應ジ 其ノ都度相當ノ手當ヲ給スルコトヲ得

第十二條 中央衛生會ニ書記ヲ置キ 內務屬ヲ以テ之ニ充ツ

書記ハ 上官ノ指揮ヲ受ケ 議事ノ筆記及庶務ニ從事ス

第十三條 書記ニハ 一箇年百圓以內ノ手當ヲ給スルコトヲ得

附則

第十四條 從前ノ委員ハ 別ニ辭令ヲ用井 ス 本令施行ノ日ヨリ 其ノ任ヲ解カレタルモノトス

朕陸軍軍人軍艦若クハ水雷艇ニ乘組ムトキ 航海加俸ヲ給スル件ヲ裁可シ 茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年四月二十四日

內閣總理大臣 伯爵伊藤博文
 陸軍大臣 伯爵山縣有朋
 海軍大臣 伯爵西鄉從道

勅令第五十八號 (官報 五月四日)

陸軍軍人軍艦若クハ水雷艇ノ乘員トシテ 航行ノ役務ニ服スル 艦艇ニ乘組ムトキハ 海軍軍人俸給令ニ準據シ 其ノ官職相當ノ航海加俸ヲ給ス 但陸軍中佐及相當官ハ 海軍大佐ニ陸軍中尉及相當官ハ 海

軍大尉ニ陸軍上等兵及陸軍一等卒ハ 海軍二等卒ニ陸軍二等卒ハ 海軍三四等卒ニ準ス 本令ハ 發布ノ日ヨリ 施行ス

朕會計検査院屬臨時増置ノ件ヲ裁可シ 茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年四月二十四日

內閣總理大臣 伯爵伊藤博文

勅令第五十九號 (官報 五月四日)

臨時軍事費ノ會計検査ノ爲メ 會計検査院ニ屬三十五人ヲ臨時増置ス

朕臨時陸軍中央金櫃部條例中改正ノ件ヲ裁可シ 茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年五月一日

陸軍大臣 臨時代理
 海軍大臣 伯爵西鄉從道

勅令第六十號 (官報 五月四日)

臨時陸軍中央金櫃部條例中左ノ通改正ス

第二條中「五人」ヲ「十八」ニ改ム

第六條中「十八」ヲ「三十八」ニ改ム

(參照)

勅令第六十二號 臨時陸軍中央金櫃部條例 (明治二十七年六月八日 官報) 抄録

第二條 臨時陸軍中央金櫃部ニ左ノ職員ヲ置ク
 金櫃部長 一等軍吏 一人

計官官 二、三等軍吏 五人
第六條 第二條職員ノ外ニ一、二、三等書記若クハ關ヲ置キ其ノ定員ハ通シテ十八トス上官ノ命ヲ承ケ事務ニ服ス

朕軍艦隊定員表中追加ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年五月一日

海軍大臣 伯爵西郷從道

勅令第六十一號 (官報 五月四日)

軍艦隊定員表中鎮邊ノ次ニ左ノ通追加ス

鎮邊	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	計
廣	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	計
平	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	計
廣	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	計

〔參照〕

勅令第二百二十二號軍艦隊定員表(明治二十六年十二月一日官報)抄録

朕伊豆七島地役人及名主待遇ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年五月一日

内閣總理大臣 伯爵伊藤博文
内務大臣 子爵野村 靖

勅令第六十二號 (官報 五月六日)

東京府管下大島三宅島八丈島御藏島神津島新島地役人及利島名主ハ判任官ノ待遇トス

朕戰時若クハ事變ニ際シ海軍高等武官任用ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年五月八日

内閣總理大臣 伯爵伊藤博文
海軍大臣 伯爵西郷從道

勅令第六十三號 (官報 五月十日)

戰時若クハ事變ニ際シ海軍高等武官ノ増員又ハ補充ヲ要スル場合ニ於テ海軍高等武官任用條例ニ依リ任用スルモ猶不足ヲ生スルトキ若クハ該條例ニ依リ任用シ難キトキハ左ノ者ニ限リ試験ヲ用井ス審査ノ上海軍少尉若クハ其ノ相當官ニ任用スルコトヲ得

一 海軍ノ官費生徒ト爲リ外國ニ留學シ海軍高等武官ニ必要ノ學術ヲ修得シタル證明書ヲ有スル者
二 私費ヲ以テ外國ニ留學シ海軍高等武官ニ必要ノ學術ヲ修得シ卒業證書若クハ其ノ證明書ヲ有スル者

前項第二ノ者ニシテ海軍高等武官任用條例第九條ニ掲クル事項ノ一ニ該ルトキハ之ヲ任用スルコトヲ得ス

〔參照〕

勅令第二百五十號海軍高等武官任用條例(明治二十六年十二月十八日官報)抄録

- 第九條 一 年齢二十年未滿及滿二十八年以上ノ者
- 二 禁錮以上ノ刑ヲ受ケタル者又ハ賭博犯ノ處分ヲ受ケタル者
- 三 復権ヲ得サル家資分散者 破産者及身代限ノ處分ヲ受ケ辨償ノ義務ヲ終ヘサル者若クハ其ノ相續人

朕明治二十八年四月十七日下ノ關ニ於テ朕カ全權辦理大臣ト清國全權大臣ノ記名請印シタル構和條約及別約ヲ批准シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年五月十日(官報 五月十三日)

内閣總理大臣伯爵伊藤博文
外務大臣子爵陸奥宗光

大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ハ兩國及其ノ臣民ニ平和ノ幸福ヲ回復シ且將來紛議ノ端ヲ除クコトヲ欲シ構和條約ヲ訂結スル爲メニ大日本國皇帝陛下ハ内閣總理大臣從二位勳一等伯爵伊藤博文外務大臣從二位勳一等子爵陸奥宗光ヲ大清國皇帝陛下ハ太子太傅文華殿大學士北洋大臣直隸總督一等肅毅伯李鴻章二品頂戴前出使大臣李經方ヲ各其ノ全權大臣ニ任命セリ因テ各全權大臣ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ其ノ良好妥當ナルヲ認メ以テ左ノ諸條款ヲ協議決定セリ

第一條

清國ハ朝鮮國ノ完全無缺ナル獨立自主ノ國タルコトヲ確認ス因テ右獨立自主ヲ損害スヘキ朝鮮國ヨリ清國ニ對スル貢獻典禮等ハ將來全ク之ヲ廢止スヘシ

第二條

清國ハ左記ノ土地ノ主權並ニ該地方ニ在ル城壘兵器製造所及官有物ヲ永遠日本國ニ割與ス

一 左ノ經界内ニ在ル奉天省南部ノ地

鴨綠江口ヨリ該江ヲ溯リ安平河口ニ至リ該河口ヨリ鳳凰城海城營口ニ亘リ遼河口ニ至ル折線以南ノ地併セテ前記ノ各城市ヲ包含ス而シテ遼河ヲ以テ界トスル處ハ該河ノ中央ヲ以テ經界トスルコトト知ルヘシ
遼東海岸及黃海北岸ニ在テ奉天省ニ屬スル諸島嶼

二 臺灣全島及其ノ附屬諸島嶼

三 澎湖列島即英國「グリーンウイチ」東經百十九度乃至百二十度及北緯二十三度乃至二十四度ノ間ニ在ル諸島嶼

第三條

前條ニ掲載シ附屬地圖ニ示ス所ノ經界線ハ本約批准交換後直チニ日清兩國ヨリ各二名以上ノ境界共同劃定委員ヲ任命シ實地ニ就テ確定スル所アルヘキモノトス而シテ若本約ニ掲記スル所ノ境界ニシテ地形上又ハ施政上ノ點ニ付完全ナラサルニ於テハ該境界劃定委員ハ之ヲ更正スルコトニ任スヘシ

該境界劃定委員ハ成ルヘク速ニ其ノ任務ニ從事シ其ノ任命後一箇年以内ニ之ヲ終了スヘシ但シ該境界劃定委員ニ於テ更定スル所アルニ當リテ其ノ更定シタル所ニ對シ日清兩國政府ニ於テ可認スル迄ハ本約ニ掲記スル所ノ經界線ヲ維持スヘシ

第四條

清國ハ軍費賠償金トシテ庫平銀貳億兩ヲ日本國ニ支拂フヘキコトヲ約ス右金額ハ都合八回ニ分チ初回及次回ニハ毎回五千萬兩ヲ支拂フヘシ而シテ初回ノ拂込ハ本約批准交換後六箇月以内ニ次回ノ拂込ハ本約批准交換後十二箇月以内ニ於テスヘシ残りノ金額ハ六箇年賦ニ分チ其ノ第一次ハ本約批准交換後二箇年以内ニ其ノ第二次ハ本約批准交換後三箇年以内ニ其ノ第三次ハ本約批准交換後四箇年以内ニ其ノ第四次ハ本約批准交換後五箇年以内ニ其ノ第五次ハ本約批准交換後六箇年以内ニ其ノ第六次ハ本約批准交換後七箇年以内ニ支拂フヘシ又初回拂込ノ期日ヨリ以後未ダ拂込ヲ了ラサル額ニ對シテハ毎年百分ノ五ノ利子ヲ支拂フヘキモノトス
但シ清國ハ何時タリトモ該賠償金ノ全額或ハ其ノ幾分ヲ前以テ一時ニ支拂フコトヲ得ヘシ如シ本約批准交換後三箇年以内ニ該賠償金ノ總額ヲ皆済スルトキハ總テ利子ヲ免除スヘシ若夫迄ニ二箇年若ハ更ニ短期ノ利子ヲ拂込ミタルモノアルトキハ之ヲ元金ニ編入スヘシ

第五條

日本國へ割與セラレタル地方ノ住民ニシテ右割與セラレタル地方ノ外ニ住居セムト欲スル者ハ自由ニ其ノ所有不動産ヲ賣却シテ退去スルコトヲ得ヘシ其ノ爲メ本約批准交換ノ日ヨリ二箇年間ヲ猶豫スヘシ但シ右年限ノ滿チタルトキハ未タ該地方ヲ去ラサル住民ヲ日本國ノ都合ニ因リ日本國臣民ト視爲スコトアルヘシ
日清兩國政府ハ本約批准交換後直チニ各一名以上ノ委員ヲ臺灣省へ派遣シ該省ノ受渡ヲ爲スヘシ而シテ本約批准交換後二箇月以内ニ右受渡ヲ完了スヘシ

第六條

日清兩國間ノ一切ノ條約ハ交戰ノ爲メ消滅シタレハ清國ハ本約批准交換ノ後速ニ全權委員ヲ任命シ日本國全權委員ト通商航海條約及陸路交通貿易ニ關スル約定ヲ締結スヘキコトヲ約ス而シテ現ニ清國ト歐洲各國トノ間ニ存在スル諸條約章程ヲ以テ該日清兩國間諸條約ノ基礎ト爲スヘシ又本約批准交換ノ日ヨリ該諸條約ノ實施ニ至ル迄ハ清國ハ日本國政府官吏商業航海陸路交通貿易工業船舶及臣民ニ對シ總テ最惠國待遇ヲ與フヘシ
清國ハ右ノ外左ノ讓與ヲ爲シ而シテ該讓與ハ本約調印ノ日ヨリ六箇月ノ後有效ノモノトス

第一 清國ニ於テ現ニ各外國ニ向テ開キ居ル所ノ各市港ノ外ニ日本國臣民ノ商業住居工業及製造業ノ爲メニ左ノ市港ヲ開クヘシ但シ現ニ清國ノ開市場開港場ニ行ハルル所ト同一ノ條件ニ於テ同一ノ特典及便益ヲ享有スヘキモノトス

- 一 湖北省荊州府沙市
- 二 四川省重慶府
- 三 江蘇省蘇州府
- 四 浙江省杭州府

日本國政府ハ以上列記スル所ノ市港中何レノ處ニモ領事官ヲ置クノ權利アルモノトス

第二 旅客及貨物運送ノ爲メ日本國汽船ノ航路ヲ左記ノ場所ニ迄擴張スヘシ

一 楊子江上流湖北省宜昌ヨリ四川省重慶ニ至ル
二 上海ヨリ吳淞江及運河ニ入り蘇州杭州ニ至ル

日清兩國ニ於テ新章程ヲ決定スル迄ハ前記航路ニ關シ適用シ得ヘキ限ハ外國船舶清國內地水路航行ニ關スル現行章程ヲ施行スヘシ

第三 日本國臣民カ清國內地ニ於テ貨品及生産物ヲ購買シ又ハ其ノ輸入シタル商品ヲ清國內地へ運送スルニハ右購買品又ハ運送品ヲ倉入スル爲メ何等ノ税金取立金ヲモ納ムルコトナク一時倉庫ヲ借入ルルノ權利ヲ有スヘシ

第四 日本國臣民ハ清國各開市場開港場ニ於テ自由ニ各種ノ製造業ニ從事スルコトヲ得ヘク又所定ノ輸入税ヲ拂フノミニテ自由ニ各種ノ器械類ヲ清國へ輸入スルコトヲ得ヘシ

清國ニ於ケル日本國臣民ノ製造ニ係ル一切ノ貨品ハ各種ノ内國運送税内地稅賦課金取立金ニ關シ又清國內地ニ於ケル倉入上ノ便益ニ關シ日本國臣民カ清國へ輸入シタル商品ト同一ノ取扱ヲ受ケ且同一ノ特典免除ヲ享有スヘキモノトス

此等ノ讓與ニ關シ更ニ章程ヲ規定スルコトヲ要スル場合ニハ之ヲ本條ニ規定スル所ノ通商航海條約中ニ具載スヘキモノトス

第七條 現ニ清國版圖内ニ在ル日本國軍隊ノ撤回ハ本約批准交換後三箇月内ニ於テスヘシ但シ次條ニ載スル所ノ規定ニ從フヘキモノトス

第八條 清國ハ本約ノ規定ヲ誠實ニ施行スヘキ擔保トシテ日本國軍隊ノ一時山東省威海衛ヲ占領スルコトヲ承諾ス而シテ本約ニ規定シタル軍費賠償金ノ初回次回ノ拂込ヲ了リ通商航海條約ノ批准交換ヲ了リタル時ニ當リテ清國政府ニテ右賠償金ノ殘額ノ元利ニ對シ充分適當ナル取極ヲ立テ清國海關

稅ヲ以テ抵當ト爲スコトヲ承諾スルニ於テハ日本國ハ其ノ軍隊ヲ前記ノ場所ヨリ撤回スヘシ若又之ニ關シ充分適當ナル取極立タサル場合ニハ該賠償金ノ最終回ノ拂込ヲ了リタル時ニ非サレハ撤回セサルヘシ尤通商航海條約ノ批准交換ヲ了リタル後ニ非サレハ軍隊ノ撤回ヲ行ハサルモノト承知スヘシ

第九條

本約批准交換ノ上ハ直チニ其ノ時現ニ有ル所ノ俘虜ヲ還附スヘシ而シテ清國ハ日本國ヨリ斯ク還附セラレタル所ノ俘虜ヲ虐待若ハ處刑セサルヘキコトヲ約ス

日本國臣民ニシテ軍事上ノ間諜若ハ犯罪者ト認メラレタルモノハ清國ニ於テ直チニ解放スヘキコトヲ約シ清國ハ又交戰中日本國軍隊ト種種ノ關係ヲ有シタル清國臣民ニ對シ如何ナル處刑ヲモ爲サス又之ヲ爲サシメサルコトヲ約ス

第十條

本約批准交換ノ日ヨリ攻戰ヲ止息スヘシ

第十一條

本約ハ大日本帝國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ニ於テ批准セララルヘク而シテ右批准ハ芝罘ニ於テ明治二十八年五月八日即光緒二十一年四月十四日ニ交換セララルヘシ
右證據トシテ兩帝國全權大臣ハ茲ニ記名調印スルモノナリ

明治二十八年四月十七日即光緒二十一年三月二十三日下ノ關ニ於テ二通ヲ作ル

- 大日本帝國全權辦理大臣 內閣總理大臣 伊藤博文 印
- 大日本帝國全權辦理大臣 外務大臣 陸奧宗光 印
- 大清帝國欽差頭等全權大臣 太子太傅文華殿大學士北洋大臣 李鴻章 印
- 大清帝國欽差全權大臣 直隸總督一等肅毅伯 李經方 印

122°

123°

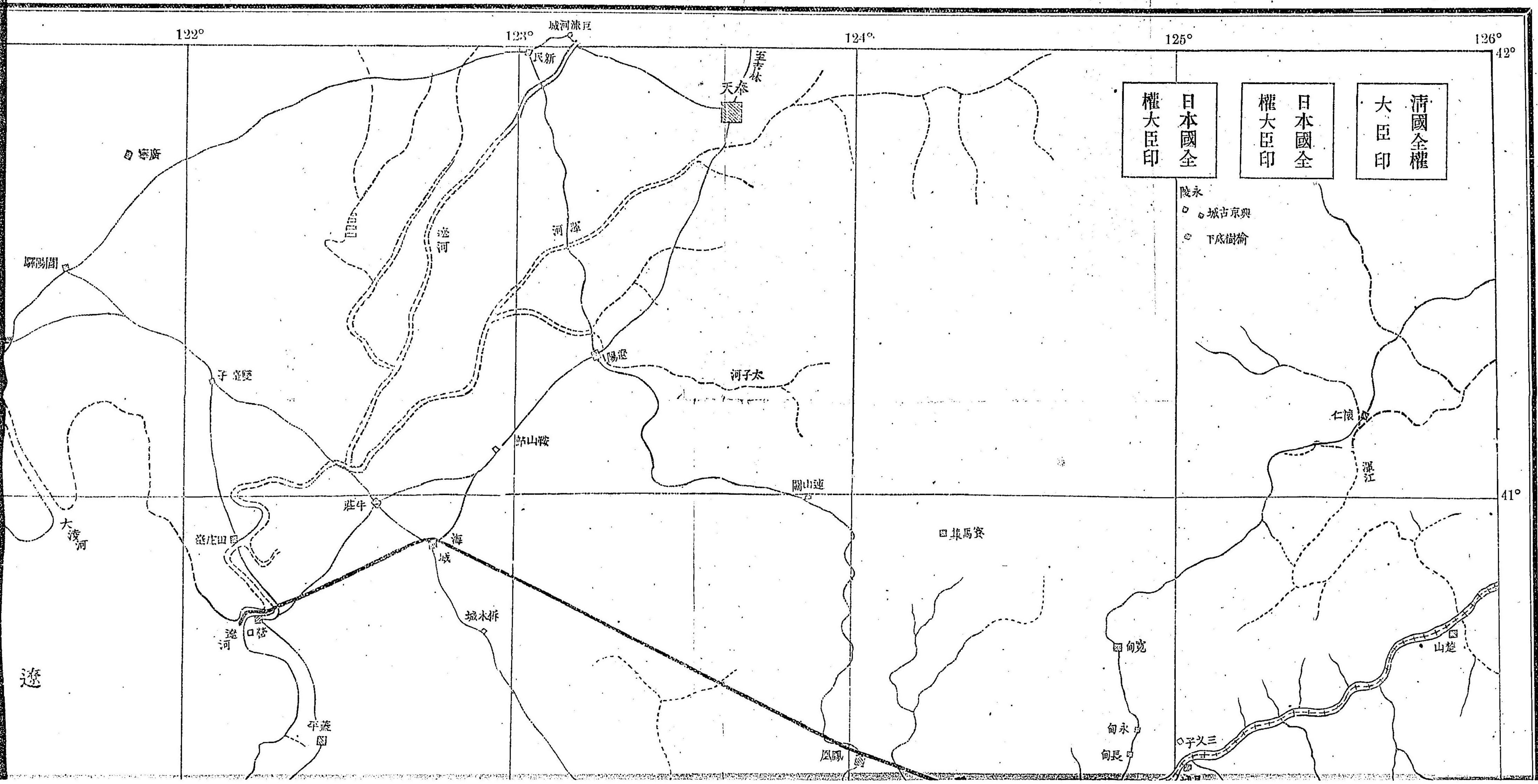
124°

125°

126°

42°

41°



權大臣印
日本國全

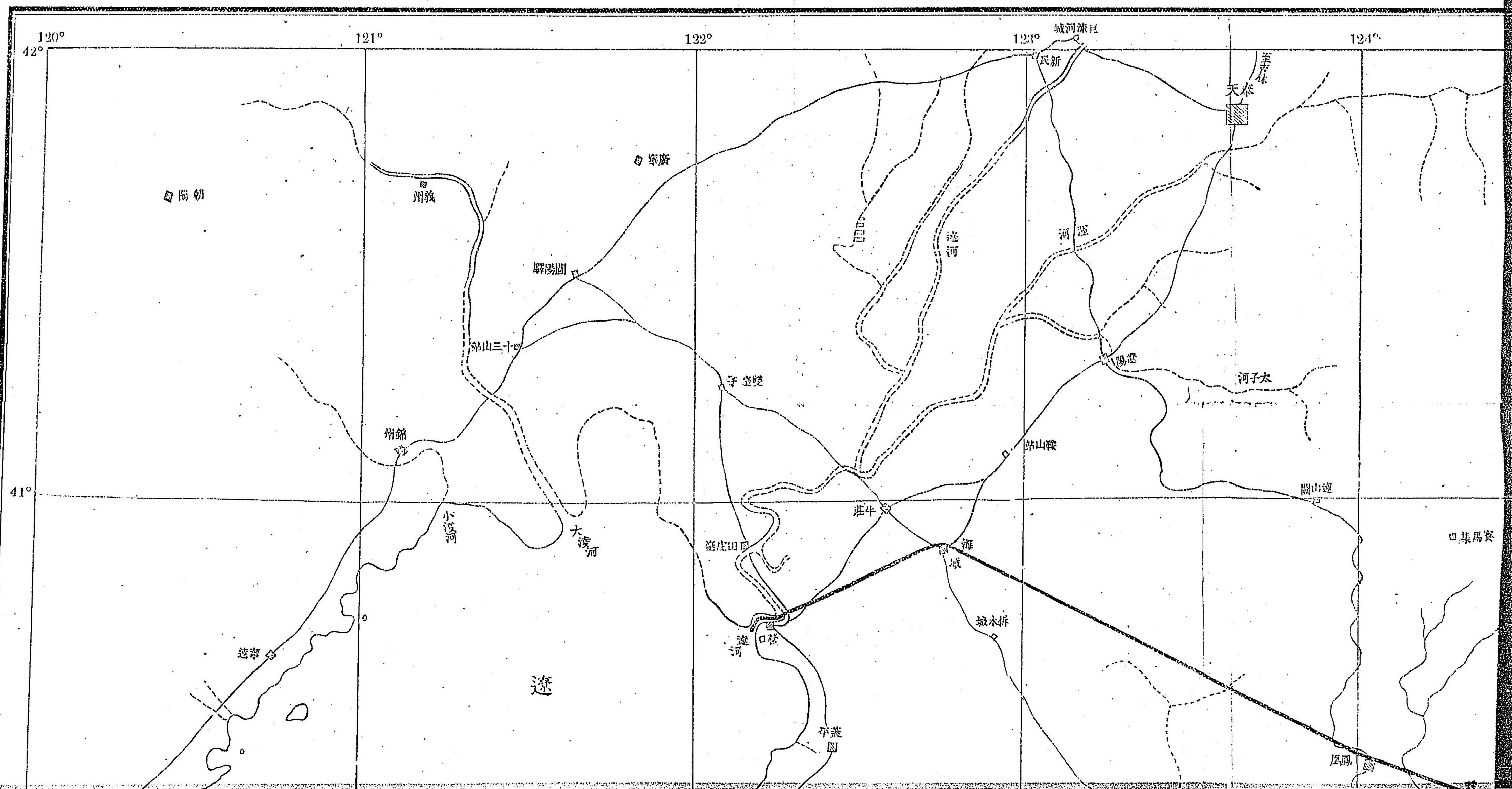
權大臣印
日本國全

清國全權
大臣印

陵永
城古京興
下底樹衙

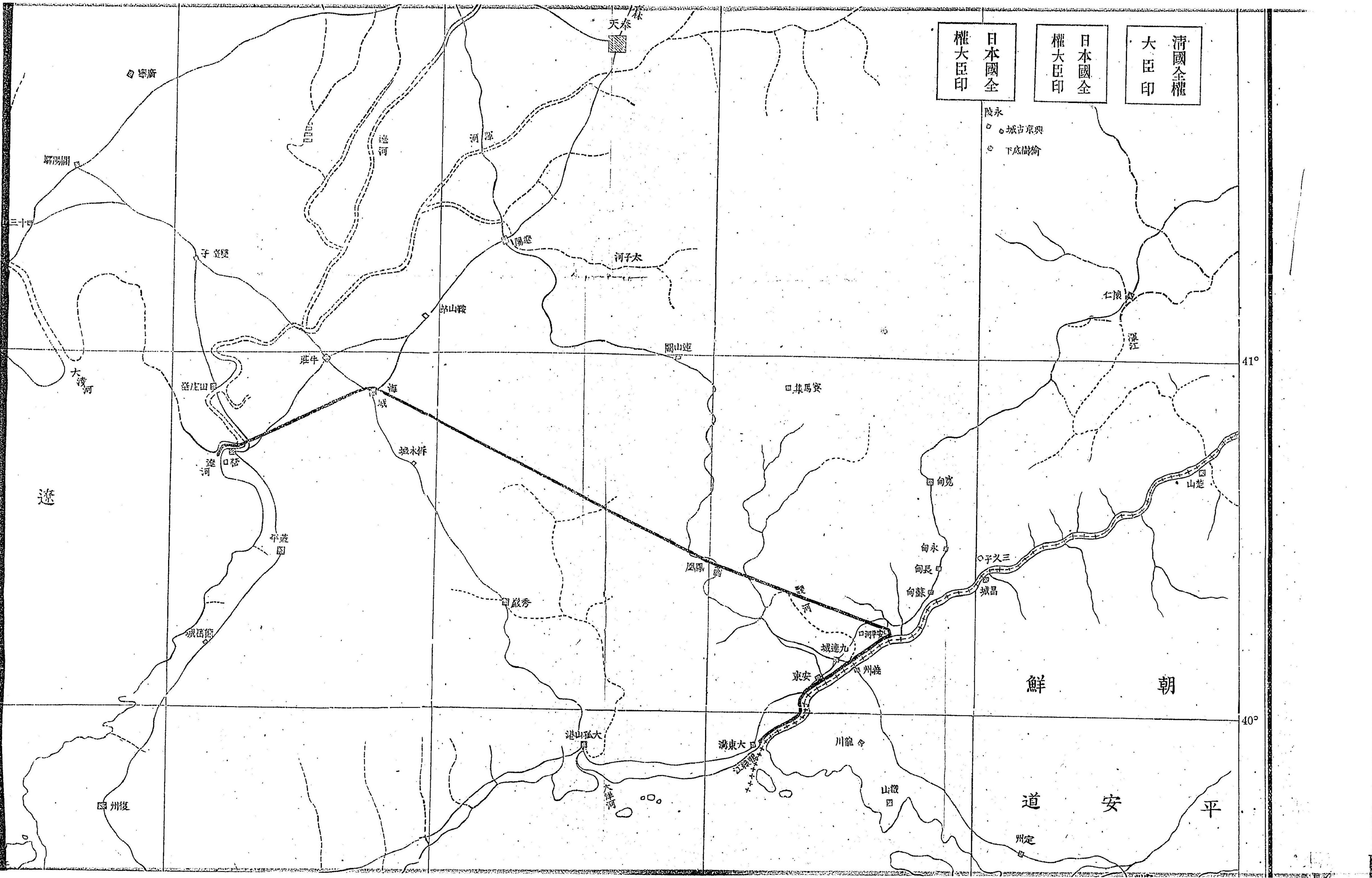
遼

明治二十八年五月 勅令



權大臣印	日本國全	權大臣印	日本國全	清國全權	大臣印
------	------	------	------	------	-----

永陵
 ○ 京城古城
 ○ 樹倫下



41°

40°

遼

鮮朝

平安道

寧廣

天奉

遼河

河瀋

河子太

站山鞍

關山連

仁浪

瀋江

莊牛

海城

四基馬安

城水祥

甸克

山楚

縣庄山

遼河

平蓋

甸永

甸長

甸蘇

子义三

城昌

嶺高龍

甸殿秀

風鳳

甸河

城連九

州義

東安

州復

港山孤大

溝東大

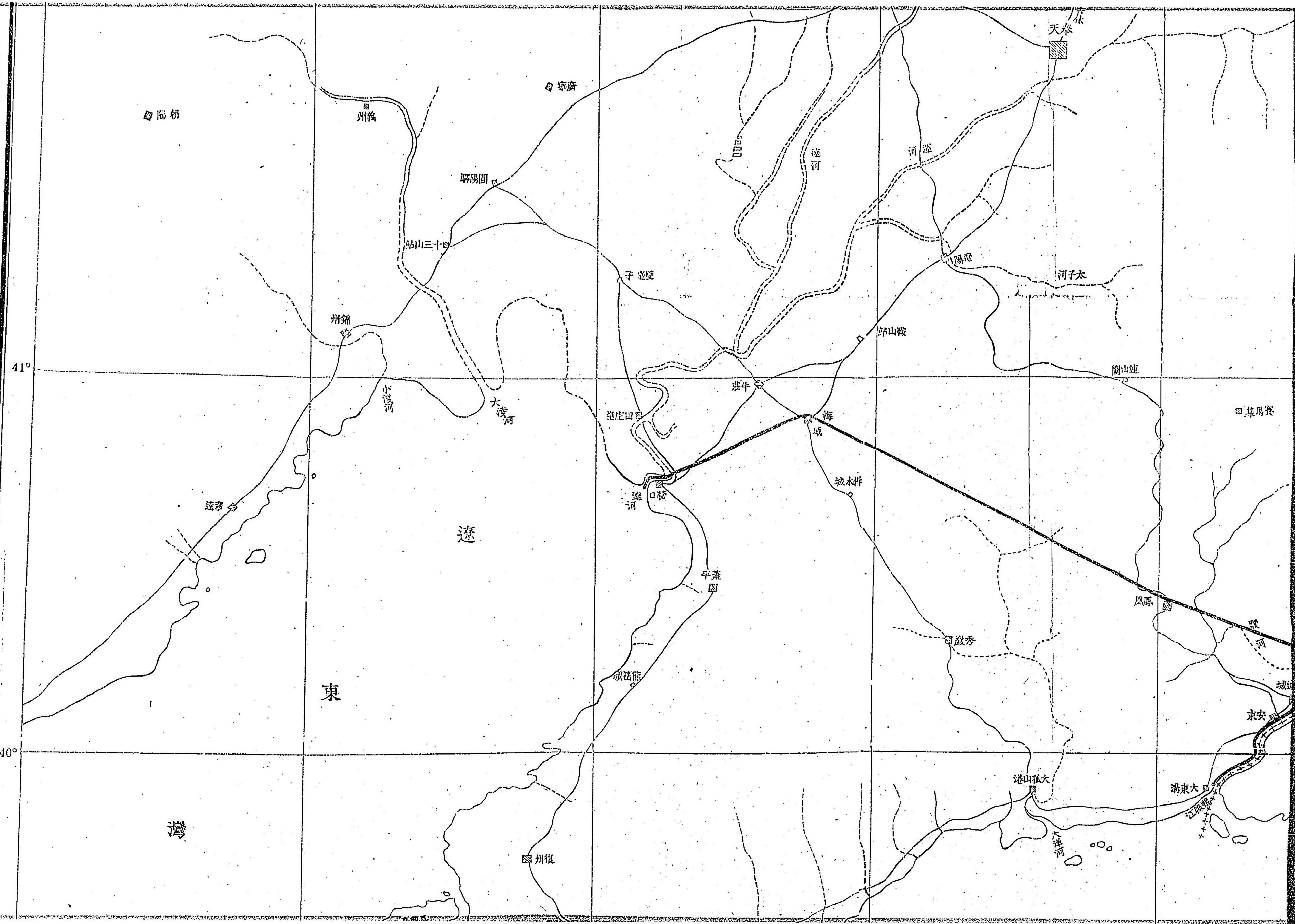
川龍

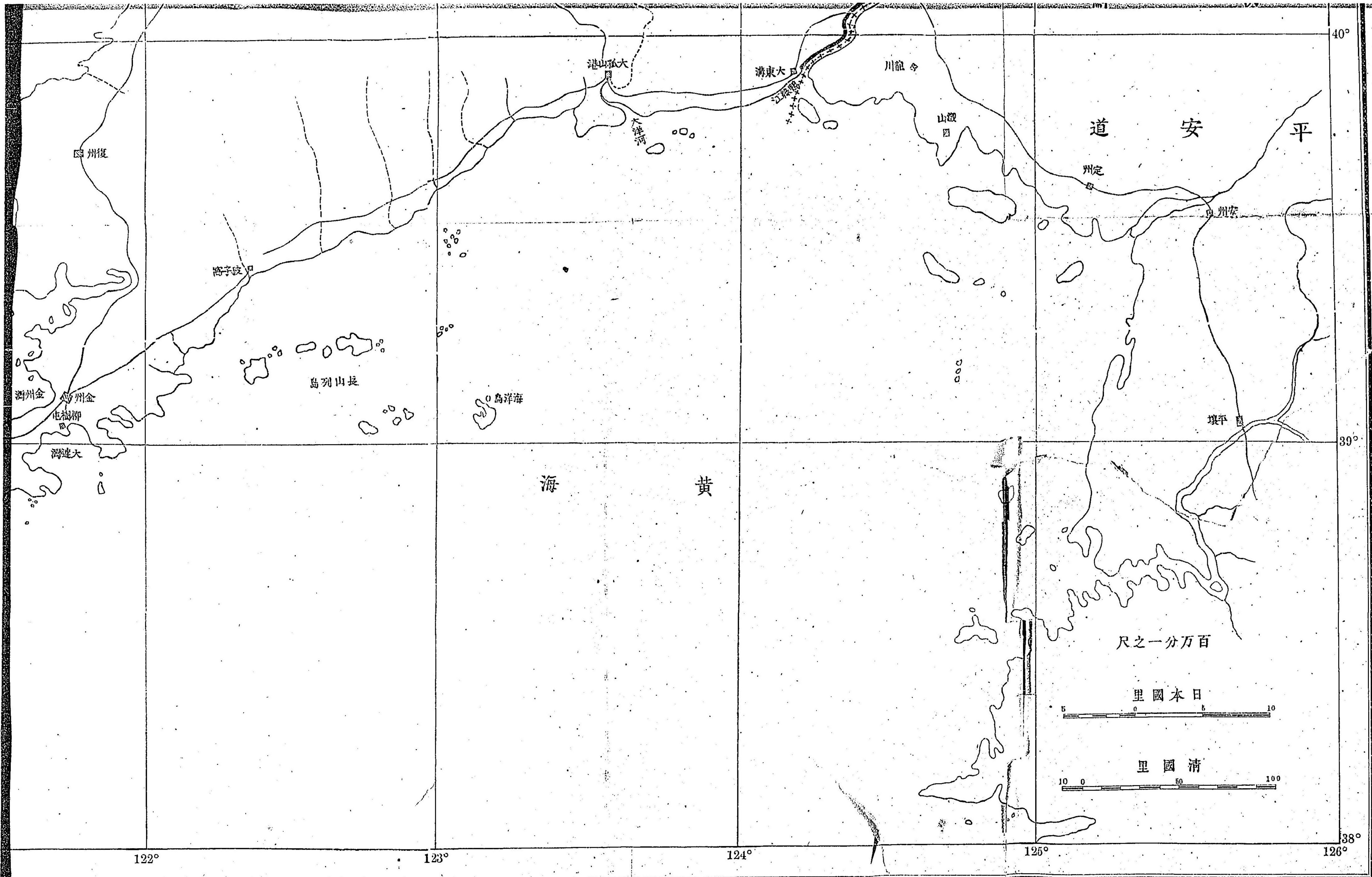
大津河

山鐵

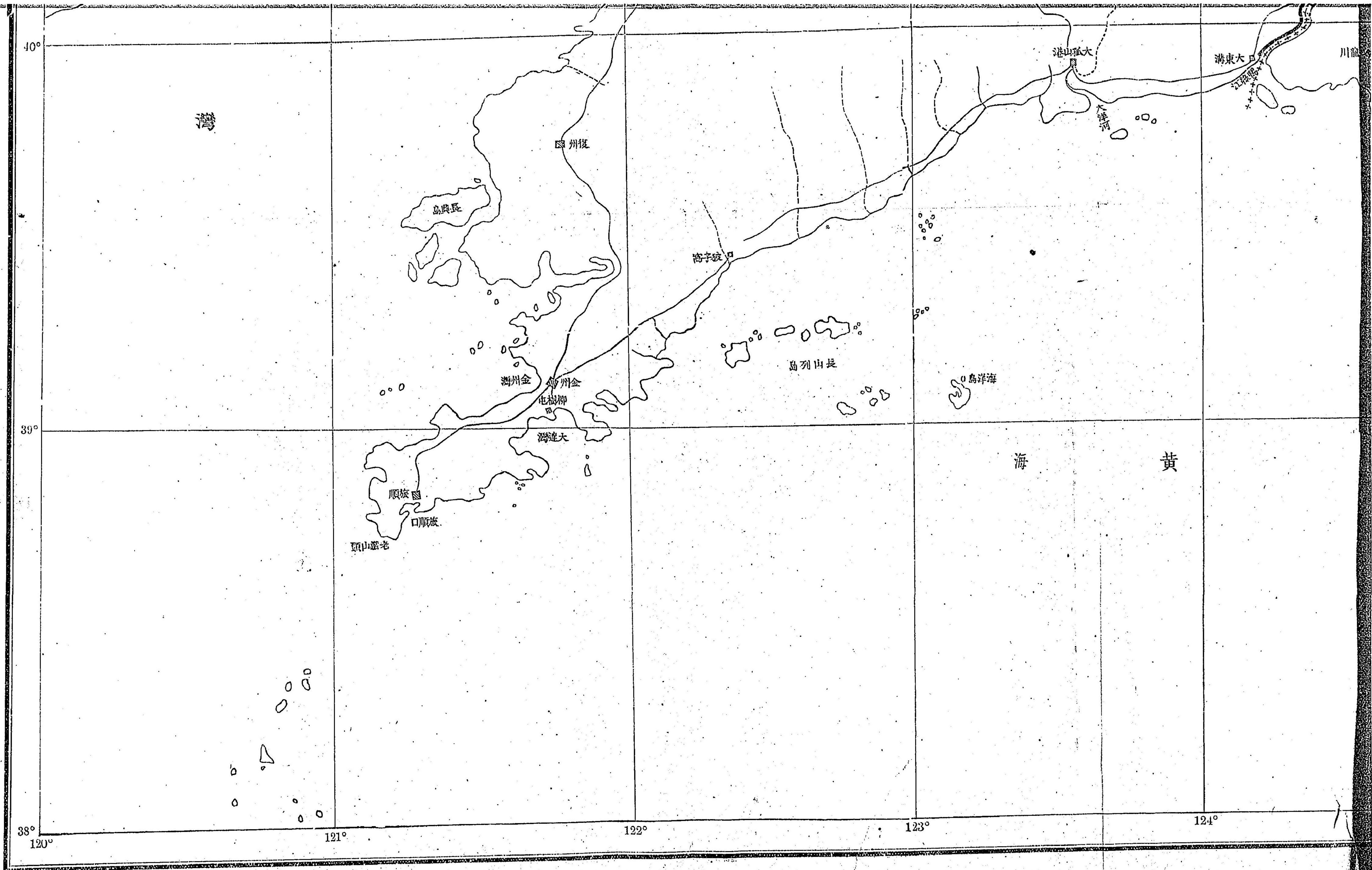
州定

明治二十八年五月 勅令





明治二十八年四月十七日即光緒二十一年三月二十
 三日下ノ關ニテ調印セシ媾和條約ニ附屬スル地圖



別約

第一條 本日調印シタル媾和條約第八條ノ規定ニ依リテ一時威海衛ヲ占領スヘキ日本國軍隊ハ一旅團ヲ超過セサルヘシ而シテ該條約批准交換ノ日ヨリ清國ハ毎年右一時占領ニ關スル費用ノ四分ノ一庫平銀五拾萬兩ヲ支拂フヘシ

第二條 威海衛ニ於ケル一時占領地ハ劉公島及威海衛灣ノ全沿岸ヨリ日本里數五里ノ地ヲ以テ其ノ區域ト爲スヘシ

右一時占領地ノ經界線ヲ距ルコト日本里數五里ノ地内ニ在リテハ何レノ所タリトモ清國軍隊ノ之ニ近ツキ若ハ之ヲ占領スルコトヲ許ササルヘシ

第三條 一時占領地ノ行政事務ハ仍ホ清國官吏ノ管理ニ歸スルモノトス但シ清國官吏ハ常ニ日本國占領軍司令官カ其ノ軍隊ノ健康安全紀律ニ關シ又ハ之カ維持配置上ニ付必要ト認メ發スル所ノ命令ニ服從スヘキ義務アルモノトス

一時占領地内ニ於テ犯シタル一切ノ軍事上ノ罪科ハ日本國軍務官ノ裁判管轄ニ屬スルモノトス此ノ別約ハ本日調印シタル媾和條約中ニ悉ク記入シタルト同一ノ效力ヲ有スルモノトス

右證據トシテ兩國全權大臣ハ之ニ記名調印スルモノナリ

明治二十八年四月十七日即光緒二十一年三月二十三日下ノ關ニ於テ一通ヲ作ル

大日本帝國全權辦理大臣	內閣總理大臣	伊藤博文	印
大清帝國欽差頭等全權大臣	太子太傅文華殿大學士北洋大臣	李鴻章	印
大清帝國欽差全權大臣	直隸總督一等肅毅伯	李經方	印

天祐ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル大日本國皇帝(御名)此書ヲ見ル有衆ニ宣示ス
朕親シク明治二十八年四月十七日下ノ關ニ於テ帝國全權辦理大臣大清帝國全權大臣ノ記名調印シ

明治二十八年五月 勅令 無號

タル購和條約及別約ノ各條目ヲ閱覽點檢シタルニ善ク朕ノ意ニ適シ問然スル所ナキヲ以テ右條約及別約ヲ嘉納批准ス
神武天皇即位紀元二千五百五十五年明治二十八年四月二十日廣島行在所ニ於テ親カラ名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム

御名 國璽

外務大臣子爵陸奥宗光 印

議定書

大日本帝國皇帝陛下ノ政府及大清國皇帝陛下ノ政府ハ本日調印シタル購和條約中ノ意義ニ付將來誤解ヲ生スルコトヲ避ケムト欲スル目的ヲ以テ雙方ノ全權大臣ハ左ノ約定ニ同意セリ

- 第一 本日調印セシ購和條約ニ附スル所ノ英譯文ハ該條約ノ日本文本文及漢文本文ト同一ノ意義ヲ有スルモノタルコトヲ約ス
 - 第二 若該條約ノ日本文本文ト漢文本文トノ間ニ解釋ヲ異ニシタルトキハ前記英譯文ニ依テ決裁スヘキコトヲ約ス
 - 第三 左ニ記名スル所ノ全權大臣ハ本議定書ハ本日調印シタル購和條約ト同時ニ各兩帝國政府ニ提供シ而シテ該條約批准セラルトキハ本議定書ニ掲載スル所ノ諸約定モ別ニ正式ノ批准ヲ要セスシテ亦兩帝國政府ノ可認セシモノト見做スヘキコトヲ約ス
- 右證據トシテ兩帝國全權大臣ハ之ニ記名調印スルモノナリ
- 明治二十八年四月十七日即光緒二十一年三月二十三日下ノ關ニ於テ二通ヲ作ル
- 大日本帝國全權辦理大臣 內閣總理大臣 伊藤博文 印
從二位勳一等伯爵
大日本帝國全權辦理大臣 從二位勳一等子爵 陸奥宗光 印

大清帝國欽差頭等全權大臣 太子太傅文華殿大學士北洋大臣 李鴻章 印
直隸總督一等毅伯
大清帝國欽差全權大臣 二品頂戴前出使大臣 李經方 印

御名 御璽

陸軍大臣伯爵露山縣有朋

明治二十八年五月十三日

朕日清戰役ノ爲ニ陸軍將校等平時定員ニ超過シタル者ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

勅令第六十四號(官報 五月十五日)

日清戰役ノ爲ニ大本營軍司令部其ノ他各部各隊ニ附屬シタル陸軍將校同相當官高等文官准士官下士又ハ判任文官ニシテ平時定員ニ超過シタル者ハ此ノ勅令公布ノ日ヨリ一箇年間陸軍諸官衙及團隊定員外ノ職員トシテ之ヲ置クコトヲ得

日清戰役中進級シタル陸軍將校同相當官准士官及下士ハ此ノ勅令公布ノ日ヨリ三箇年間定員令規定ノ階級ニ依ラス前官ノ職務ニ服セシムルコトヲ得但士官ハ准士官下士ノ職務ニ准士官ハ下士ノ職務ニ服セシムルコトヲ得ス

御名 御璽

陸軍大臣伯爵露山縣有朋
海軍大臣伯爵西鄉從道

明治二十八年五月十八日

朕明治二十七年六月以後同年勅令第六十四號ニ該當スル者ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

勅令第六十五號(官報五月二十一日)
明治二十七年六月以後同年勅令第六十四號施行以前ニ於テ同勅令ニ該當スル者ニハ其ノ規定ヲ適用ス

〔參照〕

明治二十七年九月八日勅令第六十四號ハ戰時若クハ事變ニ際シ陸海軍雇員軍艦乘組傭人、官用船舶ノ船員等ニシテ傷疾ヲ受ケ疾病ニ罹リ又ハ死歿シタルトキ手當金給與ノ件ナリ

朕陸軍高等官衙副官條例中改正追加ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年五月二十四日

陸軍大臣 伯爵 露山 縣有朋

勅令第六十六號(官報五月二十八日)

陸軍高等官衙副官條例第二條中第六項ノ次ニ左ノ一項ヲ加ヘ第七項ヲ第八項ニ第八項ヲ第九項ニ改ム

七 要塞副官

〔參照〕

勅令第三十三號陸軍高等官衙副官條例(明治二十一年五月十四日官報)抄錄
第二條 高等官衙副官ト稱スルモノ左ノ如シ
(下略ス)

朕臨時陸軍檢疫所ニ於テ檢疫ニ從事スル軍人軍屬ノ給與ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年五月二十八日

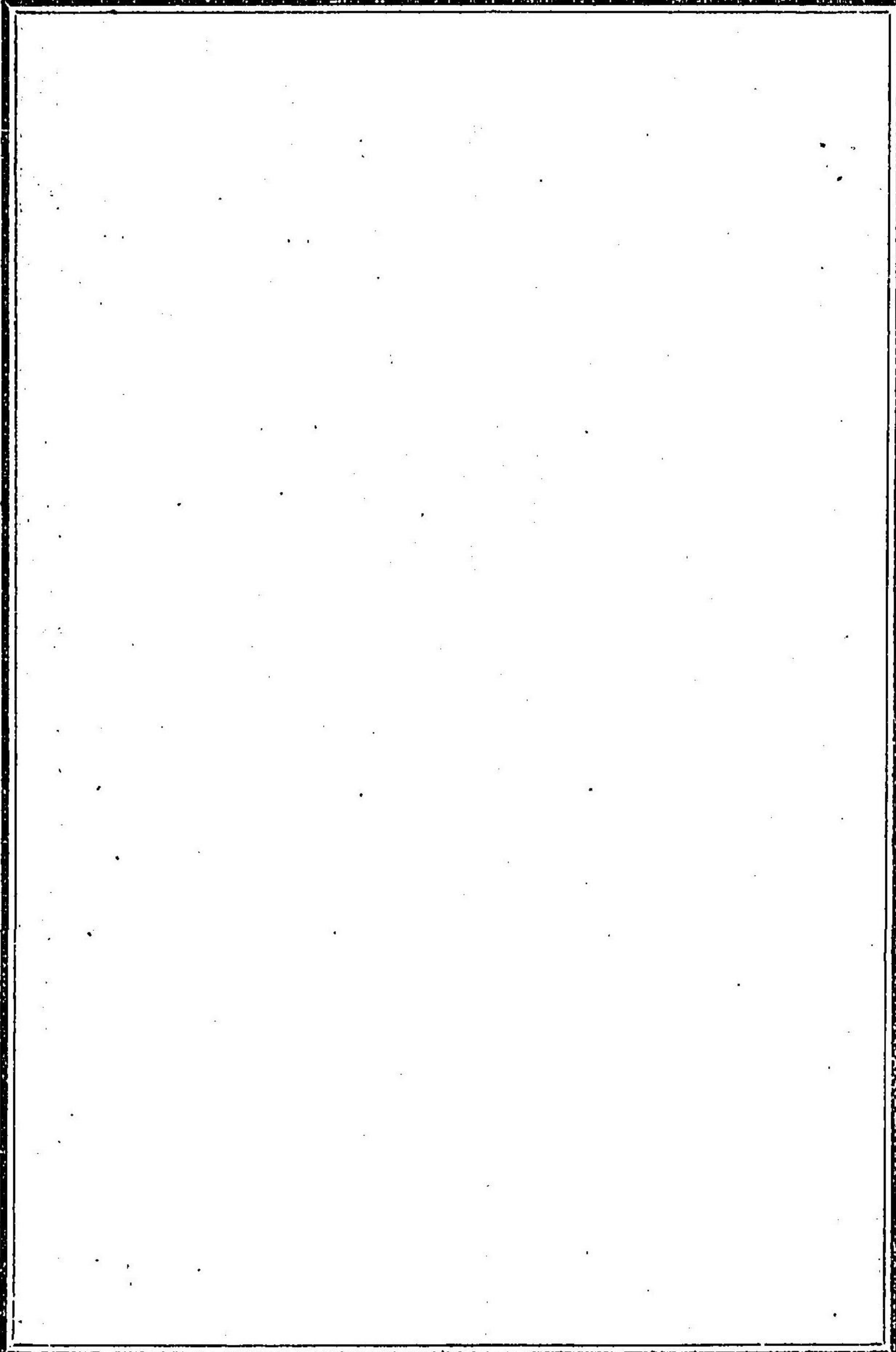
陸軍大臣 伯爵 露山 縣有朋

勅令第六十七號(官報五月二十九日)

臨時陸軍檢疫所ニ於テ檢疫ニ從事スル軍人軍屬ノ給與ハ陸軍戰時給與規則第七條ノ手當ヲ除ク外臨戰合圍地境內ニ在ル者ノ例ニ依ル

〔參照〕

勅令第三十三號陸軍戰時給與規則(明治二十七年八月一日官報)抄錄
第七條 戰地若クハ臨戰合圍地境ニ出發スル進士官以上營外居住ノ下士以下及文官ニハ手當トシテ一回限リ其ノ俸給若クハ給料ノ一箇月分ヲ給ス但單ニ往復ニ止ル者ハ一回限リ其ノ半額ヲ給ス
進士官以上營外居住ノ下士以下及文官ニシテ前條第二項ニ依リ俸給ヲ受クル者モ亦前項ニ同シ
豫備後備ノ軍籍ニアル將校並ニ相當官ニシテ召集ニ應ジ就職スル者ニハ一回限リ手當トシテ其ノ俸給ノ半箇月分ヲ給ス但第一項ノ手當金ヲ受クル場合ニ在テハ之ヲ本項ノ金額ニ差繼支給ス



朕臨時陸軍檢疫部事務官及書記任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年六月一日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文
陸軍大臣伯爵大山 巖

勅令第六十八號 (官報 六月四日)

臨時陸軍檢疫部事務官及書記ハ明治二十六年勅令第八十三號文官任用令ノ規定ニ依ラス事務官ニ在リテハ文官高等試験委員書記ニ在リテハ文官普通試験委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

朕文部省直轄諸學校職員定員中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年六月四日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文
文部大臣侯爵西園寺公望

勅令第六十九號 (官報 六月五日)

明治二十六年勅令第八十七號第一條中東京美術學校助教授ノ下十八ヲ十三ニ改ム

朕占領地總督部條例編制備考中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年六月四日

陸軍大臣 伯爵 大山 巖

勅令第七十號 (官報 六月五日)
占領地總督部條例編制備考中(四)ヲ左ノ如ク改正ス
民政部事務官ハ高等文官ヲ用ユルコトヲ得又本表ノ外民政支部ニハ支部長トシテ佐尉官若クハ高等文官一名事務官トシテ將校同相當官若クハ高等文官若干ヲ置キ又憲兵下士及各兵科下士又ハ判任文官憲兵上等兵若干ヲ附ス但支部ノ數ハ管轄區域ノ廣狹ニ其職員ノ數ハ管區ノ大小ニ依リ適宜増減スルモノトス

〔參照〕

勅令第三十八號占領地總督部條例(明治二十八年四月四日官報)抄錄
備考

(四)本表ノ外民政支部ニハ佐尉官若クハ高等文官一名ヲ以テ長トシ之ニ將校同相當官若クハ高等文官憲兵下士及各兵科下士又ハ判任文官憲兵上等兵若干ヲ付ス但支部ノ數ハ管轄區域ノ廣狹ニ其職員ノ數ハ管區ノ大小ニ依リ適宜増減スルモノトス

朕傳染病豫防救治ニ従事スル官吏准官吏及備員ニ手當支給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
御名 御璽

明治二十八年六月六日

内務大臣 子爵 野村 靖

勅令第七十一號 (官報 六月七日)
傳染病豫防救治ニ従事スル官吏准官吏及備員ニシテ專ラ該病者又ハ病毒汚染ノ虞アル物品ニ接近スル者ニハ各其ノ俸給又ハ給料月額三分一以内ノ月手當ヲ給スルコトヲ得

但府縣ノ收入ヨリ俸給又ハ給料ヲ受クル官吏准官吏及備員ニシテ本官職ノ資格ヲ以テ従事スル者ニ給スル手當並ニ明治二十三年第二十四號布告傳染病豫防規則第十四條ニ依リ檢疫委員ト爲ル者ニ給スル手當ハ府縣ノ負擔トス

〔參照〕

第三十四號布告傳染病豫防規則(明治二十三年七月九日)抄錄
第十四條第一項

戊辰別流行ノ勢猛烈ナルトキハ地方長官ハ内務大臣ニ具狀シ其許可ヲ得テ醫師衛生官吏警察官吏郡區町村吏等ヨリ適當ノ人員ヲ選ビ檢疫委員トシテ豫防消毒ノ事務ヲ擔任セシムルコトヲ得

朕吳鎮守府造船支部條例廢止ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
御名 御璽

明治二十八年六月六日

海軍大臣 伯爵 西郷 從道

勅令第七十二號 (官報 六月七日)
吳鎮守府造船支部條例ハ明治二十八年六月十日限り之ヲ廢止ス

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ陸軍豫備徵員ニシテ清國及朝鮮國トノ交渉事件ニ付徵集セラレタル者ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年六月八日

陸軍大臣 伯爵 大山 巖

勅令第七十三號(官報 六月十日)

陸軍豫備徵員ニシテ清國及朝鮮國トノ交渉事件ニ付徵集セラレタル者ハ各師團復員ノ際常備隊ノ補缺ニ要スル者ヲ除ク外歸郷セシム其ノ歸郷スル者ニハ陸軍歸休兵條例ヲ適用ス
前項補缺ヲ要スル隊ハ陸軍大臣之ヲ指定ス

朕臺灣事務局官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年六月十三日

内閣總理大臣 伯耆伊藤博文

勅令第七十四號(官報 六月十四日)

臺灣事務局官制

- 第一條 内閣ニ臺灣事務局ヲ置キ内閣總理大臣ノ監督ニ屬セシム
- 第二條 臺灣事務局ハ臺灣及澎湖列島ニ關スル文武諸般ノ事務ヲ管理ス
- 第三條 臺灣事務局ハ臺灣總督ノ稟報報告等ニ就キ其ノ意見ヲ内閣總理大臣ニ具申ス
- 第四條 中央各官衙及臺灣總督間ニ往復スル文書ハ臺灣事務局ヲ經由スヘキモノトス
臺灣總督ニ對シテ中央各官衙ヨリ發スル文書ハ豫メ臺灣事務局ノ審査ヲ經ヘキモノトス
- 第五條 臺灣事務局ハ總裁副總裁各一人委員若干人ヲ以テ之ヲ組織ス
- 第六條 總裁ハ親任官副總裁ハ勅任官ヲ以テ之ニ充ツ
- 第七條 委員ハ勅任官ノ内ヨリ内閣總理大臣ノ奏請ニ依リ之ヲ命ス
- 第八條 總裁ハ調査及議事並ニ局務整理ニ關スル規則ヲ定メ内閣總理大臣ニ報告ス
- 第九條 總裁ハ議事ヲ整理シ局務ヲ内閣總理大臣ニ具申シ並ニ局務ヲ管理ス

第十條 總裁事故アルトキハ副總裁ヲシテ事務ヲ代理セシム

前項ノ場合ノ外副總裁ハ議事ニ於テ委員ト同一ノ資格ヲ有ス

第十一條 委員ハ議事ニ列スル場合ノ外總裁ノ命ニ依リ其ノ他ノ局務ヲ分擔スルコトアルヘシ

第十二條 總裁副總裁及委員ニハ一箇年千圓以内ノ手当ヲ給ス

第十三條 臺灣事務局ニ書記官二人ヲ置ク奏任トス其ノ官等俸給ハ別表ニ依ル

書記官ハ總裁ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第十四條 臺灣事務局ニ屬若干人ヲ置ク判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

(別表)

官等	年俸	官等	年俸	官等	年俸	官等	年俸
三	二千五百圓	等一	二千二百圓	等二	千八百圓	等三	千四百圓
四	二千二百圓	等四	千八百圓	等五	千四百圓	等六	千二百圓
五	二千圓	等六	千六百圓	等七	千二百圓	等八	千圓
六	千八百圓	等七	千四百圓	等八	千二百圓	等九	千圓
七	千六百圓	等八	千二百圓	等九	千圓	等十	八百圓
八	千四百圓	等十	八百圓				
九	千二百圓						
十	千圓						
十一	八百圓						
十二	六百圓						
十三	四百圓						
十四	三百圓						
十五	二百圓						
十六	一百圓						

朕外交官及領事官ノ試験ニ用ウヘキ外國語指定ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年六月十五日

外務大臣臨時代理

文部大臣 侯爵西園寺公望

勅令第七十五號(官報 六月十七日)

明治二十六年勅令第二百十三號外交官及領事官試験規則第四條ニ依リ差出スヘキ翻譯ニ用ウル外國語ハ必要ノ場合ニ於テハ試験期日公告ノ際豫メ其ノ種類ヲ指定スルコトヲ得

明治二十八年六月 勅令 第七十五號

〔參照〕

勅令第二百十三號 外交官及領事官試驗規則 明治二十六年十一月二十四日官報抄錄
第四條 外交官及領事官試驗ヲ受ケント欲スル者ハ其ノ出願書ニ履歴書及論文並ニ之ヲ英文、佛文又ハ獨逸文ニ翻譯シタルモノヲ添ヘ之ヲ試驗委員ニ差出スヘシ
前項ノ書類ハ總テ出願人ノ自筆タルヘシ

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ戒嚴解止ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年六月十八日

內閣總理大臣 伯爵 伊藤博文
陸軍大臣 伯爵 大山 巖

勅令第七十六號 (官報 六月十九日)

廣島縣下廣島市全部及字品ノ戒嚴ハ明治二十八年六月二十日限り解止ス

朕馬匹調査會規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年六月十八日

內閣總理大臣 伯爵 伊藤博文
農商務大臣 子爵 榎本武揚

勅令第七十七號 (官報 六月十九日)

馬匹調査會規則

第一條 馬匹調査會ハ農商務大臣ノ監督ニ屬シ馬制ノ整理及馬匹ノ改良ニ關スル事項ニ付農商務

大臣ノ諮詢ニ應シ意見ヲ開申ス

第二條 馬匹調査會ハ馬制ノ整理及馬匹ノ改良ニ關スル事項ニ付關係各省大臣ニ建議スルコトヲ得

第三條 馬匹調査會ハ會務整理ノ爲メ規則ヲ議定シ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第四條 馬匹調査會ハ會長一人委員二十五人以内ヲ以テ之ヲ組織ス

第五條 特別ノ事件ヲ審議スル爲ニ臨時必要ノ場合ニ於テ前條定員ノ外臨時委員ヲ命スルコトヲ得

第六條 會長委員及臨時委員ハ官吏又ハ學識若クハ經驗アル者ノ中ヨリ選定シ農商務大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス

第七條 會長ハ議事規則ニ依リ議事ヲ整理シ會議ノ決議ヲ農商務大臣ニ具申ス

第八條 會長事故アルトキハ農商務大臣ノ指名シタル委員ヲシテ事務ヲ代理セシム

第九條 馬匹調査會ニ幹事一人ヲ置キ農商務省高等官ヲ以テ之ニ充ツ

第十條 會長委員及幹事ニハ一箇年五百圓以内臨時委員ニハ事件ノ輕重ニ應シ其ノ都度相當ノ手當ヲ給スルコトヲ得

第十一條 馬匹調査會ニ書記ヲ置ク會長及幹事ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

書記ハ農商務省判任官又ハ其ノ他ノ者ヲ以テ之ニ充ツ

第十二條 書記ニハ事務ノ繁閑ニ應シ相當ノ手當ヲ給スルコトヲ得

第十三條 農商務大臣ニ於テ必要ト認ムルトキハ委員又ハ其ノ他ノ者ヲシテ馬制ニ關スル諸般ノ調査ヲナサシムルコトヲ得

御名 御璽

明治二十八年六月十八日

朕水産調査會及馬匹調査會ノ會長、委員、臨時委員旅費支給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

勅令第七十八號(官報六月十九日)
水産調査會及馬匹調査會ノ會長、委員、臨時委員ノ旅費ハ鐵道會議議長議員及臨時議員旅費支給規則ノ例ニ依リ之ヲ支給ス

御名 御璽

明治二十八年六月十九日

陸軍大臣伯爵大山 巖

朕陸軍戰時給與規則中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

勅令第七十九號(官報六月二十日)

陸軍戰時給與規則第九條第二項中「防寒」ノ二字ヲ削ル

〔參照〕

勅令第三百三十三號陸軍戰時給與規則(明治二十七年八月二日官報抄録)

第九條第二項

軍人軍屬ニハ必要ニ應ジ特種ノ防寒被服ヲ給與シ若クハ貸與スルコトヲ得軍人軍屬外ニシテ服役ニ從事スル者ニ在テモ亦同シ

御名 御璽

明治二十八年六月十九日

海軍大臣伯爵西郷從道

朕海軍兵學校條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

勅令第八十號(官報六月二十日)

海軍兵學校條例第十八條中「十九年未滿」ヲ「滿二十年以下」ニ改ム

〔參照〕

勅令第二百十七號海軍兵學校條例(明治二十六年十二月二日官報抄録)

第十八條

生徒ハ年滿十六年以上十九年未滿ニシテ海軍將校タラント志願スル者ニ就キ身體検査及學術試験ヲ爲シ合格シタル者ヨリ其ノ成績順序ニ從ヒ所要ノ人員ヲ採用ス

御名 御璽

明治二十八年六月十九日

海軍大臣伯爵西郷從道

朕海軍機關學校條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

勅令第八十一號(官報六月二十日)

海軍機關學校條例第十八條中「十九年未滿」ヲ「滿二十年以下」ニ改ム

〔參照〕

勅令第二百十八號海軍機關學校條例(明治二十六年十二月二日官報抄録)

第十八條

生徒ハ年滿十六年以上十九年未滿ニシテ海軍機關官タラント志願スル者ニ就キ身體検査及學術試験ヲ爲シ合格シタル者ヨリ其ノ成績順序ニ從ヒ所要ノ人員ヲ採用ス

明治二十八年六月 勅令 第八十號 第八十一號

除公使館ニ通譯官ヲ置キ公使館領事館及貿易事務館ニ通譯生ヲ置クノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年六月二十日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文
外務大臣臨時代理
文部大臣侯爵西園寺公望

勅令第八十二號(官報六月二十一日)

第一條 外交官及領事官試験規則ニ掲ケサル外國語ヲ通譯スルノ必要アル公使館ニ一等通譯官及二等通譯官ヲ置クコトヲ得
公使館一等通譯官ハ奏任トス
公使館一等通譯官ハ高等官六等公使館二等通譯官ハ高等官七等トス其ノ陞叙ニ關シテハ外交官領事官及貿易事務官官等令ヲ適用ス
第二條 公使館書記生及領事館書記生試験規則ニ掲ケサル外國語ヲ通譯スルノ必要アル公使館領事館及貿易事務館ニ通譯生ヲ置クコトヲ得
通譯生ハ判任トス

除通譯官及通譯生ノ俸給及旅費ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年六月二十日

外務大臣臨時代理
文部大臣侯爵西園寺公望

勅令第八十三號(官報六月二十一日)

第一條 公使館一等通譯官、公使館二等通譯官ノ俸給及旅費ハ其ノ官等ニ應ジ公使館三等書記官又ハ外交官補ニ關スル規程ヲ適用ス
第二條 公使館通譯生、領事館通譯生、貿易事務館通譯生ノ俸給及旅費ハ公使館書記生、領事館書記生ニ關スル規程ヲ適用ス

除通譯官及通譯生ニ外交官領事官赴任及賜暇規則ヲ適用スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年六月二十日

外務大臣臨時代理
文部大臣侯爵西園寺公望

勅令第八十四號(官報六月二十一日)

明治二十六年勅令第七十二號外交官領事官赴任及賜暇規則ハ公使館一等通譯官、公使館二等通譯官、公使館通譯生、領事館通譯生、貿易事務館通譯生ニモ之ヲ適用ス

除通譯生ニ領事官特別任用令ヲ適用スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年六月二十日

内閣總理大臣伯耆伊藤博文
外務大臣臨時代理
文部大臣侯爵西園寺公望

勅令第八十五號(官報六月二十一日)
明治二十六年勅令第八十八號領事官特別任用令ハ公使館通譯生、領事館通譯生、貿易事務館通譯生ニモ之ヲ適用ス

朕通譯官及通譯生任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年六月二十日

内閣總理大臣伯耆伊藤博文
外務大臣臨時代理
文部大臣侯爵西園寺公望

勅令第八十六號(官報六月二十一日)

第一條 公使館一等通譯官、公使館二等通譯官、外交官及領事官試験委員ノ銓衡ヲ經テ之ヲ任用シ、公使館通譯生、領事館通譯生、貿易事務館通譯生ハ公使館書記生又ハ領事館書記生タルヘキ資格ヲ有スル者ヨリ之ヲ任用ス

第二條 明治二十六年勅令第八十七號外交官領事官及書記生任用令第六條ハ公使館通譯生、領事館通譯生、貿易事務館通譯生ニモ之ヲ適用ス

〔參照〕

勅令第八十七號外交官領事官及書記生任用令(明治二十六年十月三十一日官報)抄録
第六條 本令ニ依リ任用シタル公使館書記生又ハ領事館書記生ニシテ在職滿二年以上ノ者ハ外務省判任官ニ外務省判任官ニシテ在職滿二年以上ノ者ハ公使館書記生又ハ領事館書記生ニ任用スルコトヲ得

朕貿易事務官公使館一等通譯官及公使館二等通譯官ノ待命ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年六月二十日

内閣總理大臣伯耆伊藤博文
外務大臣臨時代理
文部大臣侯爵西園寺公望

勅令第八十七號(官報六月二十一日)
貿易事務官、公使館一等通譯官及公使館二等通譯官ニシテ任所ナキ者ニハ明治二十六年勅令第八十八號外交官及領事官官制第八條ヲ適用ス

〔參照〕

勅令第八十四號外交官及領事官官制(明治二十六年十月三十一日官報)抄録
第八條 外交官又ハ領事官ニシテ任所ナキ者ハ待命外交官又ハ待命領事官トス
待命外交官及待命領事官ハ臨時外務省ノ事務ニ従事セシムルコトヲ得
待命外交官及待命領事官ハ滿三年ヲ以テ期トス期滿レハ其ノ官ヲ免スルモノトス

朕外交官領事官通譯官書記生通譯生定員令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年六月二十日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文
外務大臣臨時代理
文部大臣侯爵西園寺公望

勅令第八十八號(官報 六月二十一日)

外交官領事官通譯官書記生通譯生定員令

- 第一條 外交官領事官通譯官及書記生、通譯生ノ定員ヲ定ムルコト左ノ如シ
特命全權公使、辦理公使、代理公使ハ通シテ十八人
- 公使館一等書記官、公使館二等書記官、公使館三等書記官ハ通シテ十九人
- 總領事、一等領事、二等領事、貿易事務官ハ通シテ二十八人
- 公使館一等通譯官、公使館二等通譯官ハ通シテ三人
- 外交官補、領事官補ハ通シテ十八人
- 公使館書記生、公使館通譯生、領事館書記生、領事館通譯生、貿易事務館通譯生ハ通シテ六十七人
- 第二條 待命外交官、待命領事官、待命貿易事務官、待命公使館通譯官ハ前條定員ノ内ニ算入セス
- 待命外交官、待命領事官、待命貿易事務官、待命公使館通譯官ハ通シテ十五人以内トス
- 第三條 明治二十八年勅令第二百二十五號外交官領事官及書記生定員令ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

朕臨時臺灣電信建設部官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年六月二十四日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文
陸軍大臣伯爵大山 巖

勅令第八十九號(官報 六月二十五日)

臨時臺灣電信建設部官制

- 第一條 臨時臺灣電信建設部ハ陸軍大臣ノ監督ニ屬シ臺灣島ニ交通スヘキ電信建設工事ヲ掌ル
- 第二條 臨時臺灣電信建設部ニ左ノ職員ヲ設ク
一 部長 一人
二 事務官 二人
三 技師 四人
四 書記 六人
五 技手 十五人
- 第三條 部長ハ陸軍將官若クハ陸軍工兵大佐ヲ以テ之ニ充テ陸軍大臣ノ指揮ヲ承ケ部務ヲ管理ス
但部長ハ必要ノ場合ニ於テ他ヨリ之ヲ任用スルコトヲ得
- 他ヨリ任用スル部長ハ勅任又ハ奏任トス
- 第四條 事務官ハ奏任トス部長ノ指揮ヲ承ケ部務ヲ分掌ス
- 第五條 技師ハ部長ノ指揮ヲ承ケ工務ヲ分掌ス
- 第六條 書記ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第七條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ工事ニ從事ス
第八條 他ヨリ任用スル部長及事務官ノ官等俸給ハ左表ニ依ル

官名	俸給						
	一級	二級	三級	四級	五級	六級	七級
部長	三千圓	二千五百圓					
事務官	一級二千五百圓	二級二千二百圓	三級二千圓	四級千八百圓	五級千六百圓	六級千四百圓	七級千二百圓
							八級千九百圓 九級千八百圓 十級千七百圓

朕臨時臺灣燈標建設部官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年六月二十四日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文
陸軍大臣伯爵大山 巖

勅令第九十號(官報 六月二十五日)

臨時臺灣燈標建設部官制

第一條 臨時臺灣燈標建設部ハ陸軍大臣ノ監督ニ屬シ臺灣島ニ交通スヘキ航路ノ燈標建設工事ヲ掌ル
第二條 臨時臺灣燈標建設部ニ左ノ職員ヲ置ク

- 一 部長 一人
- 二 事務官 二人

- 三 技師 二人
- 四 書記 十六人
- 五 技手 十八人

第三條 部長ハ陸軍將官若クハ陸軍工兵大佐ヲ以テ之ニ充テ陸軍大臣ノ指揮ヲ承ケ部務ヲ管理ス但部長ハ必要ノ場合ニ於テ他ヨリ之ヲ任用スルコトヲ得

第四條 事務官ハ奏任トス部長ハ勅任又ハ奏任トス

第五條 技師ハ部長ノ指揮ヲ承ケ工務ヲ分掌ス

第六條 書記ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第七條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ工事ニ從事ス

第八條 他ヨリ任用スル部長及事務官ノ官等俸給ハ左表ニ依ル

官名	俸給						
	一級	二級	三級	四級	五級	六級	七級
部長	三千圓	二千五百圓					
事務官	一級二千五百圓	二級二千二百圓	三級二千圓	四級千八百圓	五級千六百圓	六級千四百圓	七級千二百圓
							八級千九百圓 九級千八百圓 十級千七百圓

御名 御璽

朕陸海軍豫備後備將校及同相當官名譽進級ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十八年六月二十五日

海軍大臣 伯爵 西郷從道
陸軍大臣 伯爵 大山 巖

勅令第九十一號 (官報 六月二十六日)

陸海軍豫備後備將校及同相當官ニシテ戰時若クハ事變ニ際シ召集中功勞アリタル者ニハ召集ヲ解
キタルトキ特ニ官等ヲ進ムルコトヲ得

朕茲ニ緊急ノ必要アリト認メ樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ帝國憲法第八條ニ依リ臨時陸軍軍法會議並其
ノ管轄地内ニ於ケル陸軍刑法ノ適用ニ關スル事件ヲ裁可シ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年六月二十九日

- 内閣總理大臣 伯爵 伊藤博文
- 大藏大臣 伯爵 松方正義
- 海軍大臣 伯爵 西郷從道
- 陸軍大臣 伯爵 大山 巖
- 農商務大臣 子爵 榎本武揚
- 逓信大臣 渡邊國武
- 司法大臣 芳川顯正
- 外務大臣 臨時代理
- 文部大臣 伯爵 西園寺公望
- 文部大臣 伯爵 西園寺公望
- 內務大臣 子爵 野村 靖

勅令第九十二號 (官報 七月一日)

第一條 戰時若クハ事變ニ際シ特設又ハ分駐セル陸軍軍衙若クハ陸軍團隊ニハ必要ニ應ジ臨時陸
軍軍法會議ヲ設クルコトヲ得

事平定ノ後ト雖仍引續キ前項ノ軍衙又ハ團隊ヲ置クトキハ臨時陸軍軍法會議ヲ設クルコトヲ得
第二條 臨時陸軍軍法會議ノ管轄ハ特設軍衙又ハ分駐團隊ノ管轄若クハ守備地方ヲ以テ管轄トシ

明治二十八年七月 勅令 第九十二號

其ノ構成權限及治罪ニ關スル諸般ノ規定ハ本令ニ於テ特ニ定メタルモノヲ除ク外陸軍治罪法合
 國ノ地ノ軍法會議ノ例ニ依ル
 第三條 臨時陸軍軍法會議ハ管轄地内ニ在ル常人ノ犯罪及他ノ軍法會議ノ管轄ニ屬スル者ノ犯罪
 ヲ審判スルコトヲ得但高等軍法會議ノ管轄ニ屬スルモノハ此ノ限ニ在ラス
 第四條 臨時陸軍軍法會議ヲ設ケタル軍衙ノ長官若クハ國隊ノ長ノ其ノ軍法會議ニ關スル職權ハ
 陸軍治罪法第四條ノ長官ニ同シ其ノ副官及其ノ職務副官ト同シキ者ノ陸軍檢察ニ關スル職權
 ハ陸軍治罪法第三十一條ノ諸官ニ同シ
 第五條 臨時陸軍軍法會議ノ管轄地内ニ於テ陸軍刑法第五十三條第五十四條第五十六條第五十七
 條第五十八條第五十九條第六十條第六十一條ニ掲ケル所ノ罪ヲ犯ス者ハ軍人ニ非スト雖陸軍刑
 法ニ依テ處斷ス但其ノ豫備若クハ陰謀ニ止マル者ハ陸軍刑法第六十二條第六十三條ニ照シテ處
 斷ス
 第六條 本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

〔參照〕

大日本帝國憲法(抄錄)
 第八條 天皇ハ公共ノ安全ヲ保持シ又ハ其ノ災厄ヲ避クル爲緊急ノ必要ニ由リ帝國議會閉會ノ場合ニ於テ法律ニ代ルヘキ
 勅令ヲ發ス
 此ノ勅令ハ次ノ會期ニ於テ帝國議會ニ提出スヘシ若議會ニ於テ承諾セザルトキハ政府ハ將來ニ向テ其ノ効力ヲ失フコト
 ヲ公布スヘシ
 第六十九號布告陸軍刑法(明治十四年十二月二十八日)抄錄
 第五十三條 軍人敵ヲ利スル爲メ部下ノ兵隊若クハ軍事ニ關スル土地家屋船隻及兵器彈藥其他軍需ノ物品ヲ敵ニ付スル
 者ハ死刑ニ處ス
 第五十四條 軍人敵ヲ利スル爲メ土地道路ヲ要害險夷ヲ指示シ若クハ攻守ノ用ニ供ス可キ圖書及ヒ暗號記號ヲ開示シ若ク
 ハ秘密ヲ要スル兵器彈藥ノ製法其他軍機事情ヲ漏洩スル者ハ死刑ニ處ス

第五十六條 軍人敵前ニ在テ隊兵ノ滾走ヲ誘起シ若クハ其連絡集合ヲ妨害スル者ハ死刑ニ處ス
 第五十七條 軍人敵ノ爲メニ兵ヲ募ル者ハ死刑ニ處ス
 第五十八條 軍人敵ヲ利スル爲メ軍事ニ關スル家屋船隻及ヒ陸軍兵器彈藥其他軍需ノ物品若クハ機關ノ用ニ供ス可キ道路
 橋梁森林汽車電線ヲ毀壞シ若クハ火ヲ放テテ之ヲ燒燬スル者ハ死刑ニ處ス
 第五十九條 軍人敵ヲ利スル爲メ兵器彈藥其他軍需物品ノ缺乏ヲ致ス者ハ死刑ニ處ス
 第六十條 軍人敵ヲ利スル爲メ叫呼喧嘩シ若クハ進言飛語ヲ爲ス者ハ死刑ニ處ス
 第六十一條 軍人敵ノ同謀ヲ誘導助成隱匿シ若クハ敵ヲ利スル爲メ降附人ヲ誘走セシメ及ヒ妨害スル者ハ死刑ニ處ス
 敵ヲ利スル爲メ音信ヲ通スル者亦同シ
 第六十二條 軍人前敵ニ掲ケル所ノ罪ヲ犯サントシテ未ダ遂ケサル者及ヒ其豫備ヲ爲ス者ハ各本條ニ照シ一等ヲ減ス
 其陰謀ヲ爲シ未ダ豫備ニ至ラサル者ハ二等ヲ減ス
 第六十三條 軍人前敵ニ掲ケル所ノ罪ヲ犯サントシテ其豫備若クハ陰謀ヲ爲スト雖モ未ダ其事ヲ行ハサル前ニ於テ自首
 スル者ハ本刑ヲ免シ六月以上三年以下ノ監禁ニ付シ將校ハ副官ヲ附加ス
 法律第二號陸軍治罪法(明治二十一年十月二十日官報)抄錄
 第四條 長官ト稱スルハ軍團長團長軍法會議ヲ管轄スル旅團長及ヒ合團ノ地ノ司令官ヲ謂フ
 第三十一條 陸軍檢察官ハ左ニ記載シタル諸官ヲ以テ之ニ充ン
 一 旅團ノ將校下士
 二 師團副官
 三 旅團副官
 四 警備隊司令官

御名 御璽

明治二十八年七月三日

勅令第九十三號(官報七月四日)

内閣總理大臣伯爵伊藤博文
農商務大臣子爵榎本武揚

生絲検査所官制

第一條 各生絲検査所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長

技師

技手

書記

第二條 所長ハ一人奏任トス技師ヲシテ之ヲ兼ネシム農商務大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所中全般ノ事務ヲ掌理ス

第三條 技師ハ上官ノ指揮ヲ承ケ所務ヲ掌ル

第四條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ所務ニ従事ス

第五條 書記ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

第六條 各生絲検査所ヲ通シテ專任技師五人專任技手七人專任書記七人ヲ以テ定員トス

朕臨時臺灣電信建設部及臨時臺灣燈標建設部ノ事務官及書記ニ明治二十八年勅令第六十八號ヲ適用スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年七月三日

勅令第九十四號(官報 七月四日)

臨時臺灣電信建設部及臨時臺灣燈標建設部事務官及書記ノ任用ニハ明治二十八年勅令第六十八號ヲ適用ス

内閣總理大臣 伯爵伊藤博文
陸軍大臣 伯爵大山 巖

(參照)

勅令第六十八號(明治二十八年六月四日官報)
臨時陸軍検査部事務官及書記ハ明治二十六年勅令第八十三號文官任用令ノ規定ニ依ラス事務官ニ在リテハ文官高等試験委員書記ニ在リテハ文官普通試験委員ノ銜稱ヲ經テ任用スルコトヲ得

朕憲兵條例ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十八年七月三日

勅令第九十五號(官報 七月四日)

憲兵條例

第一章 總則

第一條 憲兵ハ陸軍兵ノ一ニシテ陸軍大臣ノ管轄ニ屬シ軍事警察、行政警察、司法警察ヲ掌ル其ノ戰時若クハ事變ニ際シ特ニ要スル服務ハ別ニ之ヲ定ム

第二條 憲兵ノ職掌軍事警察ニ係ルモノハ陸軍大臣及海軍大臣ニ隸シ行政警察ニ係ルモノハ内務大臣ニ隸シ司法警察ニ係ルモノハ司法大臣ニ隸ス

第三條 憲兵ハ行政警察、司法警察ニ係ル事件ニ付警視總監北海道廳長官府縣知事東京府及檢事ノ指示ヲ承ク

明治二十八年七月 勅令 第九十五號

第四條 憲兵ハ其ノ職務上ニ關シ正當ノ職權ヲ有スル者ヨリ要求アルトキハ直ニ之ニ應スヘシ

第五條 憲兵ハ左ニ記載ニル場合ニアラサレハ兵器ヲ用ウルコトヲ得ス

第一 暴行ヲ受クルトキ

第二 其ノ占守スル所ノ土地若クハ委託セラレタル場所又ハ人ヲ防衛スルニ兵力ヲ用ウルノ外他ニ手段ナキトキ又ハ兵力ヲ以テセサレハ抗抵ニ勝ツ能ハサルトキ

第六條 必要ノ場合ニ際シ内務大臣陸軍大臣協議シテ憲兵ヲ一時其ノ師管外ニ分派スルコトヲ得

第二章 配置編制

第七條 東京ニ憲兵司令部ヲ置キ各師管ニ憲兵隊ヲ配置ス其ノ管轄區域ハ師管ノ區域ニ依ル但一府縣ニシテ兩師管ニ跨ルモノハ其ノ府縣廳所在地ヲ管轄スル憲兵隊ノ管轄ニ屬ス

第八條 各師管ノ衛戍地要塞地鎮守府北海道廳各府縣廳所在地及其ノ他ノ要地ニ漸次憲兵分隊ヲ置キ其ノ管轄區域ヲ憲兵管區トス

第九條 各管區ヲ數箇ノ憲兵巡察區ニ分置シ各巡察區ニ憲兵一伍若クハ數伍ヲ配置ス

第十條 憲兵管區ノ區域ハ内務大臣陸軍大臣協議シテ之ヲ定メ憲兵巡察區ハ憲兵隊長ヨリ警視總

監北海道廳長官府縣知事東京府ニ協議シテ之ヲ定ム

第十一條 憲兵司令部ノ職員左ノ如シ

憲兵司令官 憲兵大佐

副官 憲兵大中尉

軍吏

書記 憲兵下士軍吏部下士若クハ屬

第十二條 憲兵隊ノ職員左ノ如シ

本部

隊長 憲兵中少佐

副官 憲兵大中尉

軍吏

下副官(准士官)

書記

分隊長

書記

上等伍長(准士官)

伍長

但上等伍長ヲ置カサルコトヲ得

憲兵上等兵

爲ス

第十三條 憲兵上等兵五名乃至十二名ヲ以テ一伍トシ數伍ヲ以テ一分隊トシ數分隊ヲ以テ一隊ト

時宜ニ依リ一伍中ノ若干名ヲ乘馬兵トナス

第十四條 憲兵隊ハ師管ノ番號ヲ附シ憲兵分隊ハ府縣名ヲ冠ス但一府縣ニ分隊二箇以上ヲ置クト

キハ番號ヲ附ス

第三章 職務

第十五條 憲兵司令部ハ全國ノ憲兵隊ヲ統轄シ司令部ノ事務ヲ總理ス

第十六條 憲兵司令部非常若クハ緊要ノ事件アルヲ知リタルトキハ速ニ内務大臣陸軍大臣海軍大

臣司法大臣ニ申報スヘシ

第十七條 憲兵司令官ハ軍紀風紀訓練教育及職務履行ノ程度ヲ檢閲スル爲メ必要ト認ムル時機ニ於テ各憲兵隊ヲ巡視シ其ノ景況ヲ陸軍大臣ニ申報スヘシ

第十八條 憲兵隊長ハ部下ヲ董督シ其ノ勤務方法ヲ指定シ隊中ノ事務ヲ總理ス

第十九條 憲兵隊長ハ地方ノ情勢ヲ審ニシ非常若クハ緊要ノ事件ヲ知リタルトキハ速ニ警視總監北海道廳長官府縣知事東京府及其ノ地所在ノ檢事長檢事正及憲兵司令官ニ申報スヘシ

第二十條 憲兵分隊長ハ管區内ノ情勢ヲ審ニシ部下ヲ指揮シ分隊ノ事務ヲ處理ス又管區内ノ事情ハ常ニ地方警察官ト相互諜報スヘシ

第二十一條 憲兵上等伍長及伍長ハ憲兵上等兵ノ勤務ヲ指示監督シ且巡察區内ヲ巡視シ其ノ事情ヲ審ニスヘシ

第二十二條 憲兵上等兵ハ常ニ巡察區内ヲ畫シテ巡察シ其ノ事情ヲ審ニスヘシ但特ニ上官又ハ檢事ノ命アルトキハ自他ヲ區畫スルノ限ニアラス

第二十三條 憲兵ノ勤務諸報告等ニ係ル細則ハ各主管大臣之ヲ定ム

第四章 補充

第二十四條 憲兵士官下士ノ補充ハ陸軍武官進級條例ニ依ルノ外各兵科士官下士ノ内ヨリ選任ス但二等軍曹ハ憲兵上等兵中一箇年以上其ノ職務ニ服シタル者ヨリ選任スルコトヲ得

第二十五條 憲兵上等兵ハ現役豫備役及後備役ニ在ル兵卒中志願ノ者ニシテ檢査合格ノ者ヨリ選

用ス

第二十六條 憲兵下士上等兵ノ選任ニ係ル細則ハ陸軍大臣之ヲ定ム

第五章 服役

第二十七條 憲兵下士上等兵ハ任命ノ日ヨリ更ニ七箇年間現役ニ服セシム

現役滿期ノ時前兵科ノ服役年月ヲ通算シ十二箇年ニ滿タサル者ハ通シテ十二箇年ニ滿ル迄後

備役ニ服セシム其ノ十二箇年ヲ過クル者ハ之ヲ免除ス

第二十八條 憲兵下士上等兵ハ服役滿期ノ後再服役ヲ請願スルコトヲ得再服役ハ三年ヲ以テ一期トシ年齡年限ニ至ル迄ハ數次請願スルコトヲ得但一期間ニ於テ年限年齡ニ達スル者ハ其ノ年限年齡迄トス

其ノ再服役滿期ノトキハ前條第二項ノ例ニ依ル

第二十九條 再服役ヲ請願スル者ハ現ニ所屬ノ部隊ニ於テ服役スルモノトス其ノ分隊ニ在テハ分隊長ト誓約シ憲兵隊本部ニ在テハ隊長ト誓約シ憲兵司令部ニ在テハ憲兵司令官ト誓約ス但本文ノ場合ニ於テ分隊長及隊長ハ憲兵司令官ノ認可ヲ請フヘシ

第三十條 再服役中轉隊若クハ轉職セシムルコトアリト雖從前ノ誓約ハ新ニ屬スル所ノ部隊ノ長ニ移ルモノトス

第三十一條 服役期限既ニ滿ツルト雖戰時若クハ事變ニ際シテハ期限ヲ延スコトアルヘシ

第三十二條 再服役滿期ニ至リタル者其ノ服役十二箇年ヲ過クルモ仍其ノ年數ヲ定メ後備役ニ服センコトヲ志願スルトキハ隊長憲兵司令官ノ認可ヲ得テ之ヲ許可スルコトヲ得但憲兵司令部附

ノ者ハ憲兵司令官ニ於テ許可スヘシ

憲兵司令官又ハ隊長前項ノ服役ヲ許可シタルトキハ本人所轄ノ大隊區司令官ニ通報スヘシ

第三十三條 憲兵下士上等兵現役中ハ左ニ掲クル者ニ限リ特ニ之ヲ免除ス

第一 本人ヲ要スルニアラサレハ一家ノ生計ヲ營ミ難キ事實ヲ證明シ願出ル者

第二 疾病若クハ傷痍ニ因リ現役ニ堪ヘ難キ者

第三 素行不修又ハ職務不適當ノ者

第四 疾病若クハ傷痍ニ因リ常備後備ノ役ニ堪ヘ難キ者

第五 疾病若クハ傷痍ニ因リ永久服役ニ堪ヘ難キ者